

# 北海学園大学

## 学芸員課程学事報告書-29

---

---

卷頭言 災い転じて福となす ～アクティブシニア層を取り込む～	北海学園大学教授 手塚 薫	1
学芸員課程 科目担当者から 博物館資料保存論の学事報告 ～授業の構成～	北海学園大学講師 水崎 祐	3
奥尻島での体験		
学芸員課程研習生受入雑感その2	奥尻町教育委員会 学芸員 稲垣 森太	23
奥尻島研修を終えて	人文学部日本文化学科1年 蟬塚 咲衣	27
奥尻島研修を振り返って	経済学部経済学科4年 添田 悠	31
奥尻島研修	法学部1年 佐々木理子	35
奥尻研修について	人文学部日本文化学科3年 高橋 景子	39
新ひだか町での体験		
新ひだか町博物館研修報告	工学部生命工学科2年 岸 真李奈	43
地域と歩む博物館の在り方	経済学部経済学科2年 久保田真由	46
新ひだか町博物館での研修を終えて	人文学部日本文化学科2年 森川日菜子	50
課程科目学生レポート		
ミニミュージアムのねらいと講評	北海学園大学教授 手塚 薫	54
博物館経営論課題《ミニミュージアム制作》を終えて	大学院文学研究科修士課程2年 山田 萌果	55
課程科目学生レポート		
博物館資料論 / 博物館資料保存論について	北海学園大学講師 水崎 祐	62
博物館資料ドキュメント『軍隊手牒』	文学研究科修士課程2年 海藤 梢	64
博物館資料ドキュメント『懐中時計』	人文学部日本文化学科1年 国分 美佑	74
博物館資料ドキュメント『トランペット』	経営学部経営学科3年 三國谷祐太	79
博物館資料ドキュメント『月見うどんの食品サンプルキーholder』	人文学部日本文化学科1年 山本ももか	88
博物館資料ドキュメント『トウシューズ』	人文学部日本文化学科1年 蟬塚 咲衣	93
博物館資料保存レポート『ペンギンのぬいぐるみキーholder』	人文学部日本文化学科4年 笹原 春香	99
編集後記		104

---

---

2017年3月

# 目 次

## 卷頭言

災い転じて福となす ~アクティブシニア層を取り込む~……………北海学園大学教授 手塚 薫 1

## 学芸員課程 科目担当者から

博物館資料保存論の学事報告 ~授業の構成~……………北海学園大学講師 水崎 祢 3

## 奥尻島での体験

学芸員課程研修生受入雑感その2	奥尻町教育委員会 学芸員	稻垣 森太	23
奥尻島研修を終えて	人文学部日本文化学科1年	蟬塚 咲衣	27
奥尻島研修を振り返って	経済学部経済学科4年	添田 悠	31
奥尻島研修	法学部1年	佐々木理子	35
奥尻研修について	人文学部日本文化学科3年	高橋 景子	39

## 新ひだか町での体験

新ひだか町博物館研修報告	工学部生命工学科2年	岸 真李奈	43
地域と歩む博物館の在り方	経済学部経済学科2年	久保田真由	46
新ひだか町博物館での研修を終えて	人文学部日本文化学科2年	森川日菜子	50

## 課程科目学生レポート

ミニミュージアムのねらいと講評	北海学園大学教授 手塚 薫	54
博物館経営論課題《ミニミュージアム制作》を終えて	大学院文学研究科修士課程2年 山田 萌果	55

## 課程科目学生レポート

博物館資料論 / 博物館資料保存論 について	北海学園大学講師 水崎 祢	62
博物館資料ドキュメント『軍隊手牒』	文学研究科修士課程2年 海藤 梓	64
博物館資料ドキュメント『懐中時計』	人文学部日本文化学科1年 国分 美佑	74
博物館資料ドキュメント『トランペット』	経営学部経営学科3年 三國谷祐太	79
博物館資料ドキュメント『月見うどんの食品サンプルキーホルダー』	人文学部日本文化学科1年 山本ももか	88
博物館資料ドキュメント『トウシューズ』	人文学部日本文化学科1年 蟬塚 咲衣	93
博物館資料保存レポート『ペンギンのぬいぐるみキーホルダー』	人文学部日本文化学科4年 笹原 春香	99
編集後記		104

\*学生レポートの掲載にあたり、体裁を整える必要から表記の統一などの手直しを行っています。

## 卷頭言

### 災い転じて福となす ~アクティブラジニア層を取り込む~

北海学園大学教授 手塚 薫

国内では国立大学の人文社会科学系学部の改組が話題となり、実学重視の方向性が顕著になっている。それに呼応するかのように、経営的な視点でむだや不合理を排除しようとする市場の言葉が勢いを増しているように感じる。経済成長が横ばいとなり、巨額の財政赤字を抱え、社会をよりよい安全な方向に導こうとするインセンティブがうまく働かなくなっているからではないか。国の教育への投資もしかり、原子力利用継続の議論もまたしかりである。日本の教育支出は 15 年間で 20% 以上減少しており、教育支出の GDP 比も OECD の平均より低い。

「人間」、「空気」、「水」、「森林」、「畠地」といったよう人が依存する基本的な資源は、生命を最優先する観点からも市場原理にゆだねるべきではないし、一代で蕩尽しつくし、将来の世代にツケを払わせていけないのは当然である。ローカル線は、市場原理を導入すればすべて廃線になってしまことになる。北海道に新幹線を通す場合を考えると、当然ながらデメリットも生起する。日本の狭い国土を広く使うには鉄道の速度を半減すればよい。これは不世出の経済学者宇沢弘文氏の言葉である。その心は、二つの地域を高速でつなげば、ごく小数の拠点駅以外のローカル駅はすたれることになる。

卒業後直ちに社会の役に立つ人材の育成を優先させる風潮が、じわじわと社会に浸透し、高校の教員によっては、就職時の心配から人文学部（文学部系）への進学を勧めない場合があるとも聞く。しかし、長期的なロードマップを見通すことはなかなか難しいことが多く、何が本当に必要で不要なのかは、よく吟味してからなければならない。気分に流されずに、よく考えることの重要性が今問われている。

少子高齢化社会を反映し、2013 年には 18 歳人口が現在より 20 万人減って 100 万人になるという予測がある。大学にとってはゆゆしき事態である。卒業後に、実社会ですぐに必要とされる知識や技能を身につける方が有利であると考え、人文社会科学系への進路が不人気になるのも、あながちわからないでもない。昨年大阪で会った NPO 教育法人の担当者から、そのような閉塞状況を打ち破る昨今話題になっている秘策があると聞いた。それは大学とシニア向け住宅の連携である。

日本では、関西大学文学部が 2007 年から、財団法人社会開発研究センター、有料老人ホームの運営を手がけるアンクラージュの 2 者と契約を結び、「カレッジリンク型シニア住宅」をスタートさせ、非常に高い人気を維持し続けているという。この施設の入居者を対象に、オンキャンパスプログラム（聴講生または社会人学生としての受け入れや大学主催行事への参加など）とオンラインコミュニティプログラム（シニア入居施設での出張講義など）を提供するというものである。入居者は若い学生とのふれあい

を通じて人生に張り合いが出て、健康状況にもよい効果を及ぼすこと。また、ふだん別世代と話すチャンスの少ない現代の若い学生にとっても、社会で様々な経験を積んだ高齢者の人生体験を聞くまたとない機会になる。とりわけ、介護福祉系に進路を求める若者にとって、高齢者と接する貴重な経験となっているようだ。

大学が主催する市民向け講座の会場でも、若者よりシニア層が圧倒的多数を占める時代である。団塊の世代の大量退職以降増え続けるアクティブシニア層の盛んな生涯学習意欲を充足するうえで、高等教育機関としての大学が果たすべき究極の社会的責任といえそうだ。ともすれば忘れられがちだが、縮小する一方の 18 歳人口をはじめとする若者への教育だけを担うことが大学の使命ではない。年齢にかかわりなく「知的好奇心」があるかぎり、一生涯続く人間形成に役立つ教養をより専門的に深めていくことを得意とする人文学が、社会貢献できる領域は決して少なくないのだという思いを強くした。出生→教育→就業→退職という、これまで当然とされてきたライフステージ 4 モデルはもはや成り立たなくなっている。確かに、学ぶ機会は人生のすべてのステージに開かれていると捉えられれば、閉塞状況から抜け出せるに違いない。

# 博物館資料保存論の学事報告 ~授業の構成~

北海学園大学講師 水崎 祐

## はじめに

2015年度は北海学園大学・学芸員課程において博物館資料保存論を担当させていただいだ。より効果的、かつ適確に学んでもらうために、自分なりに考えて講義に反映させた。一学期間に渡る授業について、学事報告として講義内容を説明する。

### 1. 博物館資料保存論

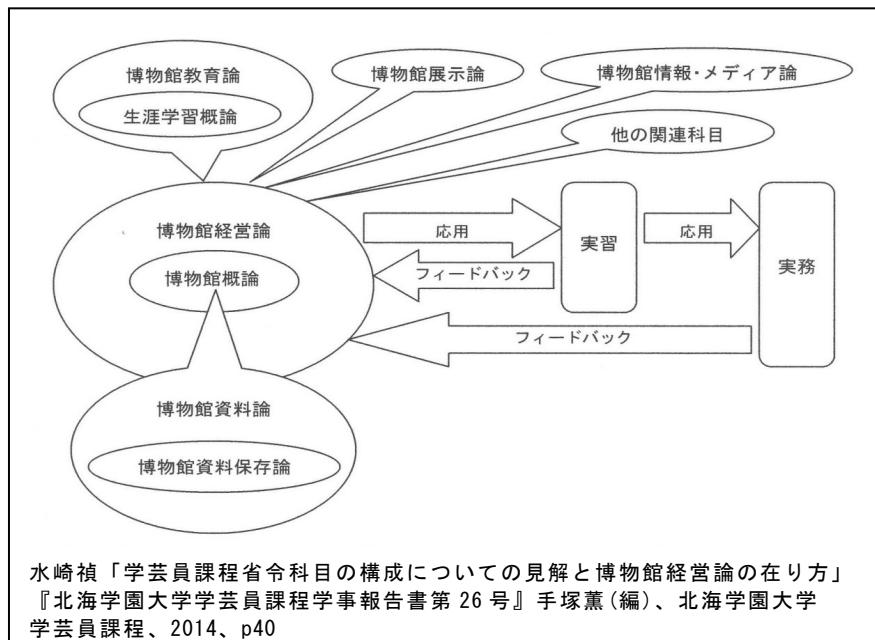
「博物館法」(1951)<sup>(1)</sup>の改正により学芸員課程省令科目に手直しが施され、それに伴い必修単位数も12単位から19単位へと増え2012年4月1日より施行<sup>(2)</sup>された。

博物館資料保存論は施行に伴い学芸員新課程に新たに加えられた科目の一つである。改正前の旧課程においては博物館資料論の中で資料保存について言及するのが通例であった。しかし、学芸員としてある程度の資料保存についての知識の重要性が認知され、それが具体的に実施されたのが博物館資料保存論の学芸員課程省令科目への追加といえる。

学芸員課程の科目の中での位置づけとしては博物館資料論の範疇から派生し独立・分離した科目といえる。  
(右図参照)

博物館資料論から分離した科目として、博物館資料の保存に関して15回分の講義が新たに割り当てられたことになるが、資料保存についての専門的知識、及び技術を習得するには十分とは言えない。資料保存に関しては、物質の劣化の仕組みについての深いレベルでの理解が必須であり、それは素材により異なる。各素材ごとに化学などの分野での大学院以上のレベル、専門研究機関での研究に匹敵する知識が求められる。また、資料の物理的变化の理解に加えて、資料の分野に応じた資料保存処置の導入の適確な判断が求められる。

この様な現実を考えると、学芸員課程の『博物館資料保存論』という科目で対応できる



内容は『博物館資料保存概論』といえる。<sup>(3)</sup> このような事情を踏まえ、授業のねらいとテーマを次のように設定して各回の講義を構成した。

「資料の保存は博物館の役目の一つであります。また、他の目的を達成するにあたっての資料の活用のためにも、博物館資料として適切に保存されていることが必須です。授業では、資料保存の際に重要な要素を、資料の物理的、および解釈的な特性とともに考えていきます。」

(北海学園大学学芸員課程博物館資料保存論 2015 年度シラバスより)

資料の保存にあたり、自身、或いは自館で処理できるのか、それとも外部の専門機関に依頼すべきなのか。また、時期や優先順位はどうなのか。これらの適切な判断を下すために資料保存の重要な要素について、いくつかの観点からとらえられるような内容を心掛けた。

次章以降では、上記の授業コンセプトを達成すべく設定した講義内容について説明をしていく。

## 2. 博物館資料の保存と修復について

博物館資料と、他のモノ（日用品、道具、商品、etc.）とでは、その保存と修復についての考え方には異なる。そこで「博物館資料の保存について」と題し、博物館資料保存のキーワードと基本的考え方についての説明から一学期間のコースを始めた。ここで強調したキーワードは以下の 2 項目である。

- ① 資料の「素材」と「種類」
- ② 資料の「保存」と「修復」（“conservation” & “restoration”）

「素材」と「種類」については後の講義でその考え方について、それぞれ説明する回を設けた。よってコース前半の始まりは、資料保存に対する考え方として「保存」と「修復」について実例を交えて説明をした。

以前は資料の保存に欠かせない事項として「修復」或いは“restoration”が、その中心的作業であった。破損・損失している箇所を原型に戻すことで資料としての価値が回復・維持されるという考え方である。

しかし、やがて資料保存の目的は「保存」或いは“conservation”による現状維持へと変化していった。これは資料のどの様な状態に資料的価値を見出すかの変化である。修復を施すことにより、破損・損失までの形を見せることができる。しかし修復の際に付加される素材、例えば接合のための接着剤や金具、塗料などは、資料のオリジナルの状態には無いものであり、現在（修復時）の素材である。また、表面の塗装等も資料製作者によるものではなく、修復者によるものとなってしまう。そこで、たとえ破損・損失していてもまずは現状を保存するための作業を第一とし、進行する劣化を止めるため、或いは現状では破損の可能性がある場合には修復作業について検討するという考え方が普及してきた。

いくつかの破片に破損してしまったセラミック製の皿をステイプラーでつなぎ合せた資料について、あとから修復のためにつけられたステイプラーの針はオリジナルにはついて

なかつたものであるとして取り外し、再びバラバラの破片の状態での保管になったという事例がある。ちなみにこの場合、元のバラバラの状態に戻したが、一度ステイプラーでつないだ際の針の穴が残ってしまったという。

資料に修復を施すか否かの判断は非常に重要であり、慎重な検討が求められる。上に挙げた事例に加え、学生の理解を促すために自然史資料と美術資料での実例を挙げた。

#### ◆自然史資料：恐竜（首長竜）の骨格の化石

損失部分の修復（復元）の事例として恐竜の化石の復元を挙げた。恐竜の化石は全ての骨格が発見されて取り出されることは稀であり、また通常はバラバラになった状態で発掘される。博物館では全身骨格として復元された資料が展示されることが多いが、損失している（発見されなかった）部位は石膏など現代の人工素材で作られるため、本来、恐竜の体を構成していたパーツではない。また、バラバラの状態になっている化石のパーツを組み立てるにあたり、接着用素材や金属製の留め具などを使うが、もちろんこれらも恐竜の体内にはなかった素材である。では、なぜこれらの人工素材をつけて全身骨格を復元するのか。これは実際の形やサイズを見せることにより、来館者が実際の恐竜をイメージ・体感するのを助長するのに活用できるという点に資料の価値を見出せるとの判断によることを学生に示した。

#### ◆美術資料：「最後の晩餐」<sup>(4)</sup>

美術資料の修復の事例としてはレオナルド・ダ・ヴィンチによる「最後の晩餐」を挙げた。現在、我々が目にすることができる「最後の晩餐」を描いたのは誰か。それは修復に携わり筆をとった修復師達ということになってしまふ。では、どの様な考え方のもと修復を施したのか。「最後の晩餐」は完成 20 年後位から激しく顔料が剥離し、これまで数回にも及ぶ書き足しの修復が行われてきた。修復師の手による修復がなければ、「最後の晩餐」というタイトルの壁画は消え去ってしまう。よって、ダ・ヴィンチ本人以外の人の手が加わってでも完成当時に近い鮮やかな色彩を復元するのが資料としての価値を保つことになる。修復師が色褪せたオリジナルの上から描いたものであるが、ダ・ヴィンチが創り出した構図や配色は維持され、後世へ伝えることができる。



レオナルド・ダ・ヴィンチ「最後の晩餐」  
サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会所蔵

上記の 2 つの具体的サンプルを挙げての説明に加え、他の異なる資料保存の解釈についても説明を施した。

アーカイヴ（文献資料）においては、その資料的価値は書かれている内容（情報）である。そのため他の分野の資料とは考え方方が異なる。言い方をかえると、アーカイヴはその

内容をコピー、スキャン、デジタル化等、媒体を変えてもその資料（史料）としての価値は維持される。そのため、例えば書類資料が金属製のステイプラーやクリップで留められている際、それが錆びて資料に悪影響を及ぼすことを懸念して、取り外すという選択肢についても検討される。

美術の分野では、現代美術（contemporary art）の新たな形態として、インスタレーションやパフォーミングアートなどが認識されるようになった。典型的で伝統的なパフォーミングアートはオペラなど舞台上で劇場の観衆を前にして行われるものであった。ここでの新たな形態としてのパフォーミングアートは、美術作品を制作するにあたって、そのコンセプト、状況、製作過程なども作品の一部であるという考え方である。出来上がった美術作品の状態維持を中心に考えられてきた資料保存であるが、製作過程の保存はその方法について多くの議論が予測される。現時点では通常その過程を映像として残し、文字記録によるコンセプトの説明と合わせて保存するにとどまっているといえる。<sup>(5)</sup>

動物園、植物園、水族館での特徴的資料形態としては、生きた（イキモノ）資料を扱っている点が挙げられる。イキモノ資料の特性については博物館資料論の授業で「生きた（イキモノ）資料の性質と扱い、および活用」として講義しているが、博物館資料保存論としても理解を深めるため、モノ資料とイキモノ資料の保存の特性の違いについて言及した。

★モノ資料： 破損していたり、劣化が進行している場合、放置していても自然には直らない。しかし、修理や安定処理を施すことにより修復されたり、劣化の進行を止めることができる。

★イキモノ資料： 動植物は死んでしまう。特に動物においては死は免れられないため、寿命による死はいたしかたがない。よって、事故や病気などによる不慮の死を防ぎ、そして次の世代を残すことが資料の保存となる。モノ資料の破損や劣化は、修理や安定処理なくしては直らないが、イキモノ資料の怪我や病気は治癒させることができある。

このような特性の相違点ともに動物園での事例を交えてイキモノ資料の保存についての考え方を説明した。

博物館資料の保存にあたっては上述したように資料の分野や特性によって臨機応変な解釈と対処が求められる。しかし一方では資料保存について考える際に、資料の実物の物理的状態の保存に集中しがちなのも事実である。そこで、「博物館資料とは？」という点について今一度思い起こす必要がある。博物館資料として成立するには、フィジカル（実物）とインテレクチュアル（情報）の両方が揃って管理・保管されていなければならない。そこで、忘

#### コレクションズ・マネージメント (Collections Management) について

- ★ フィジカル (Physical) : 物質としてのコレクション  
そのものの状態の管理
  - ミュージアム内で実施できる資料の保存環境設定や、  
基本的処置
  - 特殊技能を要する処置を施したり、修復したりするのは、その専門家 (object conservator, etc.) に依頼すべきなので、学芸員として求められる、のは資料の基本的な取り扱いと、専門家に依頼するかどうかを適切に判断する能力です
  - この、資料の基本的な取り扱いについては、徹底したものでなければならない
- ★ インテレクチュアル (Intellectual) : コレクションに関するデータと、それらを記録するシステムの管理
  - ☆ アメリカでは、コレクションズ・マネージメントのインテレクチュアルな部分を専門に担う「レジスター」(registrar) という役職が認知されている程、重要な任務です

水崎 2006、博物館資料論レジュメより

れがちである実物資料の情報（データ）についての管理の重要性についても、改めて言及した。

### 3. 博物館資料の劣化の起因要素

博物館資料保存についての多角的観点による解釈について説いた講義に続いて、博物館資料の劣化の起因要素についての講義を行った。その重要な要素を「光」、「湿度と温度」、「空気」についての3回の講義に分けて、それぞれ影響などを画像と共に説明した。

#### ◆博物館資料保存の要素：光<sup>(6)</sup>

劣化の起因要素についての一回目の講義は「光」による影響を取り上げた。光による劣化については一般的には色褪せが認識されているが、物質の強度にも影響を及ぼし、弱化させたり破壊する可能性もある。資料の素材により受ける影響は異なるが、多様に存在する素材の中でも特に有機（オーガニック）素材<sup>(7)</sup>は光の下でリスクにさらされている。また、例えば絵画でも使用された塗料の種類によって劣化の影響が異なる点も説明した。

これら光による影響の対策には光源について意識することが重要である。講義では自然光と3つ的人工光源として説明した。人工光源については、電球（白熱球）の熱による影響と蛍光灯のUV（紫外線）による影響について強調した。LED<sup>(8)</sup>については従来の光源よりも及ぼす悪影響は少ないのではないかとされているが、実際のところ普及してからの年数が影響を立証するに十分な時を経ていないため、未知といえる。LEDが資料に及ぼす影響については、今後の研究・実験による素材ごとのデータの蓄積が求められる。

光によるダメージを軽減するための考え方としては、光の強さを下げることと、照射時間を減らすことを意識して展示や収蔵の環境を設定することが重要である。

これら光による影響の基本的考え方の説明に加えて、光による劣化をしっかりとイメージできるように劣化の具体的な事例の画像をいくつか紹介した。

#### ◆博物館資料保存の要素：湿度と温度<sup>(9)</sup>

劣化の起因要素についての二回目の講義は「湿度と温度」についてである。ここでいう湿度とは厳密には相対湿度（RH、またはRelative Humidity）のことである。湿度の変化が博物館資料に及ぼす影響として、①大きさと形の変化、②化学反応、③生物劣化の三つを挙げ、それについて説明をした。

#### ◇大きさと形の変化

モノは水分（湿気）を吸収すると膨張し、水分（湿気）を放出すると収縮する性質をもっている。これによりモノは形状の変化を引き起こす可能性がある。特に有機物資料においては、ゆがみ、曲り、ねじれを引き起こす可能性が高くなる。水分の放出による乾燥では柔軟性の損失により繊維質の破損の可能性が高くなる。また、多くのミュージアム・コレクションは異なる素材をつなぎ合わせて構成されており、通常それらの素材が湿度に対

して同じ様に変化することはないので破損の原因となることについても説明した。

温度の変化が、資料が置かれている環境の湿度や資料に含まれている水分量に変化を与えるという点で温度設定の重要さについても言及した。また、温度変化により水分が状態変化（気体・液体・固体）を起こして資料を破損させる可能性についても説明した。これは水分を吸収しやすい有機素材のみならず、鉱石や金属など無機物素材においてもヒビなどの隙間で水分が温度変化により状態変化を引き起こすことで破損する可能性があるということについても説明した。

#### ◇化学反応

湿度の割合によって引き起こされる化学反応による劣化には、①金属の腐食、②紙と織物の色褪せ、③滲出性のガラスの変色の三つの現象が挙げられる。金属の腐敗は酸化による錆として知られる。紙と織物の色褪せについてであるが、一般的に光による色褪せは広く認識されている。しかし、湿度による影響もあり、綿、亜麻布、羊毛、絹などは、低湿度よりも高湿度で急速に色褪せる。ガラスの変色については、ある種のガラス製コレクションは湿気に対して敏感であることに起因する。一定の湿度を超えると表面に小滴（微小の水滴）が出来て細かいヒビが生じ、後に灰色、或いは乳白色の不透明化が生じることがある。そして、さらには小さな破片が剥離することもある。

#### ◇生物劣化

カビや害虫の発生・繁殖は湿度が高くなるとそのリスクが増す。しかし、湿度のコントロールのみでの害虫根絶は難しい。特に生物劣化対策では、相対湿度（RH）と温度の組み合わせの設定が重要である点を強調した。これは I.P.M. (Integrated Pest Management) で資料にとっての害虫・害獣・菌類が発生・繁殖しづらい環境を作ることにつながるからである。

このように相対湿度に関する資料劣化の形態と、温度との関わりを説明した。また、絵の具の色によって乾燥による影響が異なることを画像による事例で示した。

#### ◆博物館資料保存の要素：空気（大気汚染）<sup>(10)</sup>

劣化の起因要素についての3回目の講義は空気についてである。屋外においては大気としても捉えられる。大都市では空気中の浮遊汚物が資料に悪影響をおよぼす。これはいわゆる大気の汚染であり、屋外で大気にさらされている資料は直接影響を受ける。また、かなりの微粒子は空气中にとどまるのに十分に重い（比重が大きい）が、ミュージアム館内で懸念されるのは、それら（微粒子）自身の重さでとどまるのには小さすぎる微粒子であり、これらは建物の奥まで入り込んでしまう。

空気の汚染については、その発生源と、どの様な悪影響を及ぼすかについて屋外と屋内に分けて説明した。

屋外では発電所・自動車・ヒーターの燃料の燃焼による排気がその根源となる場合が多

い。煤（すす）やタールを含んでおり、吸収された亜硫酸ガスによる酸（acid）や鉄などの金属の痕跡が資料の腐食の原因になる。

屋内では家財道具や、人間の占有場所に汚す要因がある。繊維や剥がれ落ちた皮膚がホコリとして中に舞うと厄介な不純物として資料を汚すことになる。静電気により付着することもあれば、織物の生地に入り込んでしまうこともある。

汚れに対しては、日用品・生活用品と博物館資料とでは、その対策の根本的考え方が非常に分かり易く現れている。日用品・生活用品では汚れるとクリーニングすることが推奨されている。しかし、博物館資料においてはクリーニングという行為も資料を痛める要因とされる。よって、クリーニングをしなくとも良い環境を設定することが重要である。そのためには空気中の汚染についての対策は必須である。

これら空気中の浮遊物（粒子）による資料への悪影響に加え、特に室内においてはオフ・ガス（off-gas）についても気を付けなければならない。これらは金属、木材などから発せられるガスであり、長い時間をかけて資料を劣化させる。これらのガスの発生源は収蔵棚であったり、資料そのものから発せられる場合もおおい。セルロイドもガスを発する素材として知られている。収蔵棚や建物の建築素材については、悪影響をおよぼすガスを発する資材の使用を控えることはできる。しかし、資料そのものから発せられるガスについては、今のところ室内の換気が一般的な対処法である。

新築のコンクリート・ビルディングでのアルカリ性ガスの微粒子が油彩画、絹、ある種の染料と顔料（絵の具）を硬化させること、そしてアルカリ度が安全なレベルまで下がるには、通常2年ほど要することも基本的知識として触れた。

#### 4. 博物館資料の素材と種類について

第2章の冒頭にて博物館資料保存の基本的考え方のキーワードとして、①資料の「素材」と「種類」、②資料の「保存」と「修復」の2項目を挙げた。②については第2章にて取り上げているので、本章では①「素材」と「種類」について取り上げる。

博物館資料の保存について考える際に有効、かつ重要なのは、資料の「素材」と「種類」について着目することである。

##### ◆博物館資料保存と資料の素材について

「素材」については博物館資料保存の物理的側面に直結する。資料の物理的状態を良好に維持するためには、劣化の要因を理解し、その要因が素材に及ぼす影響について分析しなければならない。しかし、この影響は素材によって異なるため、的確な判断を下すには資料がどのような素材によって構成されているのかをしっかりと把握する必要がある。困難なのはいくつかの異なる素材が組み合わさって構成されている場合である。素材によって、劣化の要因や影響の度合いは異なり、また保存に適した環境設定（温度、湿度、光、etc.）も異なる。一つの資料に複数の構成素材が用いられている場合、無機物素材のみによって構成されている資料に比べ、無機物と有機物、或いは複数種の有機物素材によって

構成されている場合は厄介である。これは無機物素材に比べ、有機物素材の方が劣化の要因が多岐に渡るからである。

#### ◆博物館資料保存と資料の種類について

博物館資料の構成素材については、資料保存の技術的な部分としてその方法が述べられてきている。しかし、もう一つの重要な検討事項は、資料の種類である。資料の種類というのは、どの分野の資料として捉え、扱っているのかである。博物館として、どの様なコンセプトのもとで収蔵されている資料なのか、どこに資料としての価値を見出しているかである。同一のモノであっても保存について求められることが異なる。

資料の分野について「自動車」を例にすると以下のように捉えて解釈できる。

- ▶エンジン等の仕組みについては理工系
- ▶デザイン等については美術系、または理工系資料
- ▶特定のメーカーや、所有者についての歴史資料
- ▶歴史上の出来事に関連した自動車も歴史資料

デザインにおいてはその形状の美的要素を主に着目すると美術資料的要素が強くなり、形状の空気抵抗の影響などに着目すれば理工系資料的要素が強くなる。この様にどの分野として扱うのかにより、その資料が持つどのような特徴に資料的価値を見出すかが違ってくる。そして、資料的価値を見出された特徴の部分が保存対象の中心となる。

分かり易い例の一つとして、美術資料と民俗資料との違いがある。同じモノを資料として保存を考える際、美術資料として捉えた場合は付着した泥などの不純物は通常は取り除く対象となる。例外としては、その付着物が作者に由来する場合は意図的に残すことも考えられる。もちろん、安全に取り除く方法が確立されていない不純物については現状維持として、その方法の確立を待つこととなる。摩耗やキズ、破損箇所がある場合、修復を施すにあたっては第2章で挙げたダ・ヴィンチの『最後の晩餐』の例のように、「オリジナルの作者以外の手を加えないこと」と、「本来の形状を見せること」のどちらを重要視するかを慎重に検討しなければならない。

これに対して、道具としての民俗資料（民具）として扱う場合、金属部分のキズ、握ったことなどによる木製部分の摩耗は、使用された証拠であり、どの様に使用されたかを知るため、或いは示すための重要な部分である。また付着している泥などの不順物は情報の宝庫である。道具として使用されていた際、その場所の土、動植物に関する痕跡などが含まれているからである。よって必ずしもきれいに全ての付着物を取り除くとは限らない。金属部分の錆についても、錆の進行が止まり安定している状態であれば、そのままの状態での保存も選択肢であり、逆に進行中の錆については大胆に削ってでも確実に錆を取り除くという方法が選択される場合がある。

#### ◆保存に関する考え方と作業について：日用品 vs 博物館資料

この項目では、同じモノであっても、博物館資料の保存は日用品（日常での使用を目的としたもの）の手入れとは全く異なる行為であるということについて更なる説明をした。

この講義での重要事項は、通常の手入れの行為もまた、資料を痛める原因となりえることの理解である。パーツの取り外しと組み立てを繰り返し行うことにより接合部は摩耗する。磨くために布でこする行為は特に角や突き出た部分の表面を摩耗させる。塗装面やメッキ面ではより顕著にダメージが見て取れる。また、市販の掃除用洗剤は含まれている研磨剤により表面の摩耗を促したり、含まれている化学薬品によって資料の質に科学変化を及ぼしてしまう可能性がある。

日用品では頻繁に、或いは定期的にクリーニングを行うことを奨励していることが多い。一方、博物館資料においては、クリーニングという行為自体も資料を痛める要因であるとされる。よって、博物館資料の保存と管理においては、いかにクリーニングや保存処置をしなくともよい状態を維持するかが重要である。そのためには汚れや劣化の原因の無い、或いは極力少ない環境を設定することを第一として考える。資料の種類によっては定期的なクリーリングや処置を必要とするものもあるが、その必要がない場合は行わない。行わないと表現されるが、管理をしていないわけではない。資料を極力動かさない状態チェックを定期的、計画的に行い、異常が見られなければその環境下で継続して保存するという判断をしているのである。そして、もしも異常が見られた場合は、その資料の価値を損なわないベストな方法を検討することになる。この時に重要なのは資料に対する処置で終わってはいけないということである。クリーニングが必要となった原因、或いは処置が必要となった原因を追究し、保存環境の設定を見直すことが大切である。

一学期間にわたる博物館資料保存論の前半の講義は博物館資料の保存そのものについての考え方を中心に授業を行った。後半は博物館資料を保存・管理するにあたって必要な項目について、各講義で取り上げた。以下に続く章より、各項目にて言及した事項を説明する。

## 5. 博物館としての管理体制：災害対策＆防犯対策

博物館資料が劣化、損傷、紛失しないよう保存管理を行うのは当然であるが、時には自然災害のように我々が阻止しようとする努力をはるかに超えた威力や、道徳に反した人為的行為によって被害を受けることもある。この様な場合には、いかにしっかりとした事前対策が練られているかが、その行方を左右する。授業では災害対策と防犯対策に分けて講義した。

### ◆ 災害対策

ミュージアムの職員は常に災害を想定した準備を怠ってはならない。災害はその要因により自然災害と他の災害とに分けられる。自然災害は洪水、台風、竜巻、地震、火災などがある。他の災害については機械の故障、及び漏電による火災、水道管の破裂による水害、ガス管の破損、及び不注意によるガス爆発などが考えられる。これらの災害により、水、火、搖れ、衝撃による資料のダメージが懸念される。その災害対策については事前に準備

されていることが大切であり、四つの項目に分けられる。

- ①危険要因の事前チェック
- ②災害時に備えたチェック項目
- ③物理的対策
- ④災害により被害を受けた際の行動の指針

#### ◇危険要因の事前チェック<sup>(11)</sup>

事前チェックでは「何が過ちとなりえるのか？」を意識して、何が・何処が災害対策の重要な要素であるのかを調査する。

建物のチェックとしては立地条件、防火・防水の装置・設備を査定し、そこで起こり得る危険性を把握し、その対策を練る。内部設備においては発火の原因となり得る設備はもとより、水漏れの可能性がある所も把握して定期的にその場所を点検することが望まれる。水漏れに即座に気付かずに時が経過すると資料への直接的被害に加え、カビ、及び害虫の蔓延（繁殖）の原因ともなるからである。

#### ◇災害時に備えたチェック項目<sup>(12)</sup>

災害対策を練るにあたり、以下について確認することが大切である。

- ★職員は緊急時における資料、備品、装置の適切な取り扱いを心得ているか？
- ★緊急時対策について、資料保存専門家より講義、及び書面による手順を受けているか？
- ★書面による手順は中心的職員に行き渡っているか？
- ★収蔵資料は担当職員により、調査、在庫確認、及びこれらの再確認がなされているか？
- ★現行の記録の管理
- ★災害保険：保険の対象と、掛け金の適正さの見直し

建物の設備においては、消火器具、防火ドア、電源スイッチなどの位置と使用法の確認、そして避難の経路と手順についての確認も怠ってはならない。

資料のデータのバックアップ体制も確認する。登録カード、収蔵・展示資料のリスト等は複製（コピー）の維持・管理を忘れてはならない。資料名と登録番号の一覧などはデジタル・データでのバックアップだけではなく、アップデートされたものを印刷したアナログ・データでのバックアップもなされているのが望ましい。デジタル・データはその媒体の性質上、一度にその全てが失われてしまう可能性がある。一方、書類やカードとしてのバックアップは、一部が失われても、一部は残る可能性があるからである。館のシステムがダウンしても影響を受けないよう、また建物が崩壊しても紛失しないよう、資料データの複製（コピー）は、1セットはミュージアム敷地外で保管されているべきである。もし、なされていなければ、即座に取り掛かるべき事項である。災害を受けた際、資料の救出にあたりこれらのデータの有無は復旧に大きな影響をあたえる。

## ◇物理的対策

災害が起きた際に資料の被害を最小限に抑える収蔵、展示方法が物理的対策の範疇であるといえる。また、建物の構造も関わってくる。

建物の構造としては収蔵庫の位置による障害や懸念事項、そして HVAC<sup>(13)</sup>システムの通常時と災害時の作動状況についてミュージアムのスタッフはしっかりと理解していなければなければならない。

これらの理解の上で、それぞれの資料についてその特性のもと被害を最小限に食い止める収蔵・配架がなされているか確認する。防災に効果的な収蔵テクニックはその資料により異なるため、同様の資料を収蔵しているミュージアムでの事例や報告書を参考にして取り入れていく努力が求められるが、改善の余地が大いにある難題であることも忘れてはならない。

これについては興味深い事例がある。1995年1月に日本を襲った阪神淡路大震災の際、大阪市立美術館での事例である。絵画は通常スライド・ドアのようなパネルに掛けて収蔵される。当館で参考としたマニュアルによると地震の揺れによって絵画を掛けたスライド・パネルが動かないよう、パネルを引き出さない時は必ずロックするよう指示されていた。しかし、日常業務でのスライド・パネルの使用により災害時にロックがなされていないスライド・パネルもあった。ところが震災後に収蔵庫をチェックすると、しっかりとロックがしてあったスライド・パネルからは多くの絵画が落ちていたという。一方、ロックし忘れていたスライド・パネルについては、揺れに対してパネルがレール上を動くことにより免震効果が生まれ、ほとんどの絵画は落ちなかつたという。<sup>(14)</sup>

このように、これまで良いとされてきた方法が必ずしも正しいとは限らない。防災の資料ごとの具体的方法論は未だ途上であり、多くの事例と報告を参考に、常時アップデートする必要がある。

## ◇被害を受けた際の行動の指針

ここでの行動指針とは、先に述べた災害時に備えたチェック項目における緊急時対策において、災害に襲われた際の資料救出、およびミュージアム復旧の手順である。災害により被害を受けてからでは、どの様に行動をするのか具体的な計画を立てている時間はない。その間にも被災した資料の劣化は進んでしまう。さらに被災直後の状況下において新たな計画を練るにあたり冷静な判断基準が保たれているかは疑問である。よって、災害時の行動指針を事前に準備し、その内容についてのスタッフの理解度は定期的に確認されなければならない。災害時においては事前対策と、その浸透度が迅速な復旧の行方を左右する。

授業では災害復旧計画の過程における以下の三つの局面（段階）<sup>(15)</sup>を示し、それぞれの段階での行動内容、および留意事項について説明を施した。

段階1：損害の探査・発見

段階2：被害の査定と記録

段階3：復旧と修復

また、先に述べた現行記録の管理とバックアップの有無が、復旧の各段階においての円滑な作業に関わってくることも強調した。

#### ◆防犯対策

防犯については主に盜難対策について講義した。まずは博物館資料、特に美術資料の盜難事件をいくつか取り上げ、博物館資料をターゲットにした盜難がいかに継続的に多発しているかを話した。防犯についても事前対策が重要であるが、建物の構造、人員配置、警備システムなどについて言及をしたうえで、ミュージアムの職員同士で「窃盗計画についての会議」を持つことが効果的対策につながると話した。私が以前担当した博物館経営論でのミュージアム・エヴァリュエーション（博物館評価・査定）についての講義の際、授業で紹介した「博物館の評価についてのチェックポイント」（Kavanagh 1994<sup>(16)</sup>）に「（博物館資料を）盗もうと思えば盗めるか」というチェック項目がある。このチェック項目に由来し、ミュージアム職員が「どのようにしたら自分たちが務める博物館の資料を盗めるか」を真剣に話し合うことが良いのではと提案した。もちろん博物館資料を盗むことを推奨しているわけではない。自分たちの館の盜難に対する穴を探すことにより、その対策を講じることができるという考えに基づく。いかに窃盗を試みる側の視点に立って館の欠点を探せるかが、効果的な防犯対策につながる。

#### ◇内部者による盜難<sup>(17)</sup>

ミュージアムでの盜難においては内部者による盜難（Insider Theft）もかなり多く発生している。授業では、まず三つの事例を紹介した。各事例の犯人は以下のとおりである。

◎以前、務めていた警備員

◎資料の研究のため、長年に渡り収蔵庫や研究室等に出入りしていた大学教授

◎理事会のメンバー

ここから見てとれる犯人の共通点は内部事情（構造、スケジュール、etc.）に精通しているということである。また、二つ目と三つ目の事例については、慣れ合いによる信頼がアダとなっているともいえる。これらの要因から、「規則の徹底と実行」が非常に大切であるといえる。この場合の「規則」はアクセス制限であり、不必要的進入は排除するということである。各場所の鍵を持つことが許させる職員の限定、および進入の際に鍵を持つ権限を有する職員の同伴が必要とされる区域の決定が規則として明記されているべきである。ここで最も重要なのは「徹底と実行」であり、難しいことでもある。顔見知りの同僚については、特に鍵の管理責任者にとって忙しくて手が離せない時には例外的な対処で進入や入室を認めてしまいがちである。そして例外的対処が日常となってしまう可能性も少なくはない。アクセスの「規則の徹底と実行」においては職員間での規則の理解が必須である。

私個人の経験ではネブラスカ大学州立博物館（University of Nebraska State Museum）および関連施設においては、この点が非常に徹底していたとの強い印象が残っている。

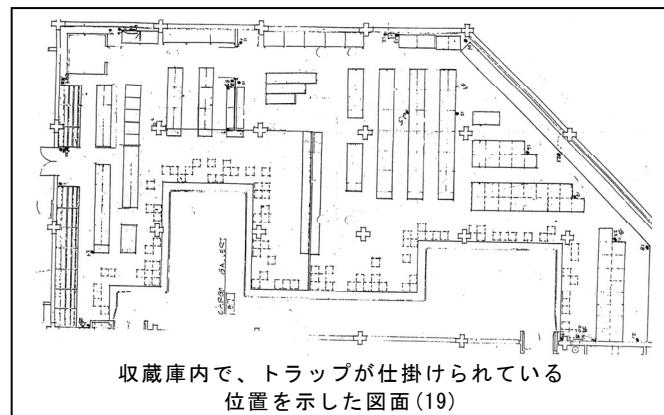
## 6. 博物館としての管理体制：I.P.M.

I.P.M. (Integrated Pest Management) は「総合的害虫・害獣管理」、「総合的有害生物管理」などいくつかの日本語訳が存在する。博物館資料保存論が学芸員課程省令科目となる以前の旧課程では博物館資料論の中で I.P.M.について説明をする回を設けていた。

博物館資料保存論の授業では I.P.M.の基本的考え方を説明したうえで、実際に使用されたデータ等を示した。

害虫・害獣対策では長年にわたり「どのように駆除（殺す）か」について、その方法論が追究されてきた。一方、I.P.M.では害虫・害獣の習性を調べて「いかに害虫・害獣が発生しない環境をつくるか」を追究して実践する。これは害虫・害獣にとって進入しづらい構造と、心地良くない環境の設定ということになる。害虫・害獣にとって心地良くない環境については、同時に展示・収蔵されている資料にとっては劣化しづらい環境であることも満たしていなければならない。もちろん収蔵庫へ出入りする博物館スタッフの健康を害する環境であってもいけない。博物館では、館内の資料が存在する空間で発生する害虫・害獣の種類、場所、数のデータを採取することが第一段階である。

授業ではバートランド博物館 (Bertrand Museum)<sup>(18)</sup>での I.P.M. 関連のデータ採取表を掲示し、説明を施した。右上の図<sup>(19)</sup>は収蔵庫のフロア・プランで内部の通路と収蔵棚・収蔵キャビネットの位置が分る。害虫採取用トラップが仕掛けたある位置は番号で記されている。右下の図<sup>(20)</sup>は各位置に仕掛けられたトラップごとに採取された害虫の種類と数を記録したシートである。これらにより収蔵庫内のどの位置で多くの害虫が発生し、どの位置ではあまり発生しないのか、それらはどんな害虫なのかを見てとれる。ここから構造的に発生しやすい位置、発生しづらい位置、環境的に発生しやすい位置、発生しづらい位置などが分かり、原因究明や環境設定のヒントとなる。ちなみにクモの巣に関しては、直接資料に張っていたり、通行の際に引っかかったりしなければ放置している。害虫の駆除に貢献しているという点と、クモの巣の存在が餌となる害虫の存在につながるという考え方による。展示資料など来館者の目に触れる場所についてはイメージも問題があり、クモの巣は取り除く。



収蔵庫内で、トラップが仕掛けられている  
位置を示した図面(19)

Trap	STICKY TRAP COUNTS			O T H E R   A R E A S			New Trap <sup>14P</sup> Set			DATE 7-5-97			
	Cockroach	Spider	Moth	Dermestid L.	Gnat	Millipede	Floor Beetle	Beetle	Cricket	Ant	Socid	Misc.	Total
26	2				3						1	1P <sup>31</sup>	29
27	1	1			5	1						1P <sup>31</sup>	10
28	4				7			2				1P <sup>31</sup>	14
29					11	1		1	1				14
30	1	2			5							1P <sup>31</sup>	12
31	6			+	1			2	1				10
32	2			+	1		2	2					6
33	1			+	1		4	5		1P <sup>31</sup>		11	
34	2			+	4		1	1					5
35	1			1	2					1P <sup>31</sup>		3	
36	2			+			1	1					4
37	2			10									12
38	1						4						5
39									1				1
40													0
41													0
42													0
43													0
44													0
45		1			4				1				5
46		1			2					1P <sup>31</sup>			4
47	1												1
48	1							2					3
49	2	2		2	5			1				2P <sup>31</sup> 1P <sup>31</sup>	12
50	2	2		2	5			2				1P <sup>31</sup>	14
TOTAL	6	22	1	3	65	3		16	18	3		9	156
Count													
1-25													

各トラップにより採取された害虫の種類と数の記録(20)

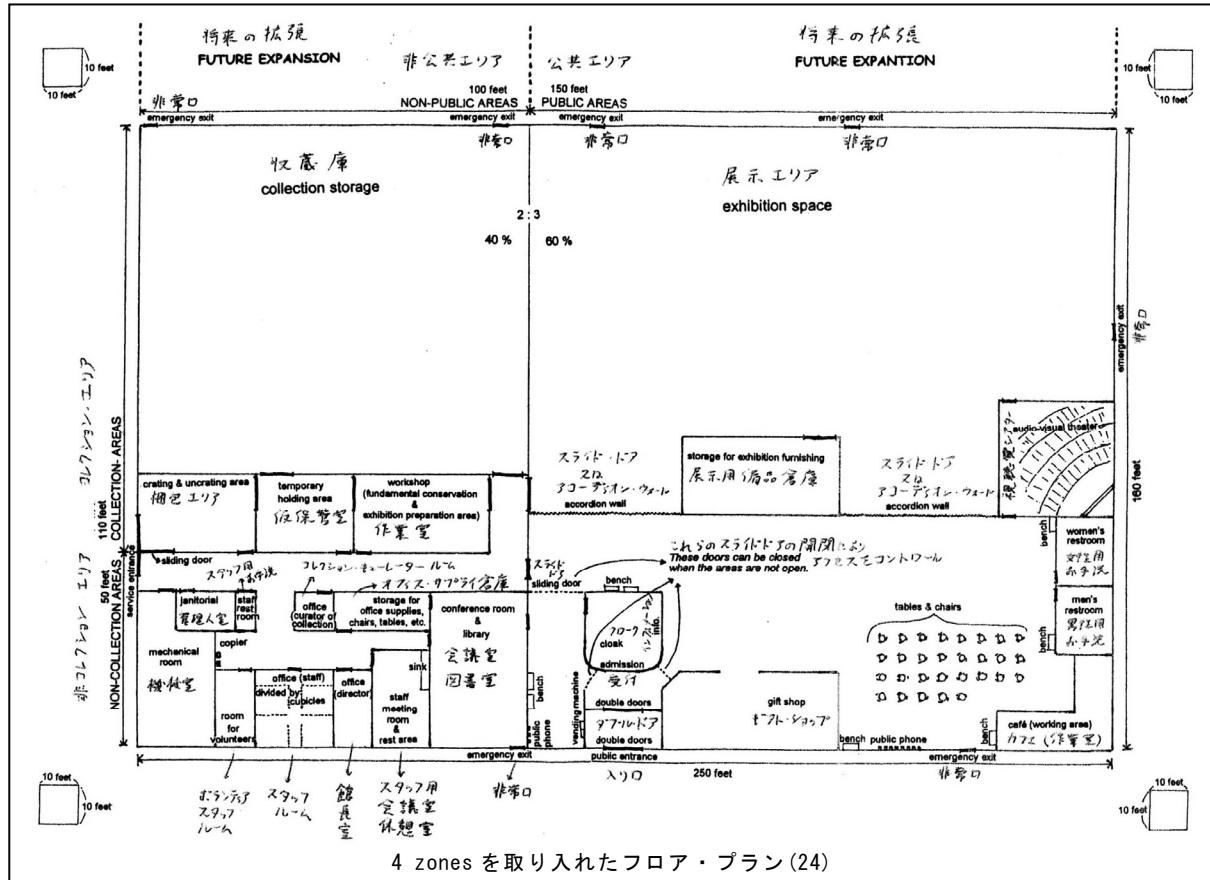


バートランド博物館 (Bertrand Museum) (18)では、登録番号をランダムに選択するにあたり、「ランダムな数字の一覧」(21)を用いた。

## 8. 博物館のフロア・プラン

ミュージアムでの業務を効率よく遂行するには、それに適したフロア・プラン(間取り)がある。ミュージアムのフロア・プランは資料の保管や防犯にも大きく影響する。新しい博物館が設計される際に、このようなフロア・プランの案が取り入れられるのが理想であるが、そのような機会に遭遇するのは稀である。しかし、既存の博物館においても効果的フロア・プランの基本を知ることにより、館内の空間の利用法に活かすことができる。

講義では、ミュージアムにとって効果的なフロア・プランの基本である 4 zones (Lord & Lord 2001) について説明をした上で、下のサンプル図面 (水崎 1999) (24)を配布し、その効果についての理解を促した。



## 9. 資料保存の事例と関連トピック

博物館資料の保存について現実的に捉えることができるよう、資料保存の心得や技法、関連トピックについて映像や画像で紹介した。映像を観た後には学生自身が考えを整理できるよう、感想を書いて提出することを課した。記述内容には学生自身の経験と照らし合わせたものが多く、各学生が自分なりに関連付けて考えを深めているのを読み取ること

ができた。

歴史的建造物の内部を構成パツと、および家具やオブジェクトのクリーニング方法と、その考え方について分かり易く説明したビデオ<sup>(25)</sup>を紹介したが、これは座学で学んだ事を具体的にイメージする効果、そして実習では体験できなかった資料のクリーニング作業をイメージする効果を狙ったものである。

資料保存関連トピックとしては資料保存の失敗の事例を取り上げ、映像と画像で資料の劣化前と劣化後を比べ、その管理体制について各自の意見を記してもらった。博物館資料は非常にデリケートであり、その扱いと管理は常に慎重でなければならないことを現実的に理解することを狙ったものである。

資料保存の事例としてはパートランド博物館（Bertrand Museum）<sup>(18)</sup>の Open Storage（オープンストレージ）という手法を紹介した。日本でオープン・ストレージといえば来館者を収蔵庫内へ案内することをいうが、展示/収蔵の手法が本来のオープン・ストレージである。収蔵庫と通路の間の壁をガラス（あるいは耐久性のある透明素材）とし、通路側から収蔵庫の内部がガラス越しに見られる手法である。収蔵庫内の資料はガラスを挟んだ通路側へ向けて展示するように並べられて収納されている。つまり展示と収蔵を同時に実現できる手法である。（水崎 2015）私が個人的にも推奨する手法であるが、実際の展示/収蔵の様子の写真とともに解説をした。

## 10. 博物館資料の梱包

博物館資料の保存については、講義での座学によって学ぶ基本的知識や考え方はもちろん重要であるが、実際に資料を扱って学び理解し、習得する部分也非常に多い。

学芸員課程省令科目には『博物館実習』が含まれているが、実習で携わる作業内容は実習先として受け入れる館によって異なる。また実習内で博物館資料保存に関する作業が含まれる割合も異なる。実習受入先博物館の種類や活動形態によっては、他の博物館よりも多くの時間を資料保存関連業務に携わることができる場合もある。しかし扱う資料は、通常その館が収集する分野の資料に限定される。

このような状況から、博物館資料保存論の授業でも実習的要素を取り入れることは、資料保存を学ぶにあたり効果的であるといえる。

北海学園大学学芸員課程『博物館資料保存論』では、本学人文学部手塚薰教授の発案により運送会社の美術資料輸送専門員<sup>(26)</sup>による博物館資料梱包実習が取り入れられている。

この博物館資料梱包実習は『博物館資料保存論』の 15 回の講義の中ほどである 8 回目に設定して行われた。

### ◆博物館資料の梱包～実習前の予習～

資料梱包の実習を受けるにあたり、より効果的に学ぶため事前の講義で博物館資料梱包についての説明を取り入れた回を設けた。講義では数種類の資料の梱包の仕方と心得を言葉、図、画像と共に説明した。加えて資料の梱包や輸送に関するエピソードも紹介した。

資料梱包実習前の講義で予習を行うことにより、実習当日はある程度の予測と心構えを持ち、事前に学んだことを再確認しながら実習に取り組むことができる。

#### ◆博物館（美術）資料の梱包実習<sup>(27)</sup>

資料の梱包実習は運送会社の美術資料運送専門員による講義と実技によって構成されている。

講義は「保存と活用の観点からみる美術作品の基本的な取扱方法」<sup>(28)</sup>と題し、その内容は作業時の心得、展覧会開催の流れ、美術品専用運送車両の機能、資料梱包資材などについて説明を受けた。

実技は2部に分かれ、前半部は絵画、後半部は陶器入り桐箱について、それぞれの取扱いと梱包方法を2名の専門員より指導を受けた。

絵画では、額付き絵画の持ち方に始まり、平面作品用の箱の作成から梱包までを行った。

陶器入り桐箱では、桐箱に納められた陶器が破損しないように梱包資材で包む方法に加え、桐箱の紐の結び方を学んだ。これは日本の資料を使う際の独特な部分であるといえる。器を収納した箱の紐の結び方にもいくつかの流儀があり、それに則ることが日本文化という資料を保存することでもある。

上記の実技は、各グループ5~6人ほどの6つのグループに分かれ、各グループは専門員により順に手ほどきを受けた。それぞれのグループ内では自然と役割分担がなされ、グループのメンバーが協力し合い、時には互いに教え合いながら作業を進めていた。資料梱包の技術を学ぶだけではなく、作業においての協調性を養うのにも効果的な実習であったといえる。



グループのメンバーで協力し、絵画を梱包する



梱包実習の様子



専門員より桐箱入りの陶器の梱包方法の説明を受ける受講学生たち



専門員の説明に耳を傾ける受講学生たち

## 11. おわりに

博物館資料の保存に関する知識の重要性と、学ぶべき項目の多様性と奥深さが認知されるようになり 2012 年度より学芸員課程省令科目に博物館資料保存論が加えられた。2015 年度は 4 年目にあたるが、博物館資料保存論という科目がより浸透していくと同時に新たな課題も見えてきた。15 回という限られた講義を通していかに必要項目を包括的に扱えるかが授業の質を決めるといえる。ある種の資料の保存技術のみに偏らず、資料保存全般的に応用できる基本的考え方を身につけることを意図した講義が求められる。ゆえに本稿第 1 章で述べたように『博物館資料保存論』という科目的性質は『博物館資料保存概論』であるという解釈になる。

博物館資料保存は技術と理念ともに、日々変化している。あくまで私個人の見解ではあるが、日本においてはモノを物理的に保存する技術は急速に進化しているようであるが、博物館資料の保存としては何が求められ、何をすべきかについての考え方と、その実行においては欧米に比べはるかに後れをとっているように感じる。

一方で、我が国独自に道を切り開いてゆかねばならぬ項目もある。災害対策では、特にアメリカでは竜巻や洪水の際の行動の指針や処置方法が国の機関<sup>(29)</sup>を中心にまとめられている。しかし、特に日本のような島国では海水による被害の対処が重要項目の一つとなる。東日本大震災で被災した資料の救済処置では除泥とともに脱塩作業に焦点が当てられ、現在もその方法を見出す努力が継続されている。<sup>(30)</sup>

博物館資料保存論は試行錯誤の実例をもとに、これから発展していく科目である。今後、学芸員課程で博物館資料保存論を受講した多くの学生たちが輩出されていくが、その中から資料保存に興味を持ち生涯の研究テーマとして扱う人材が増えていくことが、我が国における博物館資料保存の未来へつながる。

## 注釈

- (1) 1951 年 12 月 1 日法律第 285 号、最終改訂：2014 年 6 月 4 日法律第 51 号
- (2) 博物館法施行規則 1955、附則（2009 年 4 月 30 日 文部科学省令第 22 号、2012 年 4 月 1 日より施行）
- (3) アメリカのネブラスカ大学リンカーン校博物館学部修士課程の必修科目である『予防的保存学概論』は、900 番台（博士課程）レベルのコース番号が充てられている。
- (4) レオナルド・ダ・ヴィンチ（1452 - 1519）が、イタリア、ミラノのサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会の食堂の壁に 1495 年から 1497 年頃にかけてテンペラ画法で描いた壁画。ダ・ヴィンチが漆喰の上にテンペラ画法で描いたこの作品は、1497 年頃の完成からわずか 20 年程で顔料がひどく剥離してしまい 16 世紀から 19 世紀にかけて大規模な修復が 5 回ほど行われている。その後、1977 年から 1999 年にかけて最後の修復が行われた。
- (5) 「第 11 回北海学園大学学芸員課程講演会『現代美術との出会い』高橋喜代史～講演

録～質疑応答〈水崎講師〉」参照

- (6) Thomson 1986: pp2, 7, 14-16, 21-22, plates3-10 参照
- (7) 動物・植物に由来する全て素材：紙、綿、亜麻布、木、羊皮紙、革、絹、羊毛、羽毛、頭髪、染料、油、糊、ゴム、樹脂、etc.
- (8) LED : Light Emitting Diode (発光ダイオード)
- (9) Thomson 1986: pp66, 82-86 参照
- (10) Thomson 1986: pp130-133, 141-142, 144, 148 参照
- (11) Ballard 1992: pp11-12 参照
- (12) Ballard 1992: pp12 参照
- (13) HVAC (Heating, Ventilating, and Air Conditioning) : 暖房、換気、および、空調
- (14) 早稲田大学学芸員課程・2010 年度博物館経営論での大阪市立美術館・篠雅廣館長の講義による
- (15) Ballard 1992: pp13-14
- (16) Kavanagh, Gaynor 1994: pp90-93
- (17) Lowenthal 1994: pp32-35 参照
- (18) バートランド博物館 (Bertrand Museum) : アメリカ、アイオワ州のデ・ソト国立野生動物保護地区内の川底から発掘された 1865 年に沈没した蒸気船バートランド号の積み荷を保存・展示している博物館
- (19) I.P.M. – Sticky Trap Stations, Bertrand Museum as in 1999
- (20) I.P.M. – Sticky Trap Counts, Bertrand Museum as on July 5, 1999
- (21) Adapted by U.S. Department of the Interior, Office of Inspector General from Arkin, Herbett, 1963, Table of 120,000 Random Decimal Digits, Bernard M., Baruch College
- (22) Inventory: ランダムな数字の一覧をもとに選択した登録番号 made by Mizusaki, Tadashi, Bertrand Museum as in 1999 (授業での教材としての使用に際して、各箇所の和訳を付加)
- (23) Inventory: 登録番号を選択された資料の状態を記録したメモ made by Mizusaki, Tadashi, Bertrand Museum as in 1999
- (24) Mizusaki 1999, “Floor Plan Narrative & Layout of Museum” *Museum Plan: Museum of the Council Bluffs, Fort Colhoun, Nebraska*
- (25) “Housekeeping for Historic Sites” ©1996, National Park Service, New York State Office of Parks, Recreation and Historic Preservation, Society for the Preservation of New England Antiquities
- (26) ヤマトロジスティクス株式会社 美術品輸送カンパニー 東京美術支店のスタッフによる
- (27) 画像は筆者の撮影による (2015 年 11 月 21 日撮影)
- (28) ヤマトロジスティクス株式会社 美術品輸送カンパニー 東京美術支店 「梱包実習カリキュラム」より

(29) National Park Service, Department of Interior (内務省国立公園局)

(30) 水崎 2016: pp20-22 参照

### 引用・参考文献一覧

- ・博物館法施行規則 1955 年 10 月 4 日 文部省令第 24 号、附則 2009 年 4 月 30 日 文部科学省令第 22 号
- ・北海学園大学学芸員課程博物館資料保存論 2015 年度シラバス
- ・「第 11 回北海学園大学学芸員課程講演会『現代美術との出会い』高橋喜代史～講演録～質疑応答〈水崎講師〉」、『北海学園大学学芸員課程学事報告書第 25 号』手塚薰(編)、北海学園大学学芸員課程、2013 年、pp21-22
- ・水崎禎、北海道東海大学札幌キャンパス学芸員課程「博物館資料論レジュメ」より、2006 年
- ・水崎禎「学芸員課程省令科目の構成についての見解と博物館経営論の在り方」、『北海学園大学学芸員課程学事報告書第 26 号』手塚薰(編)、北海学園大学学芸員課程、2014 年
- ・水崎禎「地域の文化財の保存と活用～積丹町の地域活動として～」、『北海学園大学学芸員課程学事報告書第 27 号』手塚薰(編)、北海学園大学学芸員課程、2015 年
- ・水崎禎「我が国における博物館資料の救済・保存活動の現状～大津波プロジェクトによるワークショップに参加して～」、『北海学園大学学芸員課程学事報告書第 27 号』手塚薰(編)、北海学園大学学芸員課程、2016 年
- ・Ballard, Mary W., "Emergency Planning" *Conservation Concerns: A Guide for Collectors and Curators*, Bachmann, Konstanz, ed. Smithsonian Institution Press, Washington, D.C., 1992, pp.11-14
- ・Bernard, M., Table of 120,000 Random Decimal Digits, Baruch College
- ・Kavanagh, Gaynor, "Visiting and Evaluating Museums" *Museum Provision and Professionalism*, London & New York: Routledge, 1994, pp90-93
- ・Lowenthal, Constance, A Trust Betrayed: Insider Theft, *Museum News*: May/June 1994, American Association of Museums, pp.32-35
- ・Mizusaki, Tadashi, "Floor Plan Narrative & Layout of Museum" *Museum Plan: Museum of the Council Bluffs, Fort Colhoun, Nebraska*, Calderwood, Daniels, Goyer, Hauser, Hill, Obrist and Smith, University of Nebraska-Lincoln, Graduate Program in Museum Studies, Museum Studies 850, Museum Administration and Management, 1999
- ・Thomson, Gary, *The Museum Environment 2<sup>nd</sup> Edition*, Butterworth-Heinemann, 1986, Oxford
- ・*The Manual of Museum Planning*, edited by Gail Dexter Lord & Barry Lord – 2<sup>nd</sup> ed. AltaMira Press, 2001, First published in Great Britain in 1999 by The Stationery Office

## 学芸員課程研修生受け入れ雑感その2

奥尻町教育委員会事務局  
学芸員 稲垣 森太

### 1. はじめに

平成29年2月20日～23日、昨年度に引き続き母校の学芸員課程学生の受け入れを行った。なにせ冬期間は初めての試みで、学生らは色々と困難に直面することとなったのだが、結果的にそれら困難を克服し、実りある実習となったものと思う。受け入れ側として少々雑感を述べたい。

### 2. 調査・実習

本来は昨夏に実習を行うつもりであったが、夏の奥尻はとにかく忙しく、結局日程が合わず見送ることになった。その後、手塚先生との相談で冬期間でも出来るのではないか、ということになり、新年の札幌で学生交え相談した。交通面、施設面で一抹の不安があつたものの、プラン作りに没頭することになった。

色々考えてみて、今回のテーマは、「聞き取り」、「古文書」、「スクラップ」とした。

「聞き取り」は、地元のお年寄りにお話を聞き、レポートにまとめる作業である。知らないお宅にお邪魔して、初対面ながらもいかに詳しい話を引き出すか、話の展開に合わせて観点をどこに定めるか、というテクニックが要求される。と書けば難しく思えるが、お年寄りと世間話で仲良くなつて、孫が祖父母と触れ合う様子を想像すると良い。普段から付き合いのある地域の古老4名にお願いしたところ、快諾してくれた。この聞き取り調査も、1対1ではなかなかすんなりいかない場合があるので、話者がしゃべりやすい環境となるように、2対2とした。

高橋・佐々木班は谷地地区の平木文夫氏宅で、氏のほか、お向かいさんの木村勝美氏と仲介役の平木 渉氏（文夫氏の甥）にお話を聞かせてもらった。平木氏と木村氏は漁師の家に生まれ、木村氏は近年まで漁師を続けていた方だ。木村氏の漁にまつわる細かな話に、集まった一同興味津々で聞いていた。長く近くに住んでいた島民同士でも初めて聞いた話も多かったようである。様々な漁を経験してきた木村氏の話は尽きなく、続きを是非とも伺いたい気持である。

一方の添田・蟬塚班は同じ谷地地区の高田アキ氏の別宅でお仲間の石田キセ氏にお話を聞かせていただいた。お二人は毎週日曜日に集まって「芋煮会」というお年寄りの集まりを催し、参加者が手作りの食べ物を持ち寄り、食後は編み物などをして脳の活性化を図っているのだという。完成した作品は年一回の町民文化祭において販売され、売上金は全額を社会福祉協議会に寄付されている。手作りの品はぬくもりがあって暖かく、特に毛糸の靴下は島の漁師の必需品であるという。この「芋煮会」にて昼食を皆でいただいて、身も

心も満たされたのであった。こうして聞き取りから昼食まで谷地地区の方々にすっかりお世話になってしまった。深く感謝いたします。

「古文書」は、明治期の行政文書を解読し、現行の漢字表記で書き写す作業である。奥尻島は高波や洪水、津波や大火といった度重なる災害に遭っており、いわゆる古文書と呼ばれるような文字史料がほとんど残っていない。今回使用したのは数すくない史料のうち、「早川家文書」として現存している貴重な一群である。少々解題を述べる。昭和戦前期、明治初期に本陣（最初期の奥尻の行政機関）として使用されていた建物を転用し、若松氏が旅館業を営んでいた。その娘が早川家に嫁に行き、その後の経緯は不明なるも、旧建物に残っていた文書を早川氏より町史編纂室に渡されたものと思われる。

行政文書なので短文な上に、定型文が多く、時期的にも明治 10~20 年代と新しかったこともあり、入門編としてはちょうど良かったのではないかと思う。とは言うものの、私もスラスラと読むほどの知識がなく、学生と一緒に悩みながら進めたのであった。古文書解読といえば、博物館実習で藤村久和先生に厳しく指導されていた 15 年前を思い出してしまったが、この時に身に着けた知識があったので、辛うじて教える立場になれた訳である。学生にとっては、生の史料を触る機会が少なかったとのことで、良い経験になったことだろう。

「スクラップ」は、新聞記事の切り抜いたものを台紙に貼って整理する作業である。小さな切り抜きは楽なのだが、A4 版の台紙にはみ出す部分は、見出しが見えるように織り込む形で納めていく。左右、上下を間違えないようにしなければならない。収集したテーマは、「奥尻」、「地震・津波」、「文化財」に絞っている。無節操に収集すると、收拾がつかなくなるので、学芸員活動に通じる分野に限定している。基本的には地元紙である北海道新聞を使用し、大事件や重要事項があった場合は、他紙も入手するよう努めている。経験から言って、切り抜いたその日に貼りつけるのがベストなのだが、1~2 か月ため込んで苦労しているのが現状である。数か月も溜まればもうアウトである。そのような溜まったものを今回は処理してもらったのである。作業がはかどり、正直、大変助かった。

### 3. 不安的中も…

やはり冬季の奥尻は厳しかった。往路は低気圧によりフェリーが欠航し、学生が 18 日に島に入る予定が 2 日間後ろにずれた。よって、19 日（日曜日）に予定していた芋煮会へは出席できなくなってしまい、大変困った。高田さんに事情を説明したところ、21 日にわざわざ開催してくれることとなったのである。昼食用にご用意いただいた料理も、単に芋を煮るだけではなく、素麺（道南ではめでたい席で出す）や名物のスルメの塩辛まで揃えてくれたし、手作りのジャガイモやダイコン、ニンジンまで頂戴し、夜のカレー作りの心配までしていただいたのである。まさに感謝感激である。

また、初日は宿泊施設の給湯が凍結し、お湯が出ない事態となった。先生はじめ学生の皆さんに大変な迷惑をかけてしまった事をお詫びしたい。冬場の研修受け入れが初めてであった事を考慮しても、施設管理の不十分さを露呈した格好だ。着実に改善して次回に臨みたい。

最後にも困難が待ち受けていた。帰路となった23日早朝、貨物列車が有珠周辺で脱線し、函館 - 札幌間の大動脈が不通となつたのだ。その一報をラジオで聞いた時は、もう天を仰ぐしかない気持ちであった。だがしかし、筆者もその日札幌へ出張することになつており、とりあえずフェリーは通常運航なので、先ずは江差まで向かうこととした。江差までの船中、代わりの交通機関を検索したが、都市間バスは満席、代替え輸送も不確実であった。江差到着。客待ちのタクシーに聞くと、札幌までジャンボハイヤーは80,000円位かかるという。相談の結果、より安価なレンタカーを借りて移動することとした。これであれば一人当たり10,000円程度で移動できた。地方の業者故、乗り捨て不可であったが、たまたまワゴン車が空いていた事は不幸中の幸いであったし、小雪で路面が出ていたのも幸運だった。捨てる神あれば拾う神あり、である。結果的に夕方には札幌市内に入ることができた。

#### 4. おわりに

今回の研修中、わたしが良く口にしたのは「天気には勝てない」であった。最初からまさにその通りで、やはり奥尻の自然は厳しかった。その自然の中で生きていくのが奥尻の生活である、ということを学生たちは実感したことと思う。一昨年は真夏の奥尻を、今回は真冬の奥尻を体験してもらった。作業についても別な分野の体験を用意したつもりである。厳しい環境の中で、学生たちは無理を強いた場面があったように思う。嫌な顔をせずに前向きに取り組んでくれたことが何よりも嬉しかったし、頼もしく見えた。

高橋2代目リーダーには心休まる暇がなかつたかもしれない。ゆっくりと楽しむ暇がなかつたのは少々可哀想であったが、困難な中で立派に自分の責務を果たしたということは誇ってよいと思う。社会人になれば、きっと役立つはずである。



木村さんに聞き取り中



芋煮会のごちそう



芋煮会のみなさんと



古文書の読み取り



新聞切り抜きの整理



帰路の江差港にて

## **奥尻研修を終えて**

**人文学部日本文化学科1年 蟬塚 咲衣**

### **1. はじめに**

2017年2月20日から3泊4日の日程で行われた、奥尻島の学芸員研修に参加した。私にとって、新ひだか町の博物館と図書館においての研修に次いで2度目の研修だったが、現地に宿泊しながら学ぶという経験は今回が初めてだった。奥尻島に行くのも初めてであり、これまで島という環境で暮らす方々の生活を身近に感じることがなかったため、見聞きすること全てが新鮮に感じた。

今回の研修は、始まる前から順調に進んだ訳ではなかった。冬休み中から参加者が集まって話し合いが行われ、研修中に行われる聞き取り調査の班も決まっていたが、天候の悪化によるフェリーの欠航で日程が変動し、参加予定のメンバー全員で行くことができなかつたことが残念だった。事前に計画を立てても、急に変更せざるを得ない事態になることがあることを実感し、交通手段が使えなくなった際にどうするのかを考えることの重要性を感じた。最初から最後までハプニングの連続だったが、奥尻島で学芸員としてご活躍されており私たちの先輩でもある稻垣森太さん、人文学部教授の手塚薰先生、4年生と3年生の頼れる先輩方、しっかり者の同期にたくさん助けられながら、充実した日々を送ることができた。これから、この研修で経験したことについて述べる。

### **2. 聞き取り調査と芋煮会**

1日目は札幌から奥尻島への移動が主だった。そして、2日目は午前中から昼にかけて、奥尻に住んでおられる方々のお宅を訪ね、お話を伺うという聞き取り調査を行った。お話を一方的に聞くのではなく、対話をしながら進めていくもので、こちら側が話を受け止めてどのような言葉を返せばといいのか、どのような質問を投げかけたらいいのか、前日から不安でいっぱいだった。

2組に分かれて調査を行い、私の班は高田アキさんにお話を伺った。お宅にお邪魔すると、石田キセさんも「芋煮会」の準備をされており、一緒にお話を伺うことが出来た。ボイスレコーダーを使った調査に入る前に、国後島でイカ用の包丁として使われていたという「マキリ」を使ってじゃがいもの皮むき作業を行った。普段調理で使う包丁のように見ただけでは切る面がわからず、どのように使えば良いのかわからなかった。高田さんたちは私たちがこの作業ができるようにわざわざ皮が付いたままの芋を残してくれていたが、上手くむくことが出来ず、全く力になることができなかった。

聞き取り調査では、まず、高田さんと石田さんが奥尻島に来た時のお話や、その当時の生活について伺った。高田さんは国後島から船で根室に渡り、布団も着替えもなく逃げてきたのだという。さらに、戦時中の勤労奉仕のお話も伺い、戦時中の様子についても知る

ことが出来た。その出来事が何年は何月何日に起こったのかをすらすら話されていたことにとても驚いた。石田さんは乙部出身で結婚を機に奥尻島に渡り、奥尻での生活の中でワカメを浜に干す作業の苦労についてお話をされる様子が印象的だった。昔の奥尻はイカがだいりよう（大漁）だったと懐かしそうに話してくださった。

そして、私たちが経験したことのない戦時中の貴重なお話を聞けただけでなく、高田さんと石田さんが現在行っている活動についても伺うことが出来た。毎年11月に行われる文化祭では、手編みの手袋や靴下を海洋センターで販売しており、そのお金を寄付しているそうだ。その金額は総額47万円にもなるのだという。手袋などの作り方は小さい頃に母親から教えてもらったことを今でも忘れずに覚えているというエピソードを聞いて、ほっこりした気持ちになった。そして、「芋煮会」が高田さんから始まり、毎週日曜日に行ってのことや、20年も続けられていることを知った。島民の方々が楽しそうな様子で鍋を囲んでいる、「芋煮会」が取り上げられた記事も見せていただくことができた。このような私自身が生まれる前から行われているような行事に参加できたこと、そして私たちの奥尻島到着が遅れて日曜日に訪ねることができなかつたにも関わらず、たくさんの料理を用意してくださっていたことがとても嬉しく、感謝してもしきれない。

今回の調査での反省点は、事前に地図の用意はしていたが、話しているときに手元に置くことを忘れたことで、どのような経路を通ったのかが目で確認できなかつたことである。そして、聞き慣れない言葉があってわからなかつた場合は、聞き直すだけではなく紙に書いていただくという手段を取つたほうが確実に理解できると思った。質問に関しては、前もって学校のことについて聞きたいと思っていたので、それを聞くことができたのは良かった。しかし、現在も北方領土の問題が続いていることを踏まえて、今でも国後島に帰りたいと思うのか聞いてみたかった。とっさに頭が回らなかつたのが悔しい。



↑「芋煮会」の料理。おなかいっぱい！

### 3. 海洋センターで行った作業

2日目の午後と3日目は、海洋センターにて古文書の読解と新聞の切り抜きを整理する作業を行つた。私は2日目と3日目の後半に古文書、3日目の前半に新聞というように2つの作業を経験することができた。

古文書の読解作業では、明治と昭和の文書を、手袋無しで実際に触りながら作業することができた。博物館の展示ケースの中にあるイメージしかなかつた古文書が自分の手の上に乗つていて胸が高鳴つた。私はまだ「古文書読解」の講義を受けていないため、くずし字辞典の使い方すらわからない状態だったが、稻垣さんとこの講義の経験者である先輩に教わりながら時に真剣に、時に和気藹々とした雰囲気の中で作業を行つた。1人で

行き詰った時には話し合うことで新たなひらめきが得られることもあり、謎解きをしているような感覚で楽しかった。文字を推測する際に前後の文字と熟語になるかどうかで考えたが、自分自身の言葉の知識が少なく、インターネットで検索をしてこんな言葉があったのかと気付かされることがあった。そのため、文字単体の形を読み解く力以外にも、書かれた当時の言葉や熟語の知識も必要なだと感じた。今回、古文書に触れるという貴重な経験ができたことで、これから受講する講義への意欲が上がり、関心が高まった。



↑読み解いた文字を紙に書いていく



↑海洋センターの図書館

新聞の切り抜き作業では、奥尻やその周辺の地域に関する記事と、東日本大震災などの震災に関するものを整理した。奥尻島も津波の被害を受けた場所であるため、作業を行った和室にも津波の被害の様子が文字で記された額縁が飾られていた。今回の研修では震災の被害を感じる物を見ることはなかったが、奥尻がどのように復興し現在の姿になったのか知りたくなった。地域の記事には「奥尻ムーンライトマラソン」に関するものが多く見られ、このイベントの注目度の高さを感じられた。このように奥尻に関する新聞記事をまとめてみると、奥尻が外に向かってどのようなアピールをしていて何が強みなのか、奥尻のどのようなところに関心が寄せられているのかを知るきっかけになると思った。

作業を行った海洋センターは、海沿いのフェリーターミナルのすぐ近くに建っており、昼間は子供の声が聞こえることもあったが、基本的に静かな空間だった。落ち着いた雰囲気の図書館もあり、私たちが訪れた夕方には利用者がいなかつたため、集中して読書をするには良い場所だと感じた。少しの時間しか見学することができなかつたが、半分近くは児童書で、専門書より小説が多い印象を受けた。

#### 4. 奥尻島で過ごして感じたこと

私たちは、元々学校だった町民センターで寝泊まりをした。昼間は他の場所で作業をしていたため利用状況はわからなかつたが、夕方は町民の方々が体育館を利用していた。宿泊する部屋はストーブでぽかぽかだったが、その他の調理室やシャワー室、廊下などは体が冷えきるくらい寒かった。冬なので虫はないだろうと思っていたが、暖まった部屋に

カメムシが大量発生し、大きな蛾もいたため、思わずところで奥尻の自然を実感することとなった。今回の研修はオフシーズンの冬に行われたが、夏に訪れる機会があればまた違った姿を見る能够であると思うので、次は夏の奥尻を経験してみたい。

お土産はフェリーターミナルの2階にあるお土産屋さんで購入した。海産物の豊かさを生かした珍味やスルメ塩辛、日本酒や奥尻ワイン、奥尻島のマスコットキャラクターである「うにまる」のグッズがたくさん販売されていた。奥尻島を訪れてお土産を見たのはこのお店だけだったが、お店が点在していてどこで買えば良いのかわからないということが起こらなさそうであり、フェリーターミナルにあることで島に出入りする人が訪れやすいところが良いと思った。「うにまる」や鍋釣岩をモチーフにした商品が多くかった。鍋釣岩は島の中を移動する際に何度も目にしたが、想像していたよりも存在感があり、夜間のライトアップの様子も見て、島のシンボルであることを実感した。

島の中の密な人間関係によるものなのか、札幌ではあり得ないような開放的な風習もあった。稻垣さんから伺った、どこからか話があつという間に広がってしまうというエピソードからも、島という環境ならではの出来を感じることができて面白かった。



↑「うにまる」のお菓子

## 5. おわりに

今回の研修で、聞いた情報から知識を得ることも大切だが、実際に目で見て体験することがどれだけ刺激になるのかを学んだ。さらに、稻垣さんや奥尻町教育委員会の宮崎さんから町の学芸員としての仕事や立場について話を伺うことができ、これまで学校の講義で学んできた博物館や美術館の学芸員とは違った学芸員の形があるということを知って、視野を広げることができた。聞き取り調査や海洋センターでの作業の時間だけではなく、夕食を食べている間や作業の合間の休憩時間に交わした会話も全て刺激になり、これからの大學生生活を充実させ、学びを深めるために自分は何ができるのかということを考えるきっかけになった。

出発前から天候によるフェリーの欠航で離島の厳しさに直面し、フェリーが動けば札幌に帰れるだろうと思っていた最終日もまさかのJR運休というハプニングはあったが、それも良い経験になったと言えるように、ここから学んで次回はもしものケースに備えられるよう計画を練っていきたい。

最後に、このような貴重な経験をする機会を設けてくださった稻垣さん、奥尻町の教育委員会の皆様、手塚先生、本当にありがとうございました。

## **奥尻島研修を振り返って**

**経済学部経済学科 4年 添田 悠**

### **1. はじめに**

2017年2月20日（月）から23日（木）にかけて、奥尻島にて研修のため滞在する機会を再び頂き、北海学園大学人文学部の手塚薰教授と本学の学芸員課程履修生の4年生1名、3年生1名、1年生2名の計5名で訪れた。

冬期間、フェリーは江差からのみの出航のため、江差のターミナルまでJRとバスを利用することになり、中学の修学旅行以来、私は久しぶりにスーパー北斗に乗った。JR、バス、フェリー、それぞれ2時間ずつの移動で、朝の6時に家を出て、奥尻に着いたのは15時を過ぎていた。移動だけで半日かかってしまったのだが、飛行機では数十分で飛び越えてしまう距離を、海や山、街並みや農家を眺めながら進んでいると、北海道の大きさが感じられる気がした。たとえば、学芸員は資料の大きさを図りたいがメジャーがないときに、自分の手と資料と一緒に写真に写す。そうすることで、後から資料の大きさを推測することができるからだ。それと一緒に、大げさに表現すれば、“景色を見ながら移動する”ということによって、自分の体を使って計測しているような感じがした。それはきっと、便利だけれど、一瞬で飛び越えてしまう飛行機ではできないことだろう——。頭に北海道の地図を思い浮かべて、今、どこを走っているのだろうか、と想像しながら、たまにはこういう時間のかかる移動もいいのかもしれないと思った。

今回の研修は、18日（土）からの滞在を予定していたのだが、悪天候のため出発が二日伸び、当初の予定よりも一日短いものとなってしまった。また、残念ながら私は、私用のために一日早く引き上げることになったが、実際に現地に赴くことで学んだことは沢山あった。本文では、奥尻島の学芸員の稻垣森太氏の指示の下、島民の方々への聞き取り調査と資料整理のお手伝いをした中で学んだこと、感じたことを述べていく。

### **2. 聞き取り調査について**

奥尻島滞在二日目の23日（火）の午前から正午にかけて、フィールドワークとして島民の方に聞き取り調査をした。二人ずつ二つの班に分かれ、私の班は高田アキさんにインタビューすることになり、「芋煮会」の会場となっている民家へと出かけた。

「芋煮会」とは、高田さんが始めたジャガイモやカボチャを塩ゆでにし、皆で食卓を囲む会で、毎週日曜日開催されている。会場の壁には芋煮会を取材した北海道新聞の記事が貼られており、芋煮会の活動により地域に交流が生まれること、認知症の予防になることが取り上げられていた。毎年11月に港の海洋研修センターで開催される文化祭では、

芋煮会のメンバーで作った手編みの手袋や靴下を平成19年から寄付しており、寄付の総額は47万円にも上るそうだ。聞き取り調査後、もう一班も合流してお昼ごはんをご馳走になったのだが、途中、余ったジャガイモをもらいに来る方がいらっしゃり、芋煮会が島の交流の中心となっていることを感じた。この日は、芋煮会メンバーの石田キセさんもいらっしゃり、お二人からお話を伺いすることができた。

当初の日程では芋煮会の活動がある日曜日にお伺いする予定だったのだが、お二人のご厚意により火曜日にも会場を開けてくださった。会場の引き戸を開けると入口の近くに薪ストーブがあり、薪はどこから調達しているのか尋ねると、「島の其処ら辺の山から」とのこと、薪は赤々と燃え、会場は隅々まで暖かかった。

私たちが会場に到着したときに、丁度、芋煮会の準備をされており、ジャガイモの皮をむいているところだった。「マキリ」という本来はイカを捌くための、刃渡り10センチほどで両側に刃の付いている、ペーパーナイフのような小さな包丁を使っていた。私も皮むきを体験したが、普段使用している包丁よりも持ちにくく、刃が深く入ってしまうため表面の皮だけをむくことが難しく、上手にできなかった。

聞き取り調査では、戦時中のお話と高田さん、石田さんが奥尻にいらした経緯、当時の生活について伺った。

高田さんは国後島の出身で、昭和20年の根室の空襲の時には、国後から根室の町が赤く燃え上がっているのが見えたこと、布団がないので薪や藁の上に寝て、根室の木工所で働いたこと、勤労奉仕についてなど、戦時中のお話をしてくださいました。石田さんは、結婚を機に奥尻に渡り、漁師の方と結婚したためワカメを干す手伝いをしなければならなく、その苦労話をしてくださいました。

印象的だったのは、「奥尻のことについて聞きたい」と初めに言ったら、高田さんが「自分は他所から来た人間だから、奥尻のことは何も知らない」とおっしゃったことである。これから奥尻の昔について聞こうと意気込んでいた私は、出鼻をくじかれた思いで、一瞬戸惑ってしまった。しかし、高田さんご自身は、“島の外から来た”という意識がある以上、ストレートに質問しても得られる答えには限界があるので、質問の仕方を工夫しなければならない。聞き方一つで、重要な情報を聞き逃してしまうと思うと、プレッシャーがあつたが、そこにフィールドワークの難しさと面白さを感じた。

自分の慣れ親しんだ価値観や知識でしか、他者を見ることができないことを、エスノセントリズムと言い、文化人類学では厳しく自戒していると、フィールドワークの心構えとして事前に手塚先生から聞いていた。今回の場合だと、子ども時代を国後島で過ごされたとはいえ、91歳の高田さんは70年以上奥尻に住んでおり、島の歴史を長く見ていく方だから沢山話してくれるはずだ、というのが私の勝手な推測だった。実際にフィールドワークを体験して、中立的な目でインタビューをするのは、想像以上に難しい事だと思った。

### 3. 資料整理

聞き取り調査の後は、午後から海洋研修センター2階の和室をお借りし、資料整理をした。崩し字班と新聞の切り抜き整理班に分かれ、私は後者の担当になった。

新聞記事は、稻垣氏が数年前からファイリングし、辞書のように分厚く重くなったものを参考に作業を進めて行った。2016年の北海道新聞の記事を切り抜いたものが1年分ほど溜まつていて、それをテーマごとに分類し、日付順に見やすく紙に貼りつけていく作業が私の役割だった。私は、記事に「奥尻」というキーワードがあるものを整理する担当だったのだが、奥尻島の入島税に関する記事や奥尻出身の劇団員、奥尻ワインについての記事など、切り抜かれていた記事のテーマは政治、経済、カルチャーなどバラバラであった。それを、まずは、日付順に並び替える。そして、関連しているものはまとめてグループにし、見やすいように貼り方のレイアウトを考える作業は、ちょっとしたパズルのようだった。

言ってしまえば、順番に並べる→分類する→レイアウトを考える→貼り付ける、という同じ作業の繰り返しである。しかし、この単純な作業でも、少しだけ紙からはみ出てしまう記事はそのまま折ってしまうよりも、切って貼り付けた方がいいだろう、関連した記事はめくつて見るよりも見開きの方が見やすいだろう、見るだけではなく、コピーをとりたい場合は新聞の写真に折り目が付いていない方がいいだろう、次に作業を引き継ぐ人はどういう状況であれば、作業を進めやすいだろうか等々、考えることは沢山ある。ただの流れ作業にしてしまうだけではもったいないので、どうすれば早く効率的に美しく仕上げ、かつ次の人が作業しやすいか、という自分なりの付加価値の付け方に集中力を使った。面白い新聞記事が多く、作業の手を止めて読んでしまい、時々、集中力を奪われてしまったのだが……。

### 4. おわりに

北海学園大学学芸員課程の奥尻島での研修は、今回で2回目である。前回は2015年の8月10日から13日にかけて滞在した。幸運なことに私は初回から研修に参加でき、深緑の山と紺碧の海のコントラストがきれいな夏と、大地が白く覆われ海が黒く深い色をした冬の両方を見ることができた。どちらの季節でも私たちが泊まった町民センターには虫が大発生していて、生き物たちのたくましさを感じた（ちなみに、夏は蟻に羽が生えたような小さな虫、冬はカメムシが多く、虫が苦手な私には少々辛かった……）。

奥尻で研修をすることになったきっかけは、稻垣氏が本学の卒業生であったことで、前回の研修の前年の暮れに本学で講演をして頂いたことから始まる。大学二年時に初めて講演を聞いたときには、2回も研修で奥尻島に行かせてもらえるとは思っていなかったので、ご縁があったと思う。

研修で奥尻まで行くと話すと、「なぜ、奥尻島にまで研修にいくのか」と周囲から驚かれた。言外に、「研修ならば、札幌の博物館でもできるじゃないか。なぜ、わざわざ、遠くの島まで研修にいくんだ?」という意味が含まれている気がした。

なぜ、奥尻なのか。これはとても重要な点である。たしかに、札幌近郊の方が博物館、美術館は多いし、実際に本学の学芸員課程では、初年度に小樽市総合博物館、あるいは北海道開拓記念館での実習がある。近場の方が頻繁に実習でき、体験できることも多いだろう。しかし、私たちが、奥尻島で研修をさせて頂く理由はやはり、稻垣氏の存在である。学芸員という職は募集が少ないため、野球選手になるよりも学芸員になれる確率の方が低い、と言われている話はとても有名だ。私も入学当初、担当の先生からその話をされたことをはっきり覚えている。そのような環境で、北海学園大学出身の私たちの先輩である稻垣氏が奥尻島で学芸員をされているというのは、本当にすごいことである。これから学芸員になりたいと思っている学生たちにとって先輩から直接、学芸員の仕事について学ぶことができるところに大変意義があると感じている。この研修が、本学の恒例行事になることができれば、と強く思う。

最後になりましたが、急な日程変更にもかかわらず、快く受け入れてくださった稻垣氏をはじめ奥尻島教育委員会の皆様、聞き取り調査にご協力頂いた奥尻島の皆様、手塚先生、高橋リーダーと学芸員課程のメンバーに感謝の言葉を申し上げます。皆様のおかげで、学芸員課程の活動の集大成として、とてもいい研修になりました。ありがとうございました。



インタビュー後（左から、高田アキさん、石田キセさん、筆者、蟬塚）

## 奥尻島研修

法学部1年 佐々木理子

### 1. はじめに

2017年2月20日から23日の間、研修のため奥尻島に滞在した。奥尻島の学芸員である稻垣森太さんのもと、島民の聴き取り調査や資料整理をおこなった。

悪天候によりフェリーが欠航し、2日遅れの日程となり予定より1日短い研修になったが、充実した4日間であった。事前準備の段階で天候の悪化が予想され、18日は出発出来るのかどうか気になり落ち着かない気分だったが、20日出発との知らせを聞いて奥尻島研修への期待が高まった。初めて離島を訪れるることもあり、道中では奥尻島について調べつつ、浮かれていたかもしれない。1日目は移動のみで終了したが、フェリーを降りると、無事に島に到着した安堵と2日目以降からの本格的な活動に向けて緊張感を感じ、この研修で学んだことを忘れないように取り組もうと思えた。これから奥尻島研修で学んだことを述べる。

### 2. 奥尻島の様子

この時期は奥尻島の一年で最も厳しい季節で波が高く、フェリーはかなり揺れ、座っていても船の上下により海面が見えるほどであった。早々に冬の研修の難しさを実感することになる。海は暗い色をしており、写真で見るような夏の奥尻ブルーの印象とはだいぶ異なっていた。だが、この奥尻の海が岩を削り、多数の奇岩をつくりあげたのだと思った。

島に上陸してから多くの海鳥を見ることができた。特にオオワシがいたのは驚きだった。鳥が集まるということは、奥尻の海に豊富な食料があるということなのだろう。

また、島の公共施設を車に乗って見て回った。町役場や郵便局、学校、病院は割と近くにあり、民家もその周辺地域に集まっていた。病院の駐車場が車でほぼ埋まっているのが印象に残った。青苗に診療所があるようだが、島唯一の病院であり、高齢化も相まって利用者が多いのかもしれない。内科も外科も診ることができる総合的な医師があり、眼科や耳鼻科の医師は決まった日に島の外から診療に来る。さすがに産婦人科は無いので、出産の時は北海道本土に渡らなくてはならない。フェリーの欠航を経験した後では、島ならではの生活の不便さがより理解できた。

奥尻島ならではといえど、とても驚いたことがある。島の住民は家や車に鍵を掛けないという稻垣さんのお話だ。札幌では考えられないが、奥尻島では鍵を掛けなくても盗難が日常的に起こることは全く無い。地理的に島という狭い場所であり、行き来がしづらいので、島民同士の関わりが密になるからだろう。島民の関わりが深いと感じた出来事は芋煮会である。芋煮会については後に詳しく述べるが、芋煮会でご馳走になった際、余ったイモとカボチャを近所の方がもらいに来ていたのを見て、地域のコミュニティが個人の生活を支え、豊かにしている様子を目の当たりにした。

2日目は島民の平木さんのお宅で聴き取り調査を行った。近所の方や、平木さんと同じく漁師をしてきた方を交えてお話を聴いた。60年程前の奥尻島の漁について木村さんが詳しく教えてく

ださった。以前はホッケ漁が盛んで、いくつか漁の方法があったという。中でも、まき網漁ではとても多くのホッケが捕れたようだ。まき網漁とは二艘の船が協力して網で魚群を囲う漁である。一般的には、この漁をそうまくと呼ぶが、奥尻島ではまきあみと言う。一度に大量の魚を捕ることができ、木村さんの漁師経験のうち最も捕れた数はおよそ4千貫である。一貫=3.5キロで換算すると約14トンだ。

しかし、これほど大漁だったのは64年前のこと、現在は捕れる魚の量が大きく減少しているそうだ。原因是地球温暖化による水温上昇ではないかと話していた。魚は水温の低い沖へ移動し、60~70メートルの深さから、150メートルまで潜ってしまったので捕れなくなつたのだ。1度くらいの温度の変化は私たちにはたいしたことではないが、魚にとっては大きな変化だ、という木村さんの言葉が心に重く残つた。

聴き取り調査が終わると、もう一方の班が取材をした、高田さんが主催する芋煮会で昼食をご馳走になった。芋煮会とは畑でとれたイモやカボチャを塩ゆでにして、近所の方たちとシェアするという会である。場所は高田さんが普段倉庫として使っている建物で芋煮会を開いている。室内をだるまストーブで暖めており、これが普及したのは明治後半から昭和なので今ではめずらしいと思った。いただいたイモは奥尻と同じく道南の厚沢部町のメークインに似ているが、それよりも大きいイモで、あまくて食べ応えがあった。訊くと昔から育てているイモで、奥尻島の芋煮会でしか食べられないそう。戦争中の貧しい時代には、イモとカボチャしかなくて、小さい頃からこの塩ゆでを食べて育つたともお話をしていた。

私はそれを聴いて昼食前に木村さんのお話を思い返した。こちらでも、戦争中に主にイモとカボチャを食べていたという話を聴いたのだ。イモやカボチャばかり食べていると身体が黄色くなってしまうらしく、兵隊さんのなかに黄色い肌をした人がいるとほぼその人はイモ、カボチャの産地である北海道出身だったという。木村さんは、子どもの頃に食べ飽きてしまって今は食べたいと思わない、どうして女性はイモやカボチャが好きなのだろう、とも話していた。美味しい昼食をいただきながら少しクスリとした。



芋煮会でご馳走になった昼食



フェリーから見た海の様子

### 3. 古文書読解

3日目は海洋センターにて、新聞の切り抜き整理や古文書読解をおこなった。新聞の切り抜きとは稻垣さんが奥尻島や地震に関する記事を集めて、日付順にファイリングしているものである。どんな小さな記事でも奥尻の名が出ていれば、切り抜いてあった。朝刊と夕刊を問わず、様々な新聞社の記事を取っておいてあり、継続するのはとても大変だろうと思った。地震の話題や全国学力テストの結果についてなど、興味深い記事もあり、時折作業の手を止め読んだりした。

記事をのりで貼ってゆく作業はなかなか根気の要るものだったが、それ以上に古文書読解は頭を使った。奥尻島の民家から出てきた明治から昭和の時代の古文書に実際に触ることができ、本物の質感やにおいに感動した。また、それ以上に読解作業が面白かった。私は比較的簡単な昭和時代の古文書を読解した。くずし字辞典を頼りにわからない字を探すのだが、偏や読み方の予想を立ててからでないと探すのは難しい。推理しつつ読み進め、予想と合っていた場合も、どうしても読めず答えを教えてもらった場合も、昔は現在も使っている字をどのように書いていたのかを知ることが出来、興味深かった。1枚完成してから通して読み返してみると、古文書を全体的に把握できて達成感があった。本物の古文書に触ることは滅多にないだろうし、これを読む機会もなかなか無いだろう。大学の一般教育科目でこれを学ぶことが出来たらどんなに良いかと考えてしまったのである。



薪ストーブ



古文書

### 4.まとめ

奥尻島を去るとき、港で沢山の電球を下げた漁船をいくつも見かけた。昔と変わらず漁業が盛んであることがうかがえる。しかし、木村さんや芋煮会の方々、お土産売り場の店員さんも口をそろえて以前と比べて魚が捕れなくなったと話していた。聴き取り調査の際、海水温が上昇したことが原因だときいた。奥尻島のスーパーには海産物が多く並んでおり、お土産屋さんにも乾物

や塩辛などが販売してあった。また、3日目の昼に食べた海鮮丼は絶品だった。水産業は観光など他の産業や、島民の生活にも様々な場面で関わりがある。フェリーの欠航に見舞われた初日からこの4日間の研修を通して、奥尻の海が魚や鳥の集まる豊かな自然と綺麗な景観をつくっていることに気づけた。初めは地球温暖化とは規模の大きすぎる話だと思っていたが、奥尻の水産業に影響を与えていていることに衝撃を受け、急に実感が湧いた。奥尻島の冬が厳しいのも、豊かな自然があるからなのだと思う。この自然が気付かないうちに人によって少しづつ変化してしまうのは恐ろしいと感じる。奥尻島の魅力が変わらないものであってほしいと切実に思う。

## 5. 最後に

今回、普段できない体験をさせてもらい、様々な人との関わりの大切さを学べた。研修に参加して、島民の方や奥尻町教育委員会の方ともお話ができ、自らの視野が広げられた。将来に向けて今何を目標に努力するのか、方向を改めて考えるきっかけとなった。これからも、学芸員課程の学びに積極的に参加し、見聞を広げられたらと思う。

この4日間アクシデントばかりではありませんでしたが、事前準備から研修中も支えてくださったリーダー、奥尻島研修の機会をつくってくださった稻垣さんと手塚先生に感謝しております。ありがとうございました。



鍋釣岩

## 奥尻研修について

人文学部日本文化学科3年 高橋 景子

### 1. はじめに

2017年2月20日から、北海学園大学人文学部教授の手塚先生と本学の学芸員課程を受講している4年生1名、3年生1名、一年生2名の5名で、3泊4日の奥尻研修を行ってきた。

今回の奥尻研修は、一昨年とは大きく異なり、出発する前から大きな困難に直面した。その困難とは江差から出ている奥尻島行きのフェリーが低気圧の影響で運休する可能性があったことである。この情報が入ったのは、札幌を出発する3日前のことであった。急ぎ、奥尻研修参加者に連絡し、どうするかを協議したが、唯一の移動手段であった飛行機は値段が高いという理由から断念しなければならなかった。そこで、私たちは出発日を変更することにした。本来、18日に出発するところをフェリーが出る可能性が高い19日か20日のどちらかに出発することにしたのだ。しかし、19日も波が高い可能性があると、奥尻島の学芸員で、本学の学芸員課程の先輩である稻垣森太さんから教えていただいた私たちは、より確実に出発できる20日に出発することにした。この日程変更により、本来、7名いた参加者が4名に減ったことは大変残念であったが、出発日を20日にしたことで、当日は少し波が高く、船が揺れたものの無事、奥尻島に到着することができた。これも、海が時化することを長年の経験から予測し事前に教えてくださった稻垣さんのお陰である。ここからは、奥尻研修で何を学んだかについて述べていく。

### 2. 聞き取り調査

今回の研修では、1日目は移動、2日目は聞き取り調査と古文書読解・新聞の切り抜き、3日目は聞き取り調査のまとめと古文書読解・新聞の切り抜きの続きをした。ここでは、主に2日目の聞き取り調査についてまとめる。

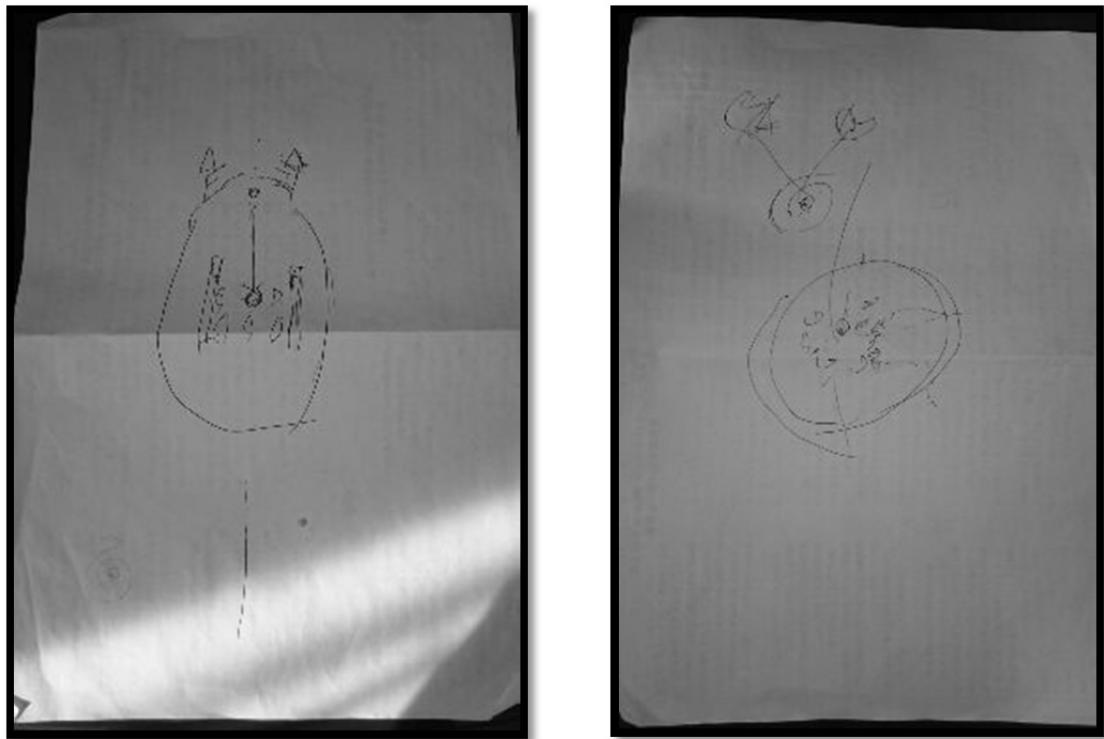
今回、私たちは2日目に2人一組になって聞き取り調査を行った。これは、実際に奥尻島にお住まいの方に直接お話を伺いに行くというもので、テーマは特に決まっておらず、自由にお話して頂いた。私の班は平木文夫さんのお宅で聞き取り調査を行った。お宅に行くと、平木さん以外に木村勝美さんや平木涉さんも来てくださっており、3人の方からお話を聞くことができた。

今回のテーマは特に決まっていなかったが、私たちは主に木村さんの生い立ちと漁業についてのお話を伺った。

木村勝美さんは奥尻島の滝ノ間のご出身で、木村さんの孫爺（祖父）さんが幌内で硫黄を採掘されていたが、漁もされていたので、滝ノ間に住んでおられた。そして、生活の糧としてホッケ漁をされていた。ホッケを捕る方法はまき網・刺し網・籠網の3種類あり、特にまき網漁の手法について、図に描いて説明してくださった。

まき網漁とは、2艘の船で網を引き、「色見」という人が船の高台から、ざるの中に魚群が入ったかを確認し、それが確認されたら、網を縮めて数艘の船で魚を捕るという手法である。また、この手法は1艘7～8人で行うものであった。さらに、本来、ホッケは春から冬の間に捕れる魚であるが、このまき網の手法が使われるのは春だけである。しかし、近年ではホッケが捕れなく

なり、ホッケ漁が行われていたのは昭和40年頃までであった。また、その原因は海水温の上昇ではないかと言われている。60メートルから70メートルくらいの深さがホッケにとって一番住みやすい温度であったが、海水温の上昇により、より海水温が低い140メートルから150メートルの深さに生息するようになったという。故に、奥尻島周辺ではホッケが捕れなくなつたそうである。



【まき網漁のスケッチ】

次に、籠置き漁（籠網漁）についてだが、その手法は籠の中にウニやカボチャのワタを入れるというもので、これは、9月から10月までの秋によく行われていたそうで、ウニを餌にしていたというのが一番の驚きである。また、ホッケもウニの味を知っていたというのがなんとも面白い。これ以外に、カボチャでホッケが捕れると聞いた人がカボチャをそのまま籠に入れたという逸話が大変面白かった。

この他に、色見という職について詳しく伺った。中でも、舵取りは色見の合図で船を動かすというのだから、色見という職が漁をする上でどれだけ重要な存在であるかが話を伺っていてよくわかった。また、色見は誰でもなれるものではなく、また、目が良ければなれるものでもないようで、かなり特別な存在であったようだ。木村勝美さんも色見をされていたそうである。

色見の話の他に、奥尻島で捕れたホッケはどこに行くかについても伺った。奥尻島で捕れたホッケは、頭や尾を切った切り身の状態で青森に運ばれたという。そして、飼料やかまぼこにされたようで、当時は保存技術が発達していなかったため、10年くらい前までは、東京では「奥尻島のホッケは不味い」と言われていたそうだ。今でこそホッケはなかなか食卓に上がらない高級魚であるだけに、この話は衝撃的であった。

ホッケの話の次にタコ漁についても伺った。タコは「たるながし漁」といって、かぎ爪のような物の真ん中にガラス玉をつけて沈め、タコの縄張り意識が強いことを利用して、タコがガラス

玉にまとわりついたところを引き上げるという手法である。この方法は、もともと利尻で流行っていたのを水産指導員である人が奥尻島に広めたものである。しかし、この方法が奥尻島に広まる以前に、すでに奥尻島の一部でこの手法と似た方法でタコ漁が行われていたそうである。また、タコ漁は九月から翌年の4月いっぱいまで行われるが、奥尻島では20年以上前からタコ漁の規制が行われており、4月15日までしかタコ漁は出来なかった。

この話の他に、タコの性別や大きさによってタコの呼び名が変わるという面白い話を伺うことができた。奥尻島ではタコの雄を「シオダコ」、メスを「マダコ」と呼ぶそうである。なぜ、オスのタコをそう呼ぶのか。それは、16キロ以下のタコは水揚げされた後、すぐに、塩漬けに加工されるからである。また、16キロ以上のタコは身が軟らかすぎるため市場には出荷されず、輸出されるそうである。さらに、3キロから9キロのタコが一番値段が高いそうだ。

また、オスとメスであればどちらが美味しいか聞いたところ、断然、オスが美味しいとのことである。まさか、性別によって味が変わるとは思っていなかつたのでとても驚いた。また、タコの性別の見分け方についても教えていただいた。まず、タコの「ボツ」を上にして置き、ボツから左の2本目の足の先のイボが無い所が10cmあるのがオスで、8本ともイボがあるのがメスだそうだ。今度、スーパーに行った際には、この方法でオスのタコを探して食べようと思う。

聞き取り調査を終えた後、私たちは芋煮会に招かれ昼食を頂いた。畑でとれたという奥尻島のジャガイモはとても甘く、大変おいしかった。また、札幌で普段食べているジャガイモとは違い、細長い形をしていて、サツマイモに形状が似ていたように思えた。また、ジャガイモの他に十勝でとれたカボチャもほくほくしており、とても甘かった。その他に、素麺や焼き魚、タコの刺身などたくさんごちそうになった。普段はコメを主食におかずを食べていたので、イモを主食におかずを吃るのは初めてだったが、どのおかずもイモによく合っていた。また、機会があれば奥尻島のジャガイモを食べたいと思った。

### 3. 古文書読解

私たちは、2日目に聞き取り調査を終えた後と3日目に、海洋センターで2人一組に分かれて、古文書読解と新聞の切り抜きを行った。私は両日ともに古文書読解を行ったので、ここからは古文書読解について述べる。

今回、私は「早川家文書」を解読するお手伝いをした。古文書を読むのは、大学2年の「古文書読解」という授業以来だったので、解読するのに大変苦労した。解読するにあたり「くずし字辞典」という辞書を海洋センターの1階にある図書館から借りたのだが、やはり、辞書と実物の資料とでは文字の書き方が異なることが多く、読み取るのに苦労した。特に、古文書に触れるのが1年ぶりということで、授業でならった知識も忘れており、辞書と照らし合わせながら、推理しながら読み進めた。ただ、授業との違いは、授業では資料のコピーを使っていたので、文字がつぶれていることが多く、読みづらい部分が多くあったが、実物の資料ではその心配はないので、実物に触れられることのありがたみを改めて感じた。

また、「この字はなんだろう…」と辞書を見つつ、先生や稻垣さん、そして、一緒に古文書を読解してくれたペアの学生と話し合いしながら解読していくのは、推理しているようで大変面白かった。今後、このように、資料に直接触れられる機会というのは限られてくると思うので、大変貴重な経験をすることができた。



【古文書の読解風景】

#### 4. 最後に

今回は、低気圧の関係でフェリーが欠航するというハプニングに見舞われ、本当に奥尻島に研修に行くことが出来るのか大変心配したが、無事なんとか終えることができた。特に、奥尻島から札幌に帰る23日には、函館から札幌までの区間内で起きたJRの脱線事故により特急列車がすべて運休するというハプニングにも見舞われ、危うく、札幌に帰れなくなるところであった。

奥尻研修へ行く前は、こんなハプニングだらけの研修になるとは思っていなかったので、気楽に考えていたが、実際に行ってみると何が起こるかわからないもので、本当によく無事に帰って来られたものだ…と札幌に着いてからしみじみと思った。これも、不測の事態に冷静に対処してくださった稻垣さんと手塚先生のお陰だと思う。

また、お忙しい中、急な日程変更であったにも関わらず、温かく私たちを受け入れてくださった奥尻町教育委員会の皆さん、本当にありがとうございました。そして、聞き取り調査に協力してくださった町民の皆様、大変貴重なお話をありがとうございます。ありがとうございました。

今回はハプニング続きの研修ではありましたが、とてもいい経験になりました。リーダーとして、今回の奥尻研修に携われたことは、自分を成長させる上で良い機会になったと思います。本当に、ありがとうございました。



【3日目の昼食に食べた海鮮丼：とても美味しかった】

# 新ひだか町博物館研修報告

工学部生命工学科2年 岸 真李奈

## 1. はじめに

平成28年11月6日(日)、私は課外活動の一環として新ひだか町博物館への研修に參加した。參加を決めたのには理由が2つあった。1つはその研修内容である。今回の研修の内容は、資料の整理作業や体験学習の見学、そして施設見学であった。私は今まで何度か他の博物館で研修を経験してきたが、いまだに収蔵室などをみたことがなかった。今回、収蔵室を実際に見学し、博物館における資料保存の体制やその工夫を学びたいと思った。もう1つは研修先である。新ひだか町博物館は図書館との複合施設ということもあり、博物館と連携することで具体的にどのような利点があるのかを知りたいと思ったのである。この2つの事を明らかにすべく、研修に参加することにした。

## 2. 資料の整理作業

まず初めに行ったのは資料の整理作業である。具体的には、資料の情報を資料情報カードに記入する作業であった。カードには資料の寸法や制作年代、製作者などの資料自体の情報に加え、その資料の寄贈者(又は寄託者)の情報、そして収蔵場所の記入が必要であった。今回整理した資料はレコードで、年代は1980年代のものが多く、ジャンルは様々であった。自分が生まれる20~30年前なので知らない曲ばかりであったが、ルパン三世の歌などのアニメ主題歌は私でも知っていて、とても興味深かった。

計測の前にまずレコードケースを除菌用ウェットティッシュで軽く拭き、表面の汚れを取りながら計測に移った。用いた器具はノギス、電子計量機、メジャーであった。計測の際は資料を傷つけないために、計測器具の材質をプラスチック製や紙製などのやわらかい材質のものを使用していた。資料のために細部まで注意していて、その徹底さに驚かされた。また、資料の登録をパソコンでの処理だけでなく、紙に記入することで、万が一パソコンのデータが破損した場合でも資料の情報が残るようにしていた。時間はかかるが、資料についての情報を確実に残すために大切な作業であることを知った。

## 3. 体験学習実習の見学

整理作業の後は体験学習の見学であった。見学した体験型学習は、親子を対象とした体験学習イベントで『化石を取り出そう』という化石のクリーニング作業を行う企画であった。体験学習で気を付けなくてはならないのは、体験学習は教育の一環であり、体験イベントとは異なるということである。体験学習を通して、来館者が興味関心を抱き、学習意欲を持つことが重要なのである。この体験学習では、実際に作業に入る前に、化石についての簡単な講習を行っていた。作業前に講習を設けることで、来館者に自然な形で興味関

心や学習意欲の”きっかけ”を提供することができる所以である。この見学を通して、体験学習が「学習(教育)」に重きを置くための取り組み方を知ることができた。

#### 4. 施設見学

いよいよ施設見学である。時間の都合上それぞれ見学できた時間は非常に短いものであったが、それでも学んだ点は多かった。

最初に見学した施設は図書館である。この図書館は約 12 万冊の収容が可能であり、現在約 8 万冊の本が収容されている。収容されている本は一般書籍の他にも地域資料も豊富であった。博物館と隣接させることで、博物館で興味や関心を持ったことを図書館で確認することができる。博物館と連携することで博物館施設での学びをより深いものにできるのである。また、図書館で保管が困難となった書籍も博物館資料として保存することができる。複合施設とすることで、博物館の機能を向上させることができるのである。今まで複合施設の形をとっている施設には訪れたことがなかったため、とても新鮮であった。

次に見学したのは常設展示室である。常設展示では、新ひだか町の自然や歴史、文化について様々な方法で紹介していた。映像資料や音声資料などを取り入れた展示がなされており、その配置も中央に年表を配置するなど少々変わっていた。来館者が興味を抱けるような展示づくりには、やはり学芸員のデザイン力が重要になってくるのだと感じた。

最後は私が最も楽しみにしていた収蔵室の見学であった。収蔵室では、資料の材質や状態に応じて保管場所を区別していた。紙や鉄など劣化しやすい材質でできた資料は年中空調管理を行っている特別収蔵室に保管され、ほかの資料は一時空調管理を行える別室に保管されていたのである。増加し続ける資料全てを空調管理された室内に収蔵するには、膨大な管理費と場所の確保が必要になってくる。資料を保存に適した場所に分類することは、多くの資料を収蔵するためには必要なことであると学んだ。また、資料の収蔵場所も別の公共施設を改築したものを使うなど、なるべく多くの資料を保存・管理するための工夫を知り、その重要性を知ることができた。

収蔵室以外にも様々な場所を見学することができた。中でも印象深かったのは「前室」と呼ばれる、収蔵室の温湿度を一定に保つ部屋である。この前室を収蔵室の前に設けることで、資料が温湿度の変化によって劣化するのを防いでいるのである。その他にも、資料搬入口や管理室、物品室など初めて見学する場所が多く、とても良い経験になった。

#### 5. おわりに

今回の研修を終えて、学芸員に対する印象が大きく変わった。学芸員同士が互いに連絡しあうことで、より効率的に、博物館活動を行えることを知り、学芸員の機能性や重要性をも改めて実感した。展示の良し悪しだけでなく、博物館の形態までもがすべて学芸員の力量にかかっているのである。

また、今まで講義の中で知識を学んできていたが、実際にそれらがどのように活用されているのかを知る機会がなかった。この研修では、それらを自身の目で見ることで、博

物館を今までよりもより近い距離で感じることができたと思う。

最後に、研修の場を提供してくださった藪中剛司館長をはじめとする新ひだか町博物館の皆さんと、この研修を企画提案してくださった手塚薰先生、私たちに同行してくださった水崎禎先生に深く感謝、御礼申し上げます。



写真 1 資料整理作業の様子



写真 2 施設見学の様子(常設展示室)



写真 3 施設見学の様子(特別収蔵室)



写真 4 施設見学の様子(物品搬入口)

# 地域と歩む博物館の在り方

経済学部経済学科2年 久保田 真由

## 1. はじめに

平成28年11月6日、朝の8時に大学からバスに乗り私は新ひだか町博物館へ博物館資料整理の研修に向かった。当日は突然の吹雪。不安の中2時間半バスに揺られて着いた新ひだか町は打って変わって穏やかな天候だったのを覚えている。いわゆる「地方博物館」がもつ地域に根差した独自の姿勢やその多様性に興味があった私にとって、この研修は1日という短い間でも貴重な体験になった。

## 2. 研修内容

新ひだか町博物館の基本的な資料の性質について説明を受けた後で、私達が具体的に行つたのは博物館に町民から寄贈されたレコードの資料情報カード作成であった。資料に傷をつけないよう腕時計やボールペンをしまい、手をよく洗ってから作業に取り掛かる。文化財用のウェットタオルで軽く汚れを落としてからレコードを面に触れないよう注意して取り出すと、用紙でレコードを保護しながらメジャー、ノギス、はかりを使って資料のデータをとり、ジャケットからは収録内容や歌手名、発売年、レコード会社を確認してカードへ記入していく。



レコードを計測し資料情報カードを作成する



除菌用ウェットタオルで汚れを取り除く

レコードという私達学生より上の世代の資料に最初は戸惑ったが、個人から大量に寄贈された資料だったのでやはり数をこなすうちに資料の性格というか特有の傾向が見えてきて皆和気あいあいと積極的に作業を進めていった。しかし、いかんせんレコードがど

の程度繊細なものか実経験がない分不安で、手つきは普段より慎重なものであった。

### 3. 常設展示のかたち

作業がひと段落したところで午後からは藪中館長案内のものと、展示室、バックヤードでの実際の資料管理風景、教育普及事業の一環として開催されていた化石のクリーニング親子体験教室(子どもの参加人数が多く、リピーターの割合も大きいことに驚いた)、災害時に避難所の役割を果たす屋上、などなど博物館内をまわった。

来館者として訪れた際のガイドツアーなどは別として、課程の中で学芸員の方に“常設展”的解説をしていただけた機会は意外と少ないのではないかだろうか。

同時期、私は博物館実習Ⅲにおいてグループごとに 21 世紀の北海道に必要な架空の博物館を新しく創り出す講義を受けていた。話し合いが進み設計図までできるも、私達の博物館の設立理念でどのような役割が果せるか。似通った題材を取り扱う既存施設とどう違う

のか。博物館の独自性がぼんやりと決まらない。そんな中研修に向け新ひだか町博物館のパンフレットを受け取った時から私はその常設展示を見てみたいと思っていた。

新ひだか町博物館は、近隣に地方の特色である史跡や文化財を専門的に扱う施設が在る状況下で新ひだかのシンボルとして独自の役割を担っているように感じる。実際に常設展示室を訪れた感想として、順路指定のない自由な室内、音声資料、触って楽しむ仕掛けのある展示、一つひとつの資料をみせる展示とはまた違う関連資料を集めた空気感を伝える展示、縦長のスクリーンに映し出される事で臨場感を帯びた新ひだかの四季の映像…などなど五感に働きかけ、好奇心の糸口となるような展示の仕方が多く、「棲み分け」がなされているのを感じた。

また藪中館長が常設展示室についての説明の中で「展示内容を変えないことによりこの博物館に来たら〇〇があるというイメージをもってもらえるメリットもある。一方でそれに見合った価値があるかの検証が當時求められる」と語っていたのが私にはとても印象的であった。今後博物館の常設展示を訪れる際にはその展示内容に至った背景なども念頭に置いて観覧したい。



化石クリーニング（親子体験教室）の様子

#### 4. 図書館との共存

博物館から話は逸れるが、併設されている新ひだか町図書館もステレオタイプな図書館とは異なる新鮮な施設であった。広々とした館内には書店のようにレイアウトされた新刊コーナーや特集コーナー(研修に訪れた際はファイターズ特集だった)、他にもレシピ本や育児書など実用書の数が多く、CD・DVDの貸し出しや子供向けの「読書通帳」なるものまであった。館内全体の配置も利用者の様々な年代や用途に向け、入口近くには雑誌コーナーと低い本棚が並ぶ児童書コーナー、奥に進むにつれ長時間滞在する人向けた学習室や資料コーナー、一般書コーナーの中にある学生に向けた図書が並ぶ本棚といった具合に配置分けがされており「施設」としての図書館ではなくライフスタイルの一部として町民の暮らしの空間になっているように見えた。図書館は時間の関係上そこまで深く見学できなかつたが、今になって聞いてみればよかつたことなどが浮かんできて少し後悔が残る。

藪中館長の説明によれば図書館併設後、図書館利用者の1～2割が博物館も利用し博物館来館者が増加したという。博物館がより多くの来館者を獲得した点ではもちろん、(図書館という場の性質上)幅広い年齢層が博物館に足を運びうる環境をつくった点においてもこの併設のシステムはおもしろい。研修で訪れた際にも図書館と博物館で連動した展示が行われていたが、今後より展示のターゲットや方向性が広がっていくのかもしれない。



広々とした図書館内には書店のようなレイアウトの新刊コーナーもある

#### 5. おわりに

「博物館」と聞くと私はどこか恒久的なイメージを覚える。ずっしりとした変わらなさは博物館の魅力であるが、変化もまた求められる。当然ながら容れ物としての博物館の形に決まりはなく様々な環境や条件の中で、その役割を果たすために最適な姿を模索、変化

していくのだろう。地方博物館においてこの変化は地域と足並みを揃えてやっていく必要がある。今回研修としてその一例である新ひだか町博物館・新ひだか町図書館を垣間見た訳だが、両方の施設を通じて建物全体が町民のための文化学習の場になっているのがわかった。また、学芸員の方が近隣博物館との助け合いが大切だと口々に言っているのを聞き「地域との連携＝博物館と住民の関係」だと思っていた私の考えは少し違って博物館同士の関係も含めて地域の連携なのだなと感じた。

札幌から新ひだか町までというと自分一人で気軽に行ける場所ではない。百聞は一見にしかずとはよく言うが、広報媒体で外から知ると現地を訪れるのでは感じるものが全く違いこういった機会に恵まれたことは大変ありがたいことである。

学芸員課程を受講していてもまだまだ博物館の未知なる部分は多い。それは知識として持ち合わせていないことから経験を通して養われなくてはわかりえない体感的な事柄まで様々だ。

今の私が博物館と触れ合う手段は主に“見る”ことである。この研修で得た発見もあれば、気づけなかった事や後から湧いてくる疑問もたくさんあると思う。一つひとつの経験や感じたものをその場限りで終わらせたくない。わからないなりにしっかり考えて、博物館を見るための新しい視点として自分の中に蓄えていければと思う。

最後に、お忙しい中親身にご指導いただいた藪中剛司館長に心より感謝、御礼申し上げます。

## **新ひだか町博物館での研修を終えて**

**人文学部日本文化学科2年 森川 日菜子**

### **1. はじめに**

学芸員課程の課外活動の一環で、平成28年11月6日に新ひだか町博物館での研修に参加させていただく機会があった。新ひだか町博物館は、一昨年4月、新ひだか町が誕生して10周年の節目に設立された。新ひだか町の歴史や文化、自然についての理解を深めることができる。また、図書館との複合施設になっており、町民の学びや文化活動を支える、情報提供の拠点となっている。今回の研修では、主に資料整理や館内の見学などを行った。案内してくださったのは、藪中剛司館長である。この研修を通して、学芸員の業務で重要なことや、博物館の在り方など、様々な点について学ぶことができた。本稿では、研修での作業について、また、それらを通して学んだことや感じたことなどについて述べていきたい。

### **2. 資料整理**

新ひだか町博物館に到着し、まず資料整理を行った。扱ったのは、町民から寄贈されたレコードである。まず、資料に触る前に、石鹼で入念に手を洗った。その後、資料カードの記載の仕方や、資料の計測の仕方などの説明を受けた。まず、計測を行う前に、レコードの外装を軽く文化財用の除菌用ウェットタオルで拭き、汚れを落としていく。そして、レコード本体の重さ、厚さ、直径を図り、資料カードに書き込んでいった。計測は、計量器と巻き尺、ノギスを用い、本体を傷つけないよう薄葉紙に挟んで行った。資料カードに書き込むのは、これらの計測結果の他、資料の分類や寄贈者についての情報、所在地などである。それぞれのレコードについての詳細な情報についても記入した。具体的には、そのレコードに収録されているA面とB面それぞれの曲名や歌手名、レコード会社名である。この作業は昼休憩をはさみ、約3時間半行った。

この資料整理の作業を通じ、用具の使用方法や資料カードの記載方法などについて理解することができた。特に、レコードの厚さの計測に用いたノギスは、今まで使用したことがないかったため、新たに使用方法を知ることができた。さらに、今回扱った資料はレコードであり、その性質や状態を十分理解したうえで作業した。今後その他の様々な資料を扱っていくうえで、まずその資料について理解して扱うことが重要であると感じた。また、私の世代で、音楽を聴くことができる電子媒体として一般的なのは、CDである。したがって、レコードにはなじみが薄く、直に触れるのは初めての機会だった。レコードの多くは1970～80年代のものであったため、懐かしの名曲、俗に言う懐メロが一堂に会していた。

ジュディ・オングや松田聖子、郷ひろみなど、なじみ深いアーティストの楽曲が多数存在していたため、楽しく作業を進めることができた。

### 3. 館内見学

資料整理後は、藪中館長の案内で館内を見学した。この日は体験学習室にて「化石を取り出そう！」という普及行事が開催されていたため、そちらから見学した。岩石からアンモナイトなどといった化石を削り出すといった内容で、親子で参加するものだった。ゴーグルが用意されており、安全に留意されていると感じた。また、体験学習室には来館者がコートなどを掛けるクローゼットのようなスペースが併設されており、利便性も感じられた。

次に、普段は入ることができない屋上を見学した。こちらは、東日本大震災が発生したことによる防災意識の高まりに伴って設置された設備である。本館は海から近い場所に位置するため、万が一地震が発生した際、津波が襲ってくる可能性がある。このようなとき、町民の最後のよりどころにしようと屋上が設置されたという。したがって、本館は天井が高くなっている。また、施設全体のシステムが、災害時に比較的復旧の早い電気よってまかなわれているという点でも防災意識の高さがうかがえた。このような施設があることにより、町民の安心感は格段に高まるだろう。

続いて見学したのは、図書館である。こちらも充実しており、地域に根付いた書棚や馬に関する展示、季節に合わせた特集などが印象的であった。読書通帳という、読んだ本がすぐに確認できる通帳を作成できるというのも、他の館では見られない画期的な取り組みであると感じた。また、閉架にも入れていただくことができた。新ひだか町博物館は図書館と一緒にすることで、来館者がかなり増加したという。これは、博物館への来館者と図書館への来館者の「知りたい」や「学びたい」といったニーズの一一致に伴っている。

次に、常設展示と企画展示を見学した。常設展示は、新ひだか町の歴史や自然、文化などについて詳細に理解できるものとなっていた。明確な順路が無く、来館者が自由に見て回ることができるようになっていた。常設展示室全体を見渡し、まず目に留まるのが二十間道路をモチーフにしたと思われる自然系の展示や年表、映像資料である。年表には引き出しが付いており、関連資料や四コマ漫画などを見る事ができた。なかには西南戦争時の時計が展示されており、新ひだか町と明治維新の繋がりをうかがうことができた。また、映像資料は目に留まるだけでなく、新ひだか町の四季折々の景色について知ることができる。町内の校歌を展示するというのも斬新で、町民の興味関心を引くものであると感じた。企画展示室では、「静内高等学校郷土史研究部文化人類学研究部の足跡」という企画展が開催されていた。その展示のなかには、恵庭市のカリンバ遺跡と静内御殿山墳墓群を比較するというものがあった。写真や資料提供は、恵庭市郷土資料館からなされていた。偶然にも、私が住んでいる恵庭市と新ひだか町の繋がりを見ることができた。このように、博物

館または学芸員同士の提携や協力も博物館を運営していくうえで重要なだとわかった。

最後に、展示準備室や収蔵庫といったバックヤードを見学した。博物館の役割の一つである、保存をつかさどる重要な設備を見ることができた。展示準備室の壁は、光の反射を抑えるためにグレーで統一されていた。特別収蔵室は前室を抜けた先にあり、館内で唯一常に空調が入っている。壁は珪藻土でできていて、簡単に乾燥したりしないという。また、収蔵されている資料の量が少ないと感じたが、これからは増える一方であるため、収蔵の仕方を工夫する必要があるという。

館内の見学を通し、保存や展示などの博物館としての重要な機能を確認することができた。また、町民を災害から守る施設として、学習の場として町民に寄り添う博物館の在り方も理解した。

#### 4. おわりに

今回の研修では、学芸員を目指すうえで重要な、資料の保存や展示に関わる様々な事柄について学ぶことができた。また、普段は決して入ることができないバックヤードなども見ることができ、貴重な体験をした。研修全体を通して、私が志している学芸員についての理解を深めることができたため、大変有意義なものであったと実感している。二年間の大学生活を振り返ってみても、これだけ充実した一日はあまりない。今後もこのような機会があれば、積極的に参加していきたいと考えている。

最後に、対応してくださった藪中館長、引率してくださった手塚先生、水崎先生に感謝、御礼を申し上げます。



資料整理作業の様子



常設展示室



特別収蔵室

## ミニミュージアムのねらいと講評

北海学園大学教授 手塚 薫

ミニミュージアムは、博物館経営論の一部の時間を使って、学生の手先の器用さと企業経営の理念を合致させる大胆な試みである。構想・制作にかかるほぼ全ての時間は、学生たちの自主的な努力、すなわち講義外の「時間外労働」によって支えられている。

博物館に携わる者は、博物館の使命や方針・目標を理解し、目標達成のために最大限の努力を行い、評価と改善に参画する。博物館の経営者は、経営資源を最大限に活かし、透明性を保ち、安定した経営を行うことで公益の増進に貢献する。

これは平成 22 年度の文部科学省の委託を受けて、財団法人日本博物館協会がまとめた『博物館倫理規定に関する調査研究報告書』の行動規範 4. 経営に掲げられた一文である。博物館にかかわらず、どのような職種においてもここに表明されている行動規範は通用する。たとえば、透明性を担保することの難しさは、日本社会の様々な局面でくり返し立ち現れる。情報公開制度による開示請求によって、行政文書がたびたび紛失したり、処分されたりするのが発覚するのは、日本の民主主義の未成熟さを象徴しているからなのかもしれない。

さて、通常、経営資源の 5 大要素は、ヒト、モノ、カネ、情報、時間とされている。優れた企業では、組織を円滑に運営するうえで、数値化できない価値観のような要素をも重視している。著名な経営コンサルティング会社であるマッキンゼー＆カンパニー社が提唱するソフトの 4 S（経営スタイル、スキル、スタッフ、シェア・共有された価値観）とハードの 3 S（戦略、組織、システム）は相互に補い合って組織の価値を高めるという。ソフト要素は人の価値観や感情がかかわっているため、変更が容易ではなく、一方のハード要素は経営者の意思や企業努力で再構築がしやすいとされる。マ社では「共有された価値観」こそ、組織マネジメントの要に位置し、最重要的「S」としている。「共有された価値観」は、組織に所属する全メンバーの行動の規範になる考え方であり、「基本理念」と「ビジョン」から構成される。

実際のミニミュージアムの制作場面では、単なる小学生の工作にならないために、工作よりも先にこの 2 つを徹底して考えぬき、それに依拠して作業を進め、最終プレゼンにたどりつくことを求めた。「ビジョン」はゴール達成のために目指すべき短期目標とし、「基本理念」はそれよりやや抽象的で長期的な展望とした。その 2 つが合わさったものが「展示趣旨」（企業で言えば、共有された価値観）になるというイメージである。さらに「現状分析」することで、出発点と立ち位置の明確化を促し、現時点での課題を認識させた。少々理屈っぽくなることを覚悟したが、学生たちの多くは自己流の解釈を加味し、楽しみながら制作物（展示、ポスター、図録）の完成にこぎ着けていたと感じる。ここでは、紙数の関係からそうした佳作のごく 1 部しか紹介できないが、制作時の苦労とともに山田萌果さんにまとめてもらったものを紹介する。

# 博物館経営論課題《ミニミュージアム制作》を終えて

大学院文学研究科修士課程2年 山田 萌果

## はじめに

博物館経営論の授業における最終課題は、ミニミュージアムを作るというものであった。実際に制作作業にあたった期間は3週間ほどで、授業時間外の作業は必須となつた。今振り返ってみると結構ハードな課題であったと感じる。

それでも、この課題を通じて学び得たものがあり、良い経験になったと思っている。今回のこのレポートは、ミニミュージアムの制作過程、私自身の作品の内容、制作し終えた感想を中心とし、この課題を通して学び得たことを振り返っていこうと思う。

## 1. ミニミュージアムの構想段階

最初に私自身のことを書いておこう。私は中学、高校、短期大学の8年間、美術科という特殊な学科に所属していたため、ものづくりには多少自信があった。しかし、如何せん数字が苦手である。もののサイズを測り緻密に計算するような作業は苦手で、与えられたものの中で自由に描いたり造形したりすることが得意なのである。言い訳がましいが、今回のミニミュージアムは建築物の模型のようなもので多少、サイズに考慮したりする必要があった。まずその点がミニミュージアムの課題を出された際の不安点であった。

また、もう一つの不安点として、製作期間のことがあった。この課題を前年度にやり終えた学生の作品を自分たちの作業に取り掛かる前に見ることができたのだが、前年度の学生は感想に「とにかく時間がなかった」「計画的に作業をすすめることが大切だ」といったことを書いていた。そんなにも時間に追われることになるのだろうか、と不安になったことを記憶している。

ミニミュージアムは、写真資料1のような発泡スチロール箱（35×30×15）に収まるサイズであること、しっかりとした理念があること、ミニミュージアムと共に図録も制作することが条件であった。

条件のもと、まずは企画書作りからスタートした。展示構案にはしっかりとした教育的内容がなくてはならない。社会問題や近年の物事の傾向に配慮したうえでテーマを決めてほしいというのが重要な条件のひとつであった。テーマを考えるのには一週間の時間があり、その後の授業内で各自の展示企画の発表が行われた。他の学生の発表を聞いて私は正直驚いた。宇宙ゴミの問題や差別問題、食育についての問題、自然環境の問題を取り上げて展示の教育的内容に反映させている子が多くいたからだ。「みんな、真面目だ…」というのが私の感想である。



【写真資料1】

というのも、私は、「自分の好きなもの、得意な分野をそのまま反映させてしまおう！」と安直に考えていたからである。

私は、ミニミュージアムを作るにあたってどのようなテーマでやろうかと考えたとき、自分の研究内容と合致したものがやりたいと思った。ある程度知識があるもので作ったほうが楽しいし自分のためにもなるのではないかと考えたからである。作業中に心が折れてしまわぬようにという理由もある。私が大学院で研究している事柄は、芸術における少女の表象である。ミニミュージアム製作期間は、大学院の中間報告を挟んでいたため、研究と並行しながらできる題材を選択した。

## 2. 現状分析、コンセプト、ビジョンの設定

では、実際に私がどのような展覧会を企画したかについて書いていこう。私のミニミュージアムの企画展は『少女の世界展』と題し、芸術作品の中の少女像の変化を辿り、現代において描かれている「新しい少女像」を発見してもらいたいというねらいのあるものにした。

今回のミニミュージアムの課題は、どんな意義があつてこの展示をやるのかを明確にしなければならなかつた。そのため、企画展の題材が現状どうあるかの「現状分析」、企画展の趣旨である「コンセプト」、現状分析で示したことをどのように変化させていくかの「ビジョン」を図録に記載することが必要であった。ビジョンにおいては、短期目標と長期目標を設定する必要があった。

実際に私が図版に記載した現状分析、コンセプト、ビジョンを順に掲載、解説していく。

### 現状分析

現在、「Kawaii」文化が世界に発信されるなど日本の少女のカルチャーが注目を浴びている。しかし、それらを世界に発信するのは所謂《大人》であり少女文化の中に属している者ではないことが多いのではないだろうか。

本来少女たち自身の文化であるものが、経済の手段として、または自国のアイデンティティとして利用されるというのは本来の少女たち声を無視することに繋がりかねない。

また、少女を描いた作品は、これまで男性が描いたものがほとんどで、少女は描かれるもの、つまりは客体にすぎなかつた。現代、女性の作家たち、または心に少女性を秘めている男性の作家たちが自分たち自身の姿である「少女」を主体として描き始めている。これは芸術の歴史の上で見逃すことのできない革新なのではないだろうか。

他の学生のような実際の大きな社会問題を取り上げたわけではないが、現在、少女が作られたモノとして主体のないまま利用されている状況を示し、批判的に捉えることによって、私が見せたい作品の持つ力を強調するように意識した。さらに、今までの芸術では男性が描くことがほとんどであった少女が、女性が芸術家として活躍できるようになって主体的に描かれ始めている。そして、今現在の芸術における少女像の変化を前向きにとらえたいという意思表示を行つた。

### コンセプト

「少女の世界展」は、《主体としての少女》を取り上げ、《新たな少女像の発見》を実感してもらうことをコンセプトとしている。

現在少女期を生きている子は勿論、成人した女性、男性であっても心の中に少女性はあるはずである。今回の展示のメインは少女自身が描いた少女たちであり、今までなかった攻撃的な少女や怖い少女だ。それらを観ることで新しい少女の姿を見出し、心の中の少女との対話をしてもらいたい。

コンセプトはシンプルに設定した。展示の見方は鑑賞者に委ねられるべきものだと私は考えているので、この展示で具体的な何かを学びえるというコンセプトではなく、各自の心の中での対話を促すような文章にした。

### ビジョン

「少女の世界展」の短期目標は、

- ・今まで芸術で描かれてきた少女は客体に過ぎなかったという気付き
- ・現代では少女を主体として捉えた作品があるということの実感
- ・とつつきにくいと考えられるがちな現代アートを身近に感じてもらう

ということが第一にある。

そして、

- ・現在少女期を過ごしている鑑賞者または心に少女性を秘めている鑑賞者が作品に共感し、痛みを芸術作品と共有すること
- ・現代の少女文化は本来少女たち自身のものであり、単なる一過性の流行ではないという気付き
- ・現代アートにグロテスクな描写が多いのは流行ではなく脈々と続いてきた男性中心主義に対する反発であるということへの気付き

が次の段階にある。

これらの目標達成のために、現在進行形で活動中の作家たちの作品を重点的に展示する。また、時系列がわかりやすいよう、初めに客体として描かれた少女たちの作品を紹介しておく。

ビジョンは、コンセプトとは異なり、仕掛ける側の思惑であると捉え、鑑賞者の気づきに対する私の理想型を提示した。このビジョンは短期目標として、展示を見た瞬間の変化を、次の段階として展示を見た後の余韻による変化を想定している。

これら三つは、実際に制作する作業に移る前に設定した。そうしなければ、制作しているうちに展示自体が変化し、軸のないものになってしまうだろうと思ったからである。

## 3. 制作

現状分析、コンセプト、ビジョンを設定し、展示の順路やセクションをどうするか、つまり展示のストーリーについて入念に考えた。鑑賞者が自由に見て回れる作りもありだが、今回のものは明確なビジョンの設定があったため、順路を設定しそれに沿っていく形をとった。私の展示は、少女を描いた絵画を歴史的に見ていく必要があったので年代順に分けることにした。展示のセクションは、4つに分けた。初めに導入として「I. 少女とは」と

し、少女を描いた古典的絵画二点を紹介。次に「II. 可憐な少女」で西洋のロマン主義以降に見られる可憐な少女絵画を紹介し、「III. 日本の少女文化」で明治期からの少女雑誌などで描かれた「カワイイ少女たち」を紹介する。最後がメインで、「IV. 現代の少女たち 少女が描く少女」と題し、現在活躍中のアーティストによる少女を描いた絵画を紹介し、今まで見てきた作品との違いを実感してもらうという流れにした。展示ストーリーを決め、作品選定をし、実際の作業に移った。

まず、ただの発泡スチロール箱に穴を開け入り口を作ることから始めた。そして、どのように順路を作るのかを決め、箱の中に仕切り（壁）を作っていました。もうすこし時間があれば、展示する絵画作品の縮尺を明確にしたかったがそのあたりは大体でよいだろうと判断した。スチロール箱の内部に貼る作品のキャプションや、解説パネルも大体このくらいだろうという感覚で作成した。

作業は週に一回の授業時間内では当然足りないため、私を含めほとんどの学生が空きコマを利用していた。まるで生ものが入った箱を運ぶように、発泡スチロールを抱え自宅に持て帰った勇者もいた。私は、大学院の授業の合間を利用し学校内で制作を地道に進めた。

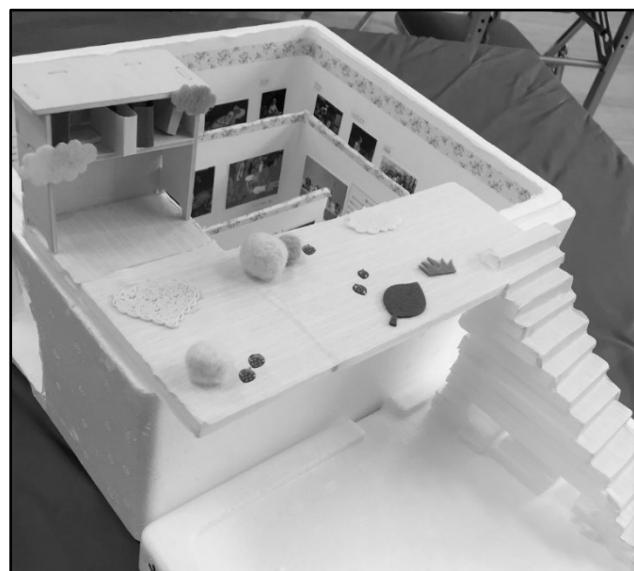
実際の作品を撮影したものが、写真資料2～5である。

右の図2は完成版を真上から撮影したのだ。入口が下部中央にあり、通路が作られている。順路が複雑になりすぎないようにシンプルな配置を心掛けた。また、遊び心で二階も作ったため二階に続く階段も作った。二階部分は箱の中に収納できるようにし、条件をクリアした。二階部分を取り出し、設置すると、画像資料3のようになる。二階は休憩スペースで、自由に本を読んだりできる空間にした。

出口は二階から階段で降りていく形にした。



【画像資料2】



【画像資料3】

入口は、画像資料4のように単純に箱に穴を開け、入ってすぐの壁には、あいさつ文と一番初めの作品がくる形にした。

内部は、画像資料5、6のようになつた。各セクションのタイトルは、解説パネル、キャプションとの違いを強調するため縦書きにし、鑑賞者が区切りを意識しやすいよう工夫をした。

大きめの解説パネルは、多くの美術展でもそのようになっているが、資料2のように絵画と同等の大き目のサイズにし、読みやすさを考慮した。作品キャプションはすべて当該の作品下部に設置した。



【画像資料4】



【画像資料5】



【画像資料6】

実際に作業していると、思い通りに行かなかつたり、想像していたものより良いものが出来たりいろいろなことが起こる。発泡スチロールは、接着が難しく、切断も簡単ではないのでまずその扱いに苦労した。始めは中々気乗りしなかつた作業ではあったが、想像していたものが形になってくると楽しくなってくるもので、後半は結構楽しんで制作していくように思う。自分のテンションが上がるための工夫は制作の過程で重要なことだ。作品に雰囲気が出るとテンションは上がってくる。私は少しでも「美術館っぽい」雰囲気を出すため、フリー素材のサイトから床のフローリング素材を拝借しカラーコピーし、床に貼った。作品画像の縮尺は正確にはできなかつたが少しでも雰囲気を出すため、普通の紙ではなく光沢のある紙にカラー印刷した。雰囲気を出す作業は、最終的な見栄えにも関わってくるので私の場合小さな部分にできるだけこだわるようにしていた。

#### 4. 図録とポスター

実際のミニミュージアムは3で紹介した画像のように完成した。最後にやらなくてはならなかつたのは図録の制作とポスターの制作であった。ポスターなどを作るのは割と得意なほうなので、私はミニミュージアム現物の制作の合間でサッと作ってしまった。現物より先に完成したのがポスター（画像資料7）だった。ポスターには展覧会名と場所、日時を記載した。場所は架空で良いだろうということで山田記念芸術文化館と勝手に作った。

ポスターに使用したのは、ミニミュージアム内にも展示した橋爪彩というアーティストの作品で私のお気に入りである。作品自体の背景が黒かつたので、ポスター背景自体を黒に設定し、インパクトの残るようなものにした。「あなたの知らないあの子に出逢う」というキャッチコピーは私が展覧会のコンセプトをもとに作った。色は黒を背景に白、ピンク、青のみを使用し、見やすさを重視した。

図録は、A5版で制作し、印刷し、先生から与えられたファイルに入れた。現状分析、コンセプト、ビジョンもそこに記載し、凡例、謝辞も記載した。作品図録なので、ミニミュージアムで展示した作品すべてと、美術作品なので制作年、使用画材も記載した。



【画像資料8】

図録表紙（ポスター縮小版）



【画像資料9】

図録 p. 11-12



【画像資料7】 ポスター

図録には、作品画像だけだと寂しいと感じたので短いコラムを3つつけた。最後に「主導権は私たちがもつ　一少女が持つ強い意思ー」と題したエッセイを書いた。

実際の展示図録にコラムやエッセイが掲載されている例も多く、このように文章を図録に入れることも雰囲気を出すのには良かったのかもしれない。展示について考えていたことや知識はこういった一人でこなす課題のときは惜しみなく使ったほうが自分のためにもなる。

私の場合、美術作品を扱ったのでほとんどのページが作品の画像であったが、他の学生の図録は各自が調べたことを文字や図をふんだんに使用して解説したようなものが多く、かなりのボリュームがあり、面白かった。図録はミニミュージアムの中で語り切れなかつたことをより詳しく書くことも可能なので、作っていてとても楽しかった。

## おわりに

このミニミュージアムを作るという経験によって、展示の企画というものがいかに手間のかかる作業なのかということを実感した。ただ単に「これを展示してみたいなあ」というだけでは展示を構成することは難しい。どういった資料を展示し、どのように見せるのか、それには一体どんな意義があるのかをきちんと考えることがいかに重要なのかがよく分かった。

しかし、学芸員が「この展示でこのような学びを得てほしい！」という願いは強すぎるとなだのメッセージの押し付けにしかならない。ある程度は見る側が自由に感じるための余白のようなものを作つておいたほうが良いのかもしれない。

今回は現状分析、コンセプト、今後のビジョンを考えることによって展示のイメージを膨らませることができた。今回のミニミュージアムの課題でビジョンがないと博物館は上手くいかないのかもしれないと思った。ただなんとなく展示を行い、なんとなくイベントをやっていてはいけないのだろう。

学芸員課程実習Ⅲでは、5、6人のチームで企画を作るという課題があるが、博物館経営論のミニミュージアムは一人での作業であった。チームの作業も学芸員にとっては重要であるが、今回一人で黙々と構想を練つて、制作をする作業によって展示企画の流れの全体像を知ることができた。この経験は大学院での自分の研究にも活きてくると感じている。

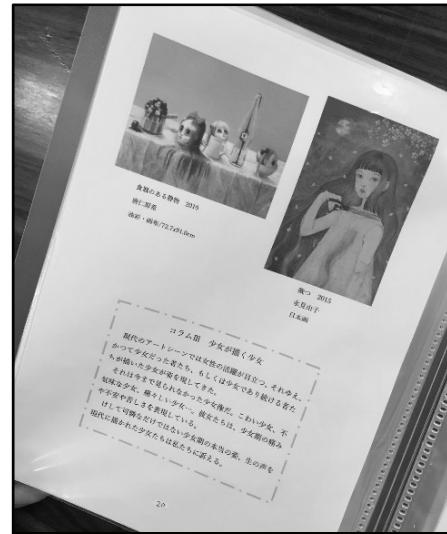
## 出典

[画像資料7] ポスター引用作品

橋爪 彩『Girls start the Riot』 2011(平成23)年、木パネル・油彩、130.3×194.0cm

高橋コレクション所蔵

作品画像引用元 橋爪 彩 公式HP (<http://saihashizume.com>) 最終アクセス日 2017.4.2.



【図10】

図録 p. 20

## 博物館資料論 / 博物館資料保存論について

北海学園大学講師 水崎 祐

学芸員課程の必修科目の一つである博物館資料論を他大学にて私が初めて教鞭を執ったのが2006年である。それから10年ほどの年月が流れたが、その間、基本となる授業構成を土台としつつ、その時代に対応した事項に言及できるよう講義内容に修正を加えてきた。

本学（北海学園大学）にて博物館資料論を担当させていただくようになったのは2012年度からであるが、この年度からの授業構成には、それまで以上の修正を施した。「博物館法」（1951）の改正による学芸員課程省令科目の手直しが行われ、それが施行されたのが2012年4月1日である（博物館法施行規則1955、附則2009）。この改正に対応するための、博物館資料論の講義内容修正である。

博物館資料論の講義構成に大きな影響を与えたのは博物館資料保存論が新たに必修科目として加えられたことである。それまでは博物館資料の保存についての考え方を博物館資料論の授業にて講じていた。しかし、博物館資料の保存に焦点を当てた科目が加わったことにより、博物館資料論と博物館資料保存論との間で内容の振り分けをしなければならない。よって博物館資料論で言及する資料保存については、博物館資料保存論へスムーズに入り込むための橋渡し的な内容を意識した。

2012年度から今年度に至るまでの5年間の間には、博物館を取り巻く環境の変化により、その変化に対応するために博物館の活動形態も速いスピードで変化し多様化しているよう感じる。

昨今においてはテクノロジーの進化によりデータ化した資料へのアクセスがより一層、容易になった。しかし、実物であることの意義は失われていない。実物が存在している（消滅してしまった場合には「存在した」）からこそ、二次的な資料が存在できるのである。

これまで体験学習的展示は科学館が主たる場となっていたが、他の分野の博物館でも体験学習的コンテンツが試みられるようになっている。このような時代においては、より一層、実物としての資料と、画像やレプリカとしての目的に応じた効果的な使い分けが求められる。この効果的な使い分けが博物館が持つ矛盾した役目「資料の保存 vs 資料の活用」の実践においてのカギとなるであろう。

このような状況に対応していくためには学芸員の意識改革が求められる。「実物資料があり、それをサポートするための資料についてのデータやレプリカ」という考えから、「実物も、そのデータやレプリカも、同様に博物館資料である」という捉え方へのシフトが必要であろう。これは博物館資料論での「博物館資料とは？その扱いと活用法は？」というテーマのみならず、博物館資料保存論での「資料保存の対象と、その意味」についても新たな考え方へと導くであろう。

さて、今年度も引き続き学生には自身で選んだモノを博物館資料として分析するレポートを課した。課題の指示は例年と同様であるが、授業内容の私のアップデートが、学生の

レポートでの記述に反映されている箇所を見つけた時は、正直うれしい。

課題では7つの項目についてレポートを課しているが、学生の応用力が特に問われるものは『リクワイアド・エンバイロメント(Required Environment)：保存の際に気をつける点（環境設定等）』と『ハンドリング・インストラクションズ（Handling Instructions）：取り扱いの際の注意点』の2項目であろう。

これらの項目についての詳細は博物館資料保存論での範疇となるため、博物館資料論の授業では着目点と考え方の基本にとどめている。よって、レポートではこの考え方に基づき、各学生が自身で応用の可能性にチャレンジしている。日常の使用を目的とした道具や物の保存・手入れ・扱い方ではなく、博物館資料の保存と扱い方として捉えて考察できるかが、カギとなる。

次頁以降では今年度の博物館資料論のレポートより課された項目について忠実、かつバランスよく作成されたレポートを選んで掲載している。ほとんどの学生が大学生となつた4月からの前期の博物館概論と、後期の博物館資料論の2科目のみの学芸員課程の講義で得た知識を用いてのレポートであることを考慮すれば、良い状況で通過点を走り抜けたといえるだろう。今後はいかにこれまで学んだ知識を今後の学芸員課程の科目と結び付けて応用できるかである。

今年度の博物館資料論の受講学生のレポートに加え、昨年度に私が担当させていただいた博物館資料保存論の受講学生のレポートも一つ掲載している。本誌掲載の『博物館資料保存論の学事報告～授業の構成～』との関連もあるが、博物館資料論と博物館資料保存論のレポートでの着目ポイントの違いを比較できるサンプルともなるであろう。

このレポートの掲載選択理由は、資料の構成素材として何が使われているかの観察、そして各素材の温度・湿度・空気の影響による劣化の可能性が見やすく図と表で示されている点である。

## 博物館資料ドキュメント『軍隊手牒』

文学研究科修士課程2年 海藤 梓

### Object Description Report - 1 (資料がどういうものかについての記述)

この資料は昭和後期、旧日本軍で用いられた軍隊手牒である。軍隊手牒とは、所有者である軍人の履歴などといった個人情報と、軍人としての心構えや規則を掲載した冊子のことであり、旧日本軍では傷病兵が年金支給を申請する際に軍隊手牒を必要書類としたことから、身分証明書としての役割があったと考えられる。なお旧日本軍の軍人は、軍隊手牒の記載事項を全て暗記することを要求されたという。

戦前の旧日本軍内で配布したという事情を踏まえると、製作国は日本であり、かつこの手牒の所有者であった海藤拓一が、昭和16年（1941）に徴兵され満州へ向かっていることを加味すると、製作年は昭和16年かその少し前の時期と推察される。

形状としては、冊子を閉じた状態で縦12cm、横8.0cm、厚さ0.8cmの長方形型であり、封をするにはボタンで留めるのではなく、表紙に繋がった帯部分を裏表紙についている留め具に挟み込むようにして閉じるようになっている。その上で、表紙・背面・裏表紙は、ハードカバーのように厚紙を布で包む形となっており、厚紙と布は白い糸（ただし、この糸もすでにかなり変色し、茶色に近い色合いとなっている部分も見られる）により縫い付けられている。なお、布に関しては、色はオリーブ色であり、布地は綿であると思われるが、厚紙についての詳細は不明である。劣化状態は激しく、表紙・裏表紙・中身共に折れや破け、またインクの滲みがあちこちに見られ、かつ全体的に日焼けなどによる変色が見られるが、詳しくは「Condition Report (資料のコンディション)」で述べるため、ここでは省略する。

表紙には二重線で描かれた縦9.6cm、横6.5cmの長方形が印刷されているが、縦部分は左右とも同箇所が、布がのびたせいか印刷ミスのせいにより変形をしている。またこの二重線の上部中央には、星の形が描かれており、二重線の内側中央に「軍隊手牒」と明朝体で印刷されている。

裏表紙には、こちらから見て左から1.4cm、下から1.1cmの位置に、名前を記入するための縦5.7cm、横0.9cmの大きさである長方形の欄が設けられている。そしてそこには、当時の所有者の「海藤拓一」の名前が、手書きで記入されている。また、裏表紙の裏側には縦11.5cm、横5.6cmの大きさのポケットが着いており、おそらく召集令状などといった重要書類をここに入れていたと考えられる。そしてこのポケットの覆うように、縦5.6cm、横6.6cmと縦6.4cm、横6.6cmのカバーが上下に付いている。

中身に関しては、見返しを除いてロウ紙40枚（40頁）で構成されており、1枚ごと2つ折りにし、筒状にして1頁としているため、通常の書籍を数える時と違い、裏・表合わせて1頁としている。なお1頁から30頁までは、勅諭や戦陣訓などといった軍人としての

規範や心構えを説いたものを朱色と黒のインクにてふり仮名つきで印刷している。そして31頁以降は、氏名や履歴などといった個人情報を扱っており、項目名以外が手書きとなっている。詳しい内容に関しては下の通りである。

#### ①軍人勅諭

天皇が陸海軍の軍人に下賜した勅諭であり、正式には「陸海軍軍人に賜はりたる敕諭」という。本資料は昭和期のものであるため、明治天皇・大正天皇・昭和天皇のものがそれぞれ1~10頁、11~12頁、13~14頁に朱色のインクで印刷されている。

##### (1) 明治期のもの

明治15年(1882)1月4日、明治天皇が直接陸海軍人に下した勅諭のことを指す。78年の近衛兵の反乱である竹橋騒動を機に、陸軍卿山県有朋は「軍神訓戒」全陸軍将兵に印刷配布したが、その後も軍隊への自由民権思想の浸透に危機感をもち、軍人の政治関与を戒めるため、山県は西周に勅諭起草を命じ、この「軍神訓戒」をもとに山県・福地源一郎らの修正・潤色を経て成立した。

通常の勅語が漢文調であるのに対し、変体仮名交じりの文語体で、総字数2700字におよぶ長文であり、冒頭で「朕は汝ら軍人の大元帥なるぞ」と天皇が統帥権を保持することを示し、「下級の者が上官の命令を承ること、実は直ちに朕が命令を承ること心得よ」と言い渡したうえで、日本の軍隊は天皇の軍隊であることを明示している。それから軍人の守るべき徳目「忠節・礼義・武勇・信義・質素」を挙げ、これらを誠心をもって遵守実行するよう命じている。加えて、戦いに於いては「義は山嶽より重く死は鴻毛より軽しと心得よ」と、「死は或いは泰山より重く或いは鴻毛より軽し」という古諺を言換え、「普段は命を無駄にせず、けれども時には義のため、喻えば天皇のため國のために、命を捨てよ」と命令している。

なお、勅諭は軍隊内で神聖視され、太平洋戦争中は陸軍内はもちろん中等学校でも全文暗誦を強要され、天皇制思想形成に大きな影響を与えたといわれている。

##### (2) 大正期のもの

大正元年(1912)7月31日、大正天皇が直接陸海軍人に下した勅諭のことを指す。内容としては、大正天皇自身が万世一系の帝祚を継ぐに当たり、明治天皇同様に陸海軍に勅命を下すことを明示し、明治天皇が示した勅諭を守ることを命令している。

##### (3) 昭和期のもの

昭和元年(1926)12月28日、昭和天皇が直接陸海軍人に下した勅諭のことを指す。内容としては、大正期のものと同じく昭和天皇自身が万世一系の帝祚を継ぐことを宣言し、明治天皇が示した勅諭を守ることを命令している。

#### ②勅語

大正天皇により大正3年(1914)11月3日陸海軍へ下賜されたもので、本資料では15頁に朱色のインクで印刷されている。内容としては、日本国国防の完備は軍隊のあり方にかかっているので、陸海軍は互いに協力し、ますます軍人精神と能力を鍛錬させ、「國家の干城」としてその本分を尽くすことを、願っている。

#### ③軍隊手牒に係る心得

本資料では16~17頁において、黒色のインクで印刷されている。前述の「軍人勅諭」「勅語」と違い、制定された時期は記載がないため不明である。配布された軍隊手牒の取り扱い方を7つの項目から説明しており、軍隊手牒はどのような時も常に大切に持ち歩き、破損紛失がないようにすること、かつこの手牒に記載した個人情報に間違いや変更がある場合は速やかに申し出ることなどを命じている。

#### ④應召及出征時の心得

本資料では18~19頁において、黒色のインクで印刷されている。「軍隊手牒に係る心得」同様、制定された時期は記載がないため不明。内容としては、日頃の準備として、戸籍の整備と遺言の準備を行っておくことを説いた「平素の準備」と、戦地で亡くなりかつ遺骸が残らなかった場合を踏まえて、毛髪や写真を家族に残しておくことや、事前に墓参りや近隣への挨拶を済ませておくなど、応召された時の心得を説いた「應召時ぞ處置」、軍事の機密事項を外部に漏らすことを禁じた「防諜に對して」という3つの章から成り立っている。

### ⑤戦陣訓

1941年1月8日に東条英機陸軍大臣名で出された戦陣での訓示のことであり、本資料では20～30頁に黒色のインクで印刷されている。

軍人としてるべき行動規範を示した文書であり、日中戦争の長期化による軍紀・風紀の乱れを是正することを目的に、教育総監部で起草、島崎藤村・土井晩翠らも参加して作成された。序文と本訓、結びの合計約3000字から成り立っており、本訓は軍紀・攻撃精神・必勝の信念などを扱った「其の一」、敬神・孝道・戦友道・死生観などから成る「其の二」、戦陣の戒や戦陣の嗜みについて述べた「其の三」の三章仕立てとなっている。なお本訓「其の二」の第八「名を惜しむ」で述べられた「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪積の汚名を残すこと勿れ」の一節は、捕虜になることを禁じたもので、大戦中の多くの玉碎や将兵・市民の自決を生み出す一つの要因となったともいわれている。

当時軍隊内部の一部では、この「戦陣訓」の奉読が習慣になっていたといわれ、例えば野砲兵第22連隊では起床後の奉読が習慣になっていた。一般国民に対しては用紙統制が行われているなか、1941年だけでも少なくとも『戦陣訓述義』『戦陣訓話』など12種の解説書、『たましひをきたへる少国民の戦陣訓』『少年愛国戦陣訓物語』など5種の教材が出版許可を受けて出版されており、以後も敗戦まで種々のものが出了。詳しい構成は次の通りである。

#### 序

本訓（其の一）…第一「皇國」第二「皇軍」第三「皇紀」第四「団結」第五「協同」第六「攻撃精神」第七「必勝の精神」

本訓（其の二）…第一「敬神」第二「孝道」第三「敬礼挙措」第四「戦友道」第五「率先躬行」第六「責任」第七「生死觀」第八「名を惜しむ」第九「質実剛健」第十「清廉潔白」

本訓（其の三） 第一「戦陣の戒」第二「戦陣の嗜」  
結

この他一般的な軍隊手帳には、「軍人勅諭」の前に「所属連帶の証明印影」があり、また「勅語」の後に、大日本帝国の軍人・軍属が守るべき誠心・忠節・敬礼・温良・服従・勇武・勤労・分別・質素・重厚・名誉・廉恥などの徳を説いた上で、国家の法律・規則を遵守することと刑罰の忌むべきことを教える「軍人読法」と、その軍人読法を守ることを宣誓する「誓文」とが掲載されているはずだが、本資料にはそれらが見られない。軍隊手帳は発行された時代や所属部隊により変化しているため、それらが原因と考えられるが、今後さらに検証す必要があるだろう。

以下の頁（31～40頁）より個人情報の記載が始まるが、項目名は黒色のインクで印刷されており、それ以外の情報は全て黒いペンで手書き、もしくは黒と朱色のインクで印鑑で押されている。ただし以下で記載されている個人情報の詳細は、現所有者である海藤梓の証言と併用させ「Object Description Report-2（その資料に関する関連情報）」に述べるため、ここでは省略する。

31頁では、元の所有者であった海藤拓一の所属する所管や部隊号の他、彼の軍人としての兵種、階級、特業、戦時着装被服のサイズ（帽、衣袴、外套、靴）、また本籍、住所、氏名、生年月日、身長といった基本情報が掲載されている。なお、31頁裏には軍隊への服役期間の欄が存在するが、ここには手書きの記述がなされていない。

32頁では、軍人として召集される以前の履歴（出身履歴）の他、精勤章、褒賞、善行証書、適任証書を記載する欄が設けられているが、出身履歴の他は全て空欄である。

33～35頁の表側までは（軍役中の）履歴、つまりいかなる軍役行程を経たかを扱う欄であり、34頁表までその詳細が手書きで記入されている。

35 頁裏側には欠勤に関して、36 頁表には罰科に関する記す欄があるが、手書きによる記載はない。36 頁裏には満役或は除役についての欄、公傷及び公病についての欄、戦死或は病死についての欄が存在するが、手書きによる記載はない。37 頁以降に関しては給与通知事項という欄がある。給与をはじめその他の通知事項を書き込むものと思われるが、手書きの記入はない。

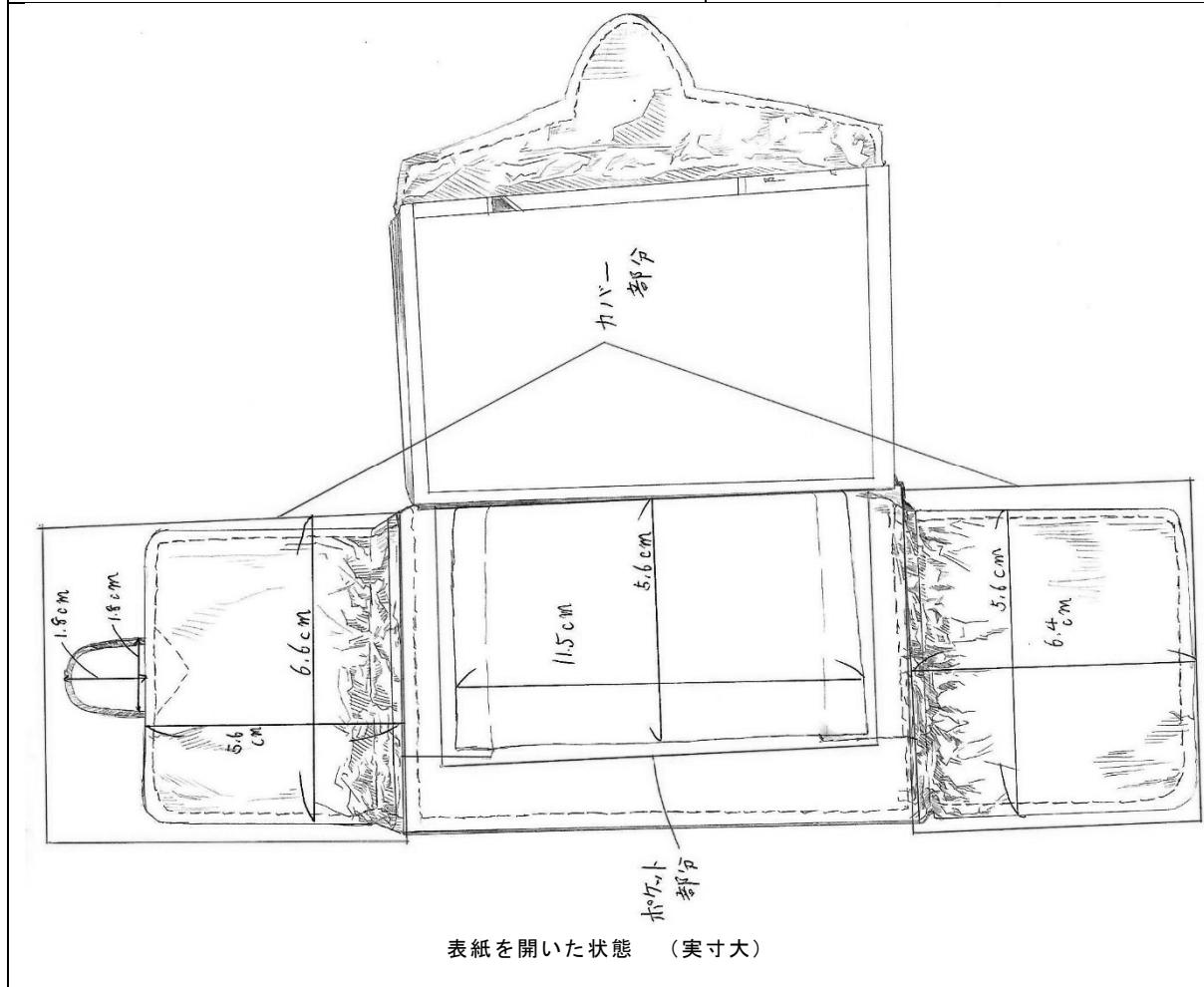
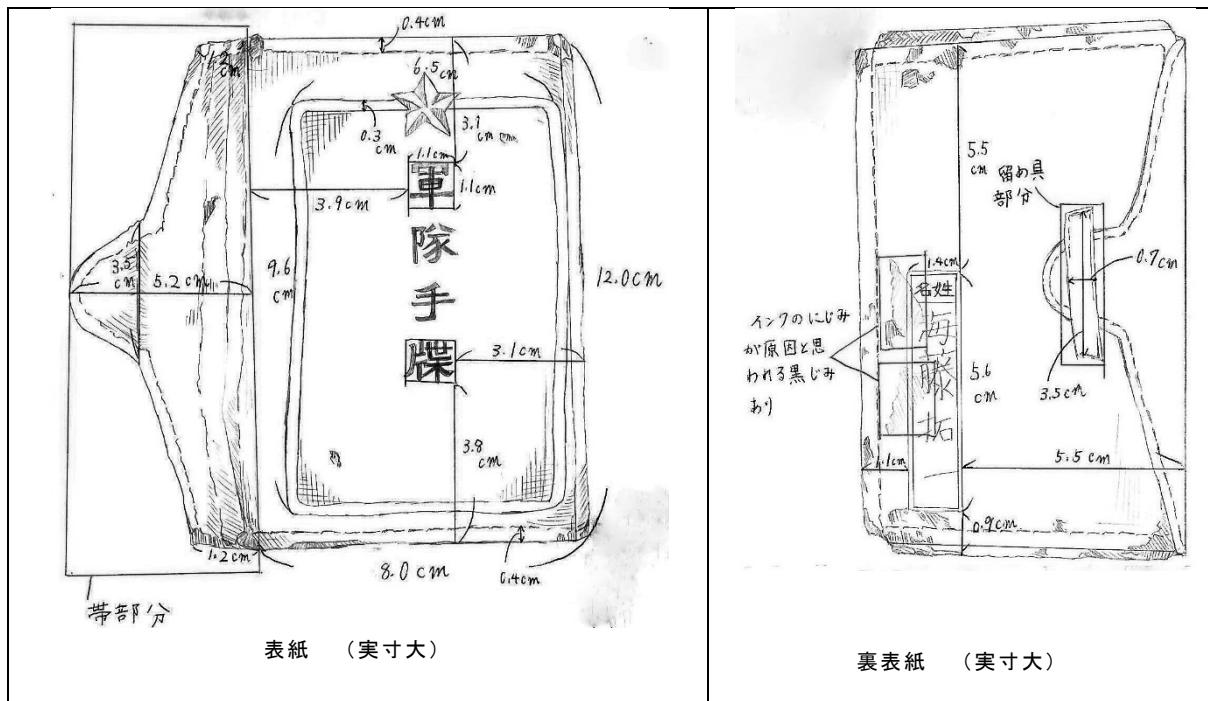
#### Object Description Report - 2 (その資料に関する関連情報)

本資料は、大正から昭和期にかけて東京市小石川区武島町から北海道札幌市外月寒村に移住していた海藤拓一が、徴兵された際に発行された軍隊手牒であり、この海藤拓一が終戦後に自宅のタンスで保存していたのを、彼の死後である平成 24 年（2012）6 月頃に実家の整理をしていた息子である海藤隆明が発見、その時に隆明の娘である海藤梓に譲り渡したため、現所有者は、この海藤梓である。以下、前所有者であった海藤拓一の経歴と軍隊手牒が海藤隆明に発見されるまでの過程を、軍隊手牒掲載の個人情報と息子である海藤隆明の証言より判明した範囲で記す。

元の所有者である海藤拓一は大正 9 年 7 月 29 日生れであり、昭和 12 年 3 月に東京市立京華商業学校を卒業した後は株式会社山丸商会に入社、株式取引員として従事していた。しかし昭和 16 年 1 月 10 日に軍部より徴兵され、満州第 379 部隊東部第 13 部隊に配属された後、同月 18 日満州へ向け出港、26 日に到着したという。昭和 17 年 2 月 14 日にクループ性肺炎を起し、哈爾濱陸軍病院へ入院後、大連全州陸軍病院などに転院するも 8 月 6 日には大連陸軍に復帰している。その後昭和 19 年 9 月 16 日までの行動については、軍隊手牒の該当箇所の文字が滲んでしまっていることから読解不可能であり、また証言もそれなかったことより不明であるが、同年 9 月 17 日には東部第 12382 部隊に編入して、11 月 8 日には武昌港に向けて出発し 12 月 5 日に到着、以後翌年 2 月 22 日まで武昌の警備と湘桂作戦の後方勤務を務めている。それから同年 3 月 5 日から 4 月 17 日までは、上海にて築城作業に従事しているが、4 月 18 日には上海を発し同月 28 日に満州へ到着、以後終戦直前である 8 月 14 日まで満州で作戦準備をしており、終戦が決定した後は 11 月 26 日に満州を出発し 27 日に日本到着、同月 28 日をもって兵役を終えている。なお、軍隊手牒は「Object Description Report - 1」で挙げた「軍隊手牒に係る心得」に述べたように、常に携帯することが義務づけられていたため、この間常に持ち歩かれていたものと考えられる。またこの前後に所在地を、東京市小石川区武島町から北海道札幌市外月寒村へ移したそうであるが、その時期に関しては不明である。

退役後は豊平製鋼に一時勤務するが、その後上光証券に転職し永年勤務を果たし、昭和 59 年 5 月に永眠する。昭和 50 年頃には息子である海藤隆明と共に、軍人恩給の取得申請を行おうと本資料を持参して札幌市役所へ行っているため、タンスに保存されたのはそれ以後であると思われる。その後上記の通り、平成 24 年（2012）6 月頃実家の建直しのために、荷物の整理を行っていたところ本資料をタンスの中より発見し、娘である海藤梓が近代史を研究していることを理由に彼女に譲りわたした。

### Illustration (資料の図解)



## Condition Report (資料のコンディション)

全体としては「Object Description Report-1」で述べた通りに劣化状態は激しく、あまり保存状態がよかつたとはいえない。これはこの資料が、戦時下において戦地でも肌身離さず持ち歩かねばならなかつたものであることから、他のモノとのスレによる劣化や手の脂や戦場の汚れを受けやすい状況であったからであろう。加えてその後も何の配慮もなくそのままの状態で数十年間タンスの中に入れられていたことから、タンスから発せられるオフガスや密閉空間故の蒸れによる湿度の上昇、その他タンス内の埃や虫などの影響を受けたためと考えられる。

具体的な状態としては、まず表紙部分は四隅全てがスレによる痛みにより、布部分には穴があき下地である厚紙が露呈してしまっている。特に上下の縁部分は痛みが激しく、上は向かって右側因りに2つ穴が見られ、下は向かって左側に、横長1cmほど傷がつき、下地が露呈している。また中央部分には2つほど直径0.1cm以下の穴があいている。表紙裏側においては、表以上に劣化が激しく布地は全体的にヨレており黒ずみが見られる。下方中央部分には、水分が付着したためできたと思われる直径1.5cmの円状のしみが存在する。また表紙とつながっている帶部分に関してはつなぎ目の部分が何度も折り曲げたためかヘタリが見え、かつ表側に関してはあちこちに0.2cm以下の細かい穴が見られ、裏側に関しては3分の2以上の布部分が破けてしまっている。

中身であるページ部分についてはまず全体的に紙が元の色よりも茶色く変色してしまっているが、これはおそらく長期間において光への対策をしなかったことが原因であると思われる。そしてほとんどのページにおいて向かって右下部分が折れてしまっており、特に1~5頁までは折れによる破損が激しく、紙の纖維が弱ってしまっている。この他個人情報を記載する18頁以降においては、手書きの部分と印鑑の部分におけるインクが滲んでしまっており、特に20頁は滲みが激しく一部文字が読み取れなくなっているが、これは湿気や水分が原因と考えられよう。

裏表紙に関しては、表側が表紙以上に破損が激しく向かって左上と右下箇所にいたってはほとんど布が剥げてしまっている。また向かって左下には滲みのような黒いシミが見られるが、これは名姓欄に名前を記入する際に使ったインクが、水分や湿気により滲んでしまったためと推察できる。裏側に関しては表側ほどの損傷はなく、ポケットも多少の色あせ、日焼けが見られる他は目立って大きな傷などはみられない。上下についたカバーについても、表面に比べると布の痛みを少ない。ただし帶部分と同様、裏表紙とのつなぎ目の部分に関しては、何度も折り曲げて使用したことからヘタリが見え、かつ布の破けが著しく、保存の際はこれ以上の破損を防ぐためにも、より注意が必要である。

## Required Environment (保存の際に気を付ける点)

本資料のほとんどを構成する紙、布、糸は湿度が低すぎると、柔軟性や耐久性を損失し纖維が破損する可能性をもっている。しかし反対に湿度が高すぎると、纖維が折れる、弱化し破損しやすくなる、といった悪影響がある他、カビの繁殖を活性化させるといった危険性がある。よって保存は極端に乾燥した場所や湿気の多い場所は避け、かつ的確な湿度に保った空間を用意する必要がある。このことについて I C O M(国際博物館会議)や I I C(国際文化財保存学会)が定めた資料保存のための温湿度基準によると、温度に関しては20度、湿度に関しては紙や布に関してはR H55~60 パーセントとあるため、このあたりの温湿度を守った空間を設定する必要があるだろう。

具体的な方法としては、温度と湿度両方の設定を可能とする博物館専用の空調機を用いる、除湿器と加湿器を併用するなどという方法が挙げられる。ただし加湿器に関しては、噴霧式の加湿器では噴射された水が、水分に弱い本資料にあたって濡らす可能性があるため、蒸発式の加湿器を用いるようにする。また収蔵庫には湿温計を設置し、隨時チェックするにしなければならない。

ちなみに室内のR Hを 70 パーセント以下に抑えることは、虫及びカビの繁殖を防ぎ、これらに資料が侵食されたりするのも防ぐことにもつながる。この他虫に対する対策としては、室内への虫の侵入を防ぐために、出入口やシャッターは必要時以外開けないようにする他、ドアや窓には網戸をつけるようにすることが絶対である。

加えて本資料の構成素材において比重を大きく占める布や紙は光の被害を受けやすく、弱化や色あせなどの変色といった変化を引き起こしやすい。特に光がもつ紫外線は紙資料への影響が大きいため、紫外線に対しては十分に注意しなければならず、かつ直射日光は最も資料にダメージを与える光であることから、絶対資料には当たらないように遮断しなければならない。またこのような光や空中に舞うほこりが資料に当たることをできる限り避け、かつ資料が風化などにより自然に破損した場合に、後の修繕を加味して破損した部分の欠片を紛失することを避けるため、資料自体を薄葉紙等で包んで、かつ清潔な場所に、埃が入らないような箱に入れて保管することも有効な手段である。

この他、収蔵庫などで保存する場合の収納ケース自体に関しても、長期間保存による蒸れを防ぐために、密閉性の高いビニールなどは避け、一般的に吸放湿性の良い木材で作ったものとするのが望ましいだろう。しかし木材のオフガスは資料に悪影響を与えるため、それを防ぐためにも十分乾燥しているものを選び、かつ箱内にはガス吸着シートを貼り付けたり、吸着剤を置くなどしてガスが放散することを抑える必要がある。その上で布部分の埃の蓄積防ぎ、かつ状態に異変がないか確認するために適度にチェックする必要がある。

また本資料は劣化が激しいことから多少のスレでも、布や紙の破れや弱化を招く可能性が高いため、他のモノとのぶつかり合いや箱自体に対する擦れを防止することを加味し、箱にはこの資料のみを入れ、かつエア・クッションなどの緩衝材で固定するのが良い。

尚、本資料は当時の日本軍の主旨や戦場における動きを知ることができる文献資料としての価値も強いことから、内容をデジタル化し情報を別箇保存しておくことも必要である。

## Handling Instructions (取扱いの際の注意点)

紙や布は、汚れがシミとして付きやすいことから、必ず資料を扱う際には事前に手をよく洗い、清潔にしておく必要がある。加えて靴底などについたほこりや汚れを少しでも館内に持ち込まないようにすることが好ましいため、収蔵庫に入る際は、入館者に付着して持ち込まれたほこりなどが資料につかないように、入る前に靴を取り替えたり、粘着マットやシートで靴や身体についていたほこりを取るようにならなければならない。

資料を研究などで直接扱う際には、ホコリやゴミ、人の手の脂や水分、汚れといった要素は、虫やカビの発生の他資料の弱化をまねくため、必ず手袋を装着して扱うようにしなければならない。加えて資料がすでに劣化が激しく、これ以上の破損を避けるためには、資料への刺激ができるだけ少なくするためより注意を払った慎重な対応が必要である。よって爪は必ず切っておき、アクセサリー等も外してから取り扱う事が必要である。その上で資料を無理に引っ張ったり、資料の端を持って持ち上げるなどといった一部分だけに付加をかけるような扱いをしてはならない。

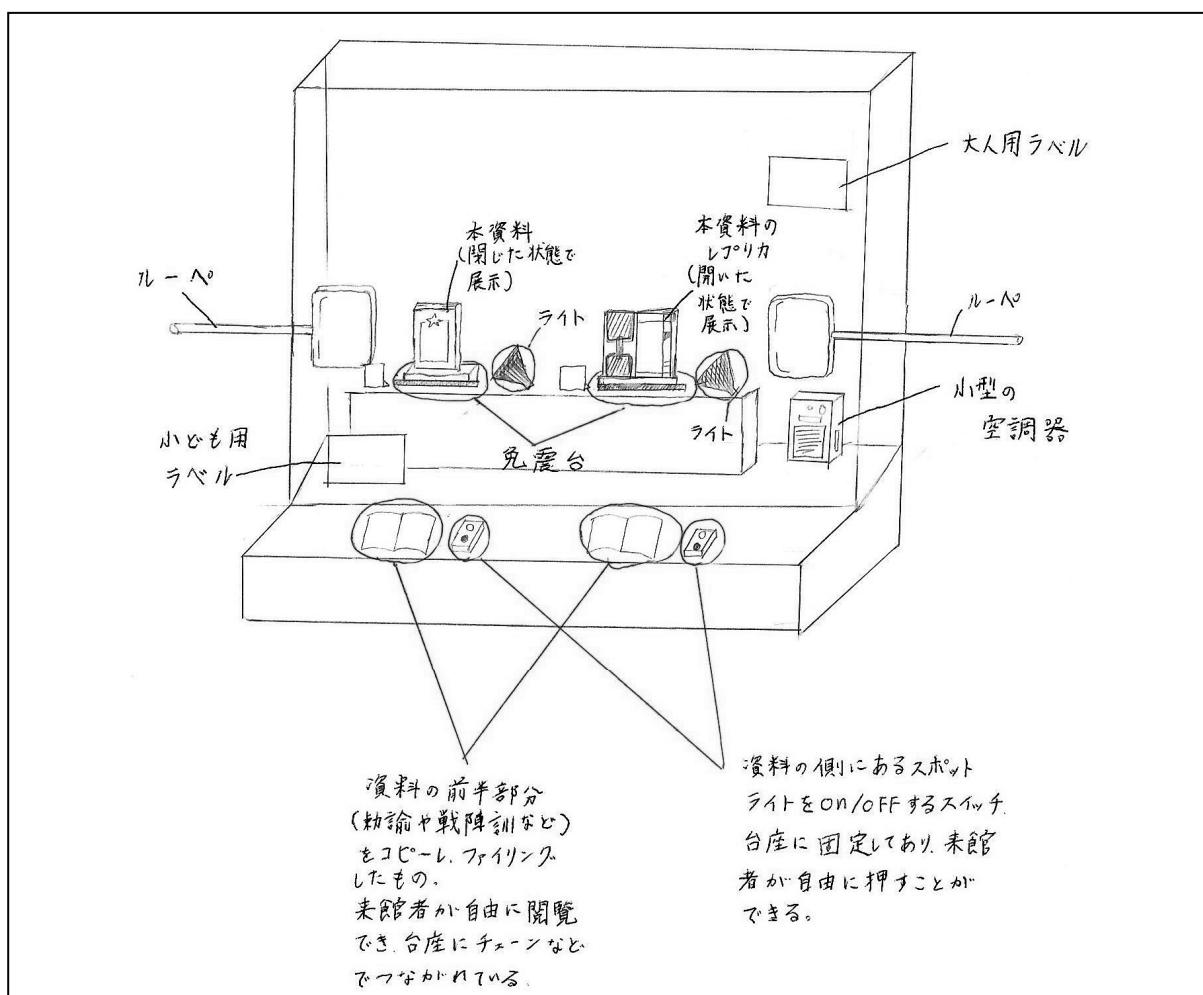
また作業状況に関しても、「Required Environment」で述べたように、破損した場合、破損した部分の欠片を紛失することを避けるためにできるだけ薄葉紙の上で作業するようにし、かつその下には黒い布を敷くことで破損した欠片が風などで多少飛ばされても、すぐに発見できるようになる。加えて本資料は光に極端に弱いため強い光のもとでは資料を用いた作業を行わないようにし、使用する光源もミュージアム用に製造された紫外線防止ランプや紫外線防止フィルムを使用した蛍光灯（白熱灯は高熱を発するため）で布が耐えられる照度である 100lx 以下をめざす。その上で紙や布といった素材は、水分や火に極端に弱く、最悪消失してしまう可能性があることから、水気や火気があるものの側では、絶対に作業しないよう心掛ける。

## Exhibit Mount Design (展示としての設置の仕方と、その図)

- ・本資料の表紙からだけではなく、どの方向からも鑑賞してもらうために、壁に面していないガラスケースにて展示する。ただし、防犯性を考慮し、かつ万が一ガラスが割れたとしてもその破片が資料を傷つけることがないように防犯ガラスを使用する。
- ・本資料の閉じた状態だけでなく、開いた状態特に裏表紙の裏側にあるポケットとカバーをも鑑賞してもらうために本資料と酷似したレプリカを用意し、かつ本資料はできるだけ負荷を与えないようにする目的から、このレプリカの方を開いた状態で展示する。
- ・資料の細部まで鑑賞できるように大型のルーペを展示ケース内に用意し、その先に棒をつけて展示ケースと外を貫くように設置し、ルーペそのものを左右に動かせるようにする。同時に照明としてはスポットライトを設置することで、質感などといった細かい点まで見られるようになるが、この際本資料の主な素材となる紙と布が紫外線に弱いことから、紫外線が強い蛍光灯を避け、蛍光灯より紫外線の弱い白熱灯を利用するようにする。ただし資料への影響を加味すると照射時間をできるだけ減らす必要があるため、来

館者が資料を鑑賞する場合に手許にあるスイッチを押せば、目的の資料の斜め上に設置されたスポットライトが光るというように点滅制御を設けるようとする。

- ・小さな展示ケースに資料を配置した場合、資料自体から発せられるオフガスや空気のよどみによる湿度の上昇などから資料を劣化させる可能性が高まるため、小型の空調機・空気清浄器などを設置するのが良いが、それが不可能な場合はケースの間にわずかに隙間をあけるなどの工夫により、空気が常に入れ替えられるようとする。
- ・本資料は劣化状態が激しく壊れやすいことから、「Handling Instruction」で述べたように、一部分にのみ負荷をかける釣り下げや壁掛けなどといった展示方法は行わず、アクリルで作った台座に固定して置くようにする。またその際、地震などの揺れによる落下を防ぐために、免震台の上に設置するようとする。
- ・大人と子どもでは、博物館における展示物の見方が全く異なるうえに、目線の位置も全然違うことからラベルは二つ用意することとするが、詳細は「Label」に記述するため、ここでは省略する。
- ・この他、本資料は文献資料としての価値もあり、特に勅諭や戦陣訓などといった軍人としての規範や心構えを説いた部分は、当時の日本軍や日本という国のある方などを知る上でも重要であることから、前半部分はコピーをしてファイリングし、来館者が自由に見られるようにする。



## Label (展示に添えられるラベル)

「Exhibit Mount Design」で述べたように、大人と子どもでは背丈・目線が違う他、博物館の楽しみ方、資料の閲覧の仕方が全く異なるため、大人用・子ども用の2種類のラベルを用意し、それぞれの目線に合わせた位置に配置する。

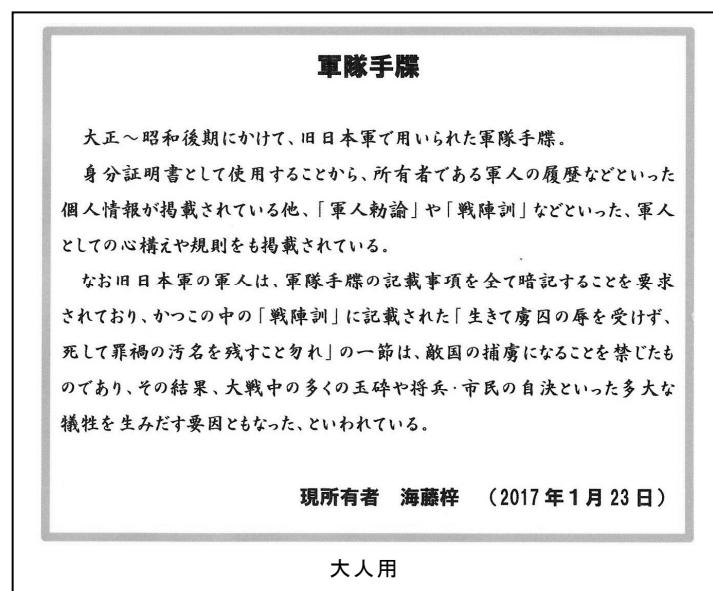
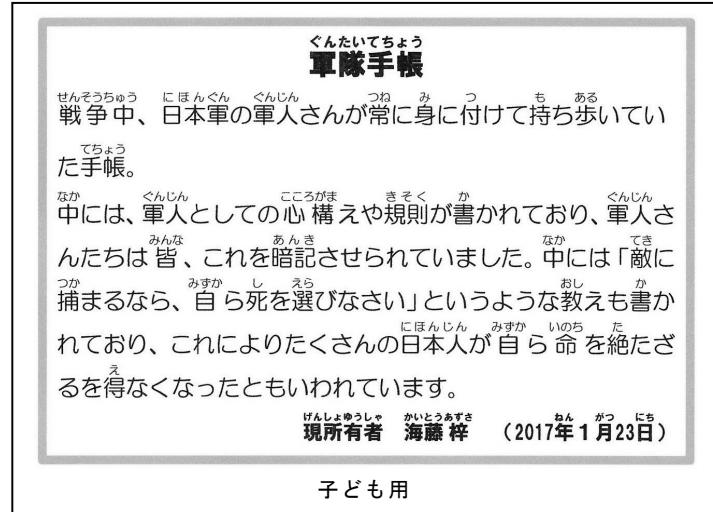
まず子どもに関しては、モノそのものやインパクトの強いものに关心を示し、あまり資料の詳細な情報や背景・逸話などには深い興味を示さない。よって解説文は短めにし、内容に関しても、詳細にその中身を解説するというよりは、これがいかなるものでどのような影響を与えたかということのみ焦点を絞ることで、戦時下における日本軍の教えがいかに非情なもので、そのせいでどれだけ多大な犠牲が出たか、というインパクトに訴えかけるものにしている。

また子供向けということで漢字にはルビをふり、書体は親しみやすくも、戦争に関わるものということであまりポップすぎない「HG 丸ゴシック M-PRO」とした。その上で字の大きさも、読みやすいように大人より少し大きめの「16 ポイント」としている。

次に大人に関しては、「学びに来る、勉強に来る」という姿勢が強く、資料そのものの情報やその歴史的背景、資料のもつ意義などに深く関心を示している場合が多い。よって子どものラベル以上に詳細な情報を掲載し、その内容から歴史的意義まで簡潔に掲載するようにしている。

また書体は、実際に資料である軍隊手牒に使用されたものに近い「有澤太楷書 P」を使用することで関連性を示し、かつ字の大きさも子ども用より掲載する分量が多い事から、少し小さめの「14 ポイント」を使用する。

子ども用と大人用の共通点としては、枠の色を、明るすぎずかつ歴史や懐かしさを表現するセピア色に近い茶色を使用していること、資料名と所蔵などに関しては本文との違いを示すとともに強調する目的で書体を「HG 創英角ゴシック UB」とし、かつ資料名に関しては本文より字を大きくしていること、である。



## 博物館資料ドキュメント 『懐中時計』

人文学部日本文化学科1年 国分 美佑

### オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

名称：懐中時計

製造年月日：不明 購入年月日：2016年5月5日

製造国：不明 購入場所：『Three Four Time』 札幌ステラプレイス B1F

材質：金属、アクリルガラス、アクリル製樹脂

色：くすんだ金（本体、鎖、針）、クリーム色（文字盤）、焦げ茶（数字）、灰（ロゴ）、赤／青／黒（装飾部）、白（ライнстーン）

大きさ：73.5 cm（鎖）、直径 4.6 cm（本体）、直径 1.5 cm（覗き穴）、直径 3.6 cm（文字盤）、2.1 cm（フック部を含めた竜頭）、1.4 cm／1.6 cm／1.9 cm（時、分、秒針）

これは懐やポケットに入れて携帯する小型の円形時計である。丈夫でかさばらないことから腕時計が主流となる第一次世界大戦後まで世界中で広く用いられていた。紐や鎖で竜頭のフック部分と衣服を繋いで落下を防止し、時計本体を衣服のポケットなどに収納して携帯する。竜頭またはクラウンと呼ばれる時計の側面につけられた突起を引くことで時刻合わせをすることが出来る。

時計本体、鎖の色はともにアンティーク調のくすんだ金色。針も同色。文字盤全体は淡いクリーム色をしている。文字色は黒に近い焦げ茶色で少々立体的になっている。素材は金属であるが何の金属かは不明。その金属の上から金メッキをかけている。ふたの裏側にはメッキが施されておらず、地の金属色である黒をしている。蓋の装飾であるライнстーンはおそらくアクリル製樹脂と思われる。文字盤を覆うガラスはアクリルガラスだと考えられる。

鎖は引き輪タイプのもの。文字盤はアナログ式で、竜頭から「12」「1」「2」……「11」と連番の数字が円を描くように等間隔で連ねられている。「12」の下の空間には『fragola』という文字がベージュがかった灰色で記されている。針は時針、分針、秒針の三本。時針が一番短く、秒針が一番長い。ボタン電池により動作するクォーツ式をとっている。文字盤を覆うガラスを保護するための上蓋がついており、その蓋の中央が円く抜けているハーフハンターのデザインをしている。開閉ボタンは竜頭が兼ねており、「12」の真逆に位置する「6」の方向に開く。モチーフが不思議の国のアリスのため、蓋には赤のハートのトランプやウサギ、黒のクローバー、青いスペード、赤いダイヤのマークが施されている。文字盤に対応するように「3」と「7」の数字があり、白いライнстーンが六つ飾られている。また文字盤の目盛は数字の間をそれぞれ五等分、すべてで六十等分しており、五つごとにトランプのマークが順番に現れる。「12」がハートから始まり、スペード、ダイヤ、

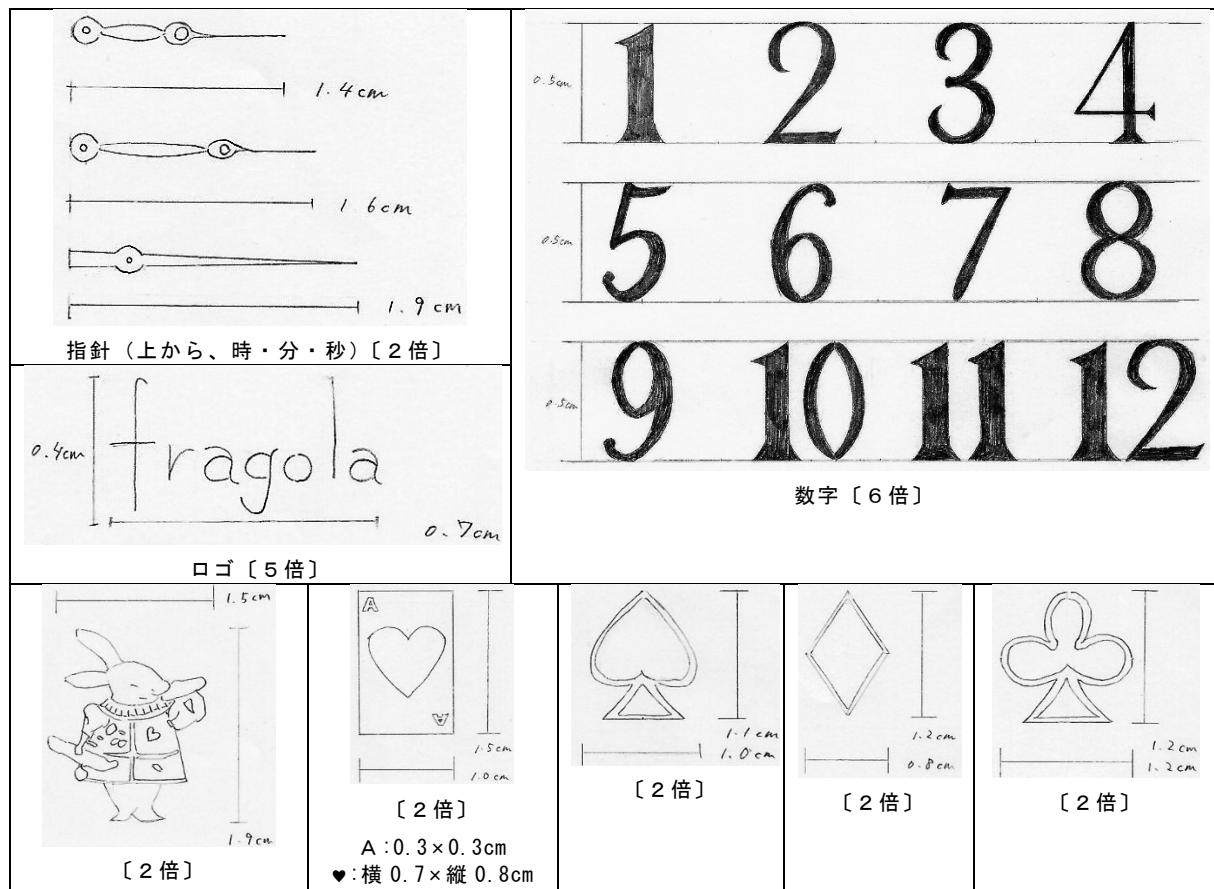
クローバーと続く。各マークの色は蓋にあるものと対応する。時計の裏側部分は装飾がなく、フラットな表面をしている。

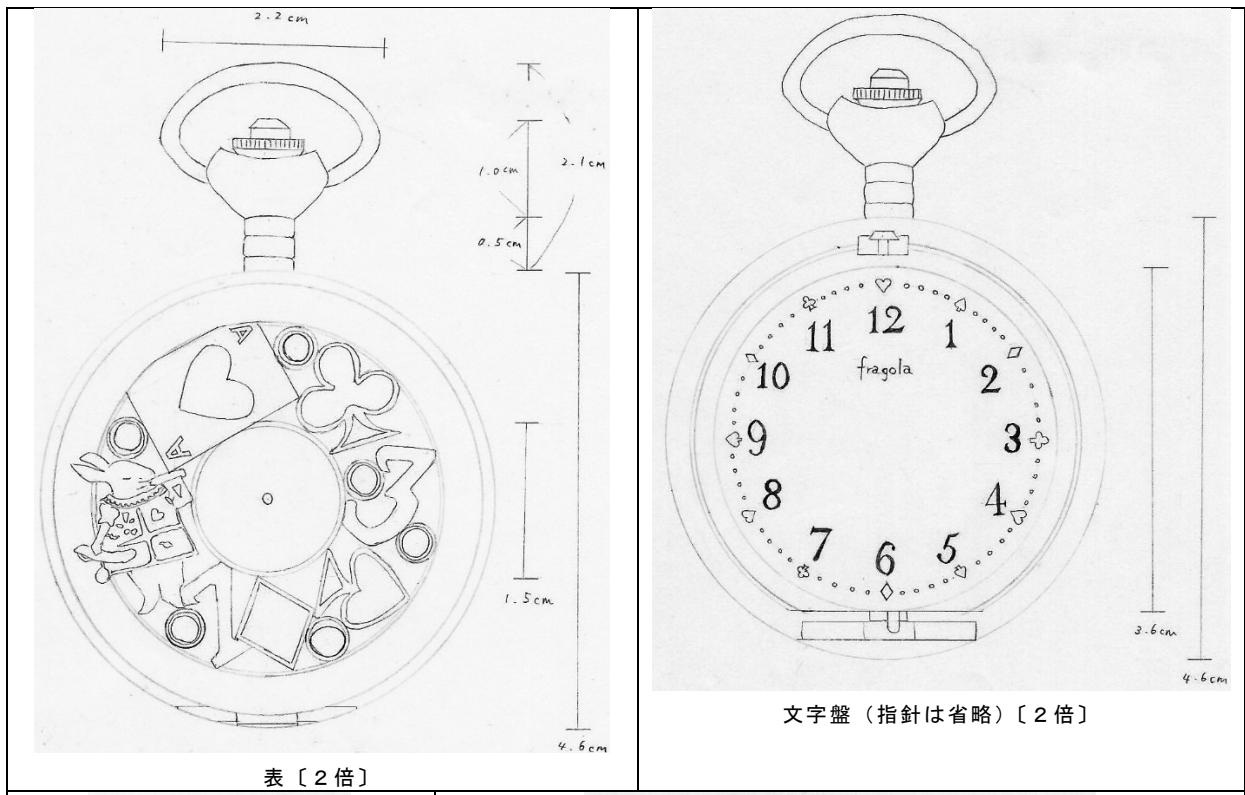
製造年月日、製造国とともに不明。メーカーはおそらく文字盤にあるロゴの『fragola』だと思われる。

## オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

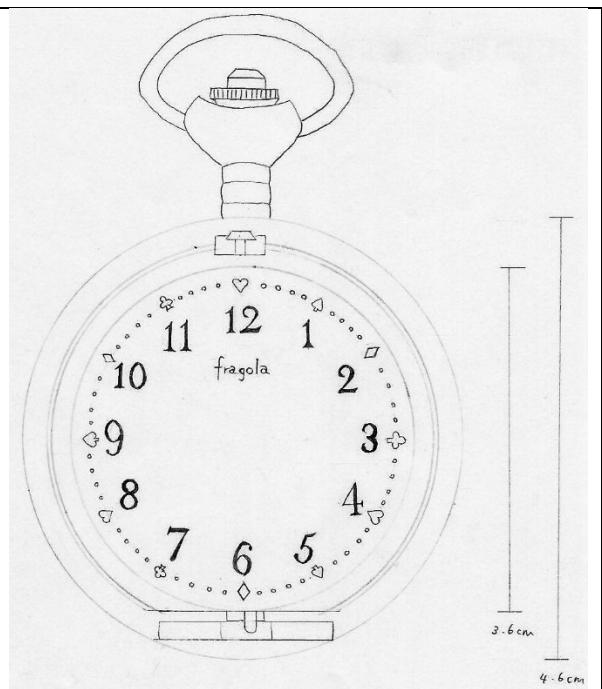
所有者がこれを入手したのは2016年5月5日である。ゴールデンウィークのため、家族と札幌ステラプレイスを訪れていたときに雑貨屋「Three Four Time」で見つける。所有者は腕時計を好んでおらず、しかし考查や実習などで時間を確認する必要がある際にスマートフォンを用いることが出来ないのでその代わりとなるものを探していた。それ以前から懐中時計なるものが気になっており、所有者の両親が入学祝いという名目で贈ったものである。ベルトホールに鎖を通して持ち歩いているが、冬場はかばんの持ち手に繋いでいる。そのことから雨や雪にさらされてメッキが剥がれているところがいくつかある。また2016年7月某日に蓋の装飾であるライнстーンが一つ取れたことがあり、家庭用接着剤で補修している。しかし乾燥中に位置がずれたらしく他のライнстーンよりも大きく枠の中心から外れている。

### イラストレーション (Illustration)

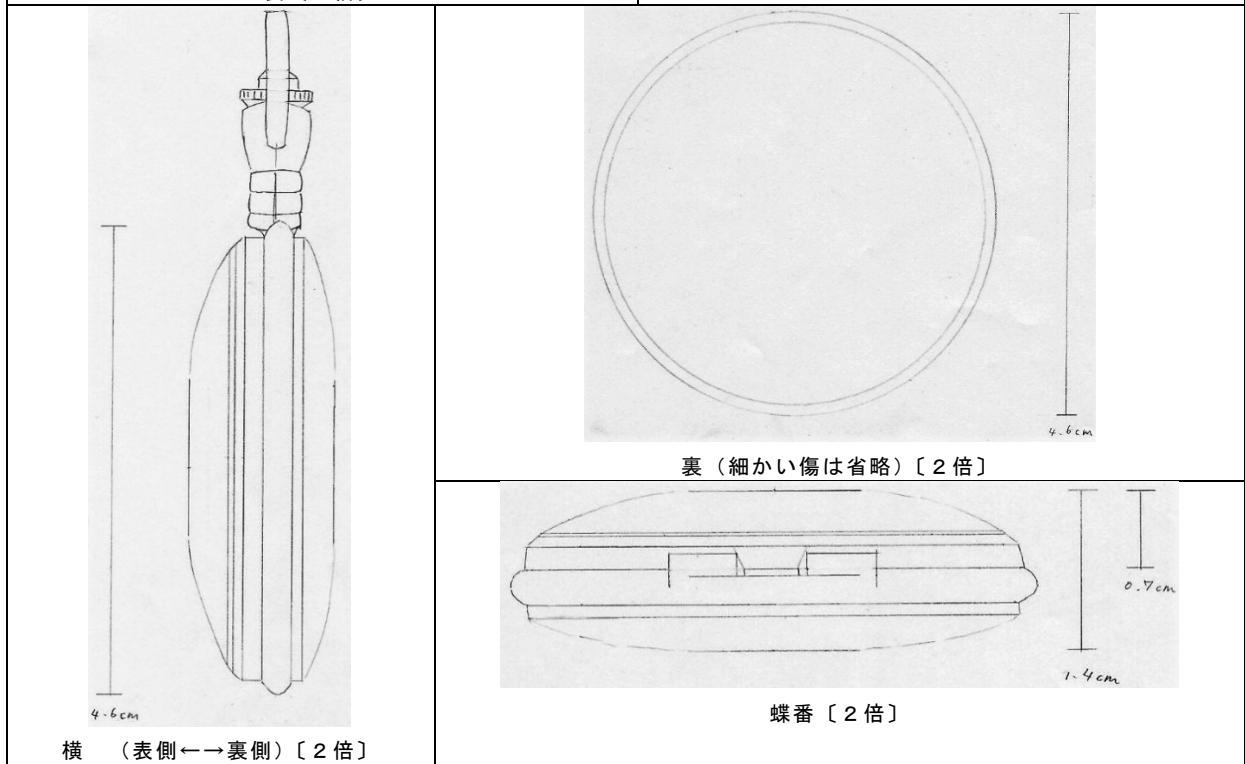




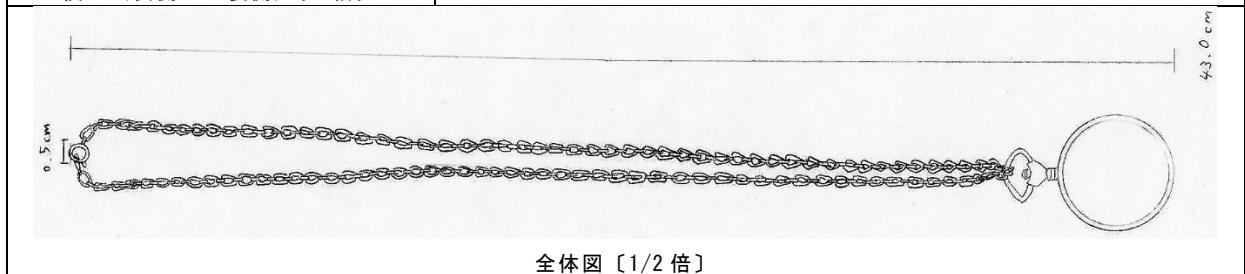
表〔2倍〕



文字盤（指針は省略）〔2倍〕



横（表側↔裏側）〔2倍〕



全体図〔1/2倍〕

## コンディション・レポート (Condition Report)

メッキの剥がれが見られるところは鎖、鎖の金具部分、フック部分、竜頭の開閉ボタン、時計の側面、蓋を閉じたときに蓋の輪郭部に接触する箇所、蝶番である。金具部は衣服またはかばんに繋ぐとき、外すときの際だと思われ、鎖とフック部分は持ち歩くときの振動で擦れ合っているためかと考えられる。開閉ボタンと側面は素手で触れることでの水分や油脂の影響がある。時刻を確認する際に蓋を開くことが必須だから蝶番はその摩擦が原因だろう。時計全体には細かな傷が多くみられる。傷が目立つのは装飾のない裏側。上蓋の「3」は何かで強くひっかけたように輪郭が削れていたり、めくれていたりする。同様に蓋のハートの A のトランプには針のように細く尖ったもので刺したような点状の傷が目視できるだけでも五つほどある。文字盤を覆うガラスにも細かな傷が見られ、いくらか指紋が残っている。鎖と金具を繋ぐ輪はしっかりと閉じられていない。蓋の装飾や蝶番、蓋を閉じておくための突起の空白部分は細い隙間に埃が溜まっているように見える。

## リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

金メッキが擦れて剥がれてしまうから鎖はフック部分から外して別々にする。表面に付着した汚れや埃は乾いた柔らかい布で、溝は綿棒などの細いものでできるかぎり綺麗に拭い取っておく。メッキとはいえ金属製品であるため、保存する部屋の温度は一般的な 18~20°C、相対湿度は錆びないように R.H. 40~50% に保つ。染色されている装飾部分は光による退色が考えられるので暗いところで保管する。繊細な機械だから緩衝材などに包んでから小箱に入れるとよいと考えられる。鎖は一本に伸ばした状態で柔らかい布に包み、何回かに折りたたむと場所を取らないだろう。小箱の底に入れると鎖と本体がばらばらになることもないと思われる。乾燥剤は水分を含むと発熱し、まれに発火することもあるためできるだけ入れない。もし入れるのなら保存場所の湿気・水気に十分注意し、定期的に確認を行うこと。磁気の影響を受けやすいため、磁気をまとったものからは離す。

## ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

### ◇取り扱い

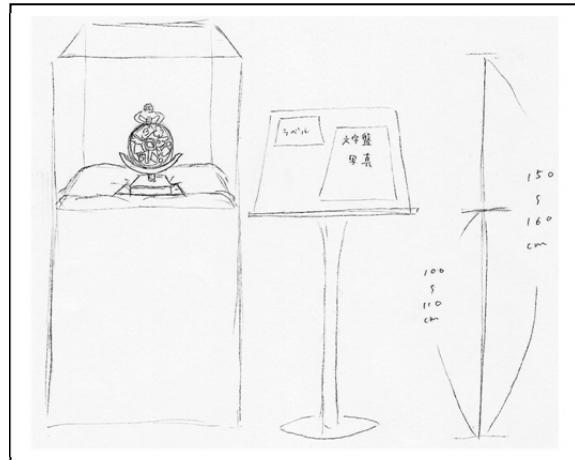
主となる材質は金属だから、水分・油分との接触は極力避けるために必ず手袋を着用する。傷がつきやすいからほかの金属製品や硬いものと一緒に運ばない。携帯電話や磁気カード等で磁気を帯びてしまうこともあるから取り扱うときには外す。パソコンやスピーカーなどの磁石が内蔵されたものの傍は避ける。衝撃に弱いため、落とさないよう両手で持つ。蓋はパチッと音を立てて閉めない。突起部が摩耗したり変形してしまうことがあるから竜頭を押しながらゆっくり閉じる。鎖で繋いでいる状態では、鎖だけで持たないようにする。しっかり本体も支える。

## ◇手入れ

金属部分が曇ってきたら、何もつけていない柔らかい布で軽く乾拭きする。専用の液体やクリームであってもできるだけ使わない。余った分が隙間に入り込むと誤作動が考えられる。水での洗浄は鋸びるため避ける。水を使う際は完全に水気が無くなるまで乾かす。蓋の装飾のラインストーンは接着剤でついているだけだから表面を拭くときは強く擦らない。ボタン電池が切れたたら動かなくなってしまうが、パーツの繊細な機械式ではないので時計屋に依頼する必要はないと思われる。クオーツ式は職員でも電池交換可能。作業の際は細かなちりやごみが内部に入らないよう注意する。オーバーホールは五年に一回ほどの頻度で専門業者に依頼する。

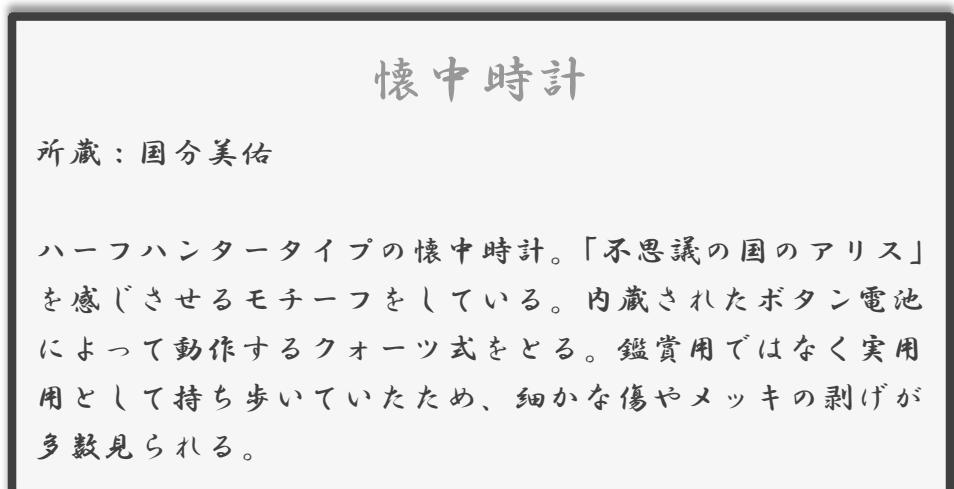
## エクジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

懐中時計用スタンドを用いる。壊れやすい小物なので小型のガラスケースの中で展示する。ハンズ・オンではない。蓋は閉じたまま、鎖は外した状態。文字盤のディティールも見てももらいたいから、蓋を開いた状態の写真を傍に添える。強い光は紫外線による退色や劣化（蓋の装飾部）が懸念されるので展示室の照明にはミュージアム用の紫外線防止ランプを使用する。もしくは通常の照明に紫外線防止フィルムを使う。高温の環境も避けたいので照明の真下にはケースを設置しない。薄暗いと感じる少し手前の光量に設定する。



## レーベル (Label)

懐中時計の展示のため、小さな子供がたくさん訪れるることは少ないと考えて、対象は若くても中学生程度と想定。アンティーク風（=落ち着いた感じ）だから色調は控えめにした。振り仮名を用いない代わりに難しい漢字は使わない。



# 博物館資料ドキュメント 『トランペット』

経営学部経営学科3年 三國谷 祐太

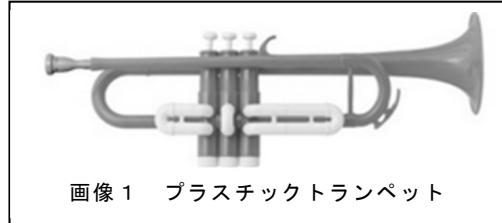
## オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

本報告書は、博物館資料である「トランペット」についてのレポートである。

本資料は名称「トランペット」。型名は「XO SD-S」。管楽器の一つであり、金管楽器に分類される。

用途は演奏である。マウスピースと呼ばれる受け口を用いて、唇を振動させることで発音することができる。管は、全体として円錐型。しかし、全長の4分の1~3分の1ほどは円筒形であり、長円状に巻かれている。その中ほどの位置にピストンを備え、そのバルブによって管長を変えて音高を変化させて演奏する。また、様々な調性のトランペットが存在するが、本資料はそのうちのB♭管の物である。

材質に関して、本資料はイエローブラスの真鍮により作られ、マウスピープを取り付ける部分は銅を主としニッケル・亜鉛を含む銀白色の合金である、洋銀を用いている。表面は銀メッキで加工しており、これには早期腐食を防いだり音色を変化させたりといった理由がある。マウスピースは、主に真鍮（ブラス）を使われることが一般的であるが、ステンレス、チタンなどの他の金属を素材として製作されたり、金属アレルギー金属アレルギー対策の理由で硬質の木材やプラスチックなど、現在では様々な材質によるものが開発されている。また、トランペットについても同様に、真鍮で製作されることがほとんどである。しかしながら、流通量は非常に少ないが硬質の木材、またカーボンを材質とするものも生産されている。その他には楽器の一部分を銀（スターリングシルバーと呼ばれる銀合金）で製作するものはよく出回っている。また最近では、楽器全体をプラスチック（画像1）とするものが安価という面でも注目され、市場に出回っている。



画像1 プラスチックトランペット

真鍮は、銅と亜鉛の合金であり、軟らかく、加工しやすいことを特徴とする。この銅と亜鉛の比率の違いにより、次の3つの種類が存在する。

1つはイエローブラス（七三黄銅）。これは銅：亜鉛=70:30の割合で、トランペットでは最も多く用いられている種類の真鍮。明るく、張りのある音色とされている。

2つはゴールドブラス。これは銅：亜鉛=85:15の割合。幅のある豊かな音色とされる。

3つはレッドブラス。これは銅：亜鉛=90:10の割合。軟らかく落ち着きのある音色とされており、銅と亜鉛の配分により、その音色は大きく変わる。また、各部位によってこの真鍮の種類をえることで、音色をより豊かにできるトランペットも存在する。しかしながら、成型の観点から、イエローブラスがこの3つのなかで最も成型しやすいものとさ

れ、また反対にレッドプラスは最も成型しにくいものとされているため、安価なものにも高価なものにもイエロープラスは用いられているのに対し、レッドプラスは総じて高価格で取引されている。

また、ここで述べられた音色の違いは、個人によって音色に対する感じ方が違うため、前述のように一概には言えないところに注意したい。そして、本資料の真鑑はこの中でもイエロープラスで作られている。

本資料は、株式会社グローバルにより設計、そしてXOというブランドで製作されている。製作地は台湾である。

本資料の特徴は、楽器を持つときに指をかける部分がすべて0字のリングとなっている（画像2）。普通、トランペットはこの指掛け部分がU字のフックのような形状となっているのが一般的である（画像3）。これら2つの違いは楽器で個体差があるが、楽器そのものが音を鳴らすことに関係してくると言われている。それは、フックよりリングの方が多少重量もあり、楽器の振動が逃げにくいために音がまとまるというように言われている。

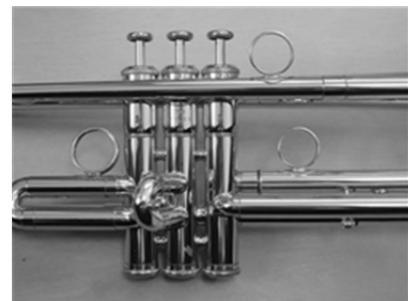
またもう一つの特徴としては、最もベルに近い部分にあるピストンパイプのボトム部のキャップが長くなっていること。これは「ピストルグリップ」（画像4）と呼ばれる物で、市販ではXO製のトランペットにしか互換性がなく、他のメーカーのトランペットには使用することができない。これは持ちやすさと低音の音の響きに影響してくると言われている。

#### オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

本資料は、現所有者の三國谷 祐太が前所有者のM氏（プライバシー保護の観点より伏字）より2015年1月に直接譲り受けたもの。この度、現所有者である三國谷氏より、当館に寄贈申し出があり、収集された。

入手にあたっては、前所有者のM氏と現所有者の三國谷氏が北海学園大学のサークル「Free Formless Jazz Orchestra」の同窓生であること、そして他団体と一緒に活動していることから譲渡の話があり、そして譲り受けるにあたった。

現所有者はこの譲渡があって以降の2年間、本資料を用いた演奏活動を数々と行った。北海道、東京都、埼玉県、千葉県、愛知県と様々な場所での演奏活動を行っているため、場所によっては潮風などによる楽器本体への悪影響（メッキ剥げ、金属サビ）が出ている可



画像2 指掛け部がすべてリング(※1)



画像3 U・0字フックの例(※2)

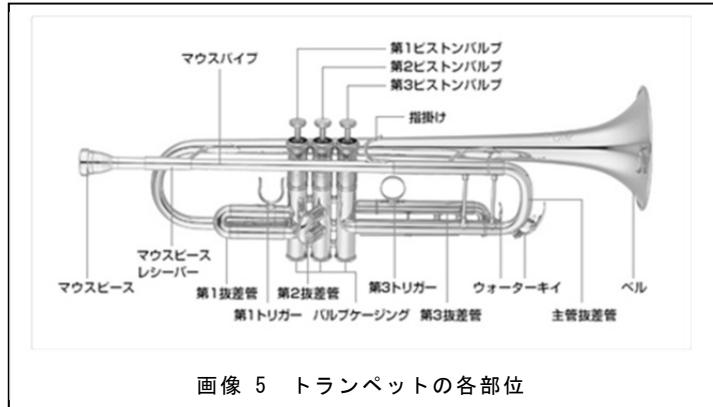


画像4 ピストルグリップ

能性がある。ただし、潮風による影響はその後のメンテナンスによって被害を最小限に抑えることができる。

その他補足事項としては、各部位の名称(画像 5)について説明する。

トランペットは、いくつかの金属をつなぎ合わせて造られている。

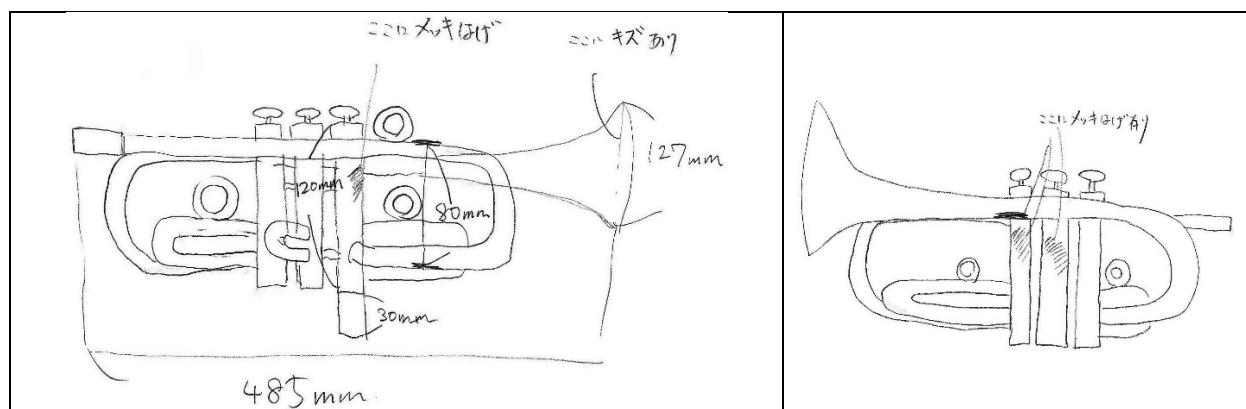


画像 5 トランペットの各部位

そのため、ベルと記載されている部分はバルブケーシングと呼ばれる部分に繋げられるまでは完全に一体となっている。この部分はベル管という。このベル管を1つの金属素材のみで作られているものを「ベル一枚取り」と言い、製作にはある程度熟練した技術力を要す。したがって高価なトランペットは総じて「ベル一枚取り」という技法が採用されている。「ベル一枚取り」は、金属素材1枚のみを使うことによって素材に「溝」がなくなり、ほどよい吹奏感やより繊細な音色が得られる。他には「ベル二枚取り」というものもある。これはその名の通り、ベル管を2つの金属素材で作っている。これは「ベル一枚取り」ほどの技術力を要しないため、比較的安価なトランペットにはこの技術が用いられている。

キズや修復歴については、ベル部分に1か所、鋭利なもので引っ搔いたような傷跡がある。また、ベル管の下部、2番抜差し管に大きく塗装剥げがある。他には、ベル管の上部に硬質なものを落として凹みが生じたため、修復作業が行われている。詳細は、Condition Reportにて記載する。

#### コンディション・レポート (Condition Report)



資料のコンディションに関しては、Object Description Report - 2において少し触れた。まずは外見のコンディションについて述べる。

本資料は、前述の通り前所有者から譲渡されているもので、いわゆる中古品である。そのため、経年による劣化を含めて数々の劣化が見られている。

まずは、マウスピープ部分であるが、ここは手を当てる部分であるため、手の汗による

劣化であることが推測される。この類の劣化は随所に見られ、使用していくうちの経年劣化としてはやむを得ない事例である。バルブケーシングの後面、ベル管のバルブ付近下部、第2抜差し管ケーシング部分にもこの劣化が見られる。これらの劣化はすべて、手を直に当てて長期間演奏していたことから発生すると推測する。

次に、ベルの外側部分であるが、ここには何か鋭利なもの、またはそれに準ずるもので引っ搔いたような跡がある。これは経年によるものではなく、何かしらの不注意により発生してしまったものと推測する。また、ベルの縁部分にはかなり細かい傷が点在している。これは楽器を地面や机などに置くときに置いた面と該当部分が擦れたことで発生したキズと推測する。

凹みと修復については以下の通りである。

ベル管上部に硬質なものを落としたことにより凹みが生じていた(画像 6)。この凹みは修復済であるが、該当部分周辺には修復の際に生じた修復痕が残っている。

ベル管でベルと正反対の箇所には凹みが存在する。この凹みはその度合いがさほど大きくないとの所有者による判断により、修復をせずにそのままにしてある。

内面のコンディションについては以下の通りである。

内面では、本資料を使用しているうちに唾や息が液化したものなどによる水垢、ヘドロが発生する。また、そういった汚れが発生している中で本資料を使用しないまま放置すると、その汚れが乾燥して管の内部にこびり付くことになってしまないので、フレキシブルクリーナーと呼ばれる長めのワイヤーの両端にブラシが付属している掃除器具を用いた管内の手入れが必要である。また、この手入れにはプラスソープと呼ばれる洗剤を用いることが一般に推奨されている。

このように、トランペットは経年による劣化、使用者の過失による劣化という2つの劣化要因が存在し、前者の経年劣化は避けられないものである。専用のクロスによる手入れは素材の酸化をあくまで遅らせるものであって、完全に阻止することはできないとされる。またシルバークリーナーというものがあり、これは銀メッキ表面の黒サビを硫化還元することで、銀メッキの表面を研磨せずに汚れを除去し、銀メッキ本来の輝きを出すことができる。また、他にも楽器用のシルバーポリッシュが市販されている。これはその名の通り研磨剤であり、銀を削って本来の輝きを取り戻すものである。研磨されることによって演奏自体に支障が出たり、楽器本体の寿命を減らしてしまうので奏者の間では最も敬遠されている手入れ方法である。本資料の手入れ保存方法に関しては Required Environment で詳しく記述する。



画像 6 落下物による凹みの例  
(へこんだ当時の本資料画像を使用)

#### リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

保存の際に気を付けることは、Condition Report に記述された劣化のうちの1つである経年劣化である。これを防ぐことが最も重要である。表面が銀メッキ加工されている当資

料の黒ずみや変色は、空気中の硫化水素や水分に含まれる二酸化硫黄と銀が反応して表面に硫化銀が生じる「硫化」と、空気中に放置することで酸化銀が生じる「酸化」と呼ばれる現象が原因となって起こる。また、銀メッキの酸化を完全に防止する防止剤は、楽器という観点だけでなく未だ存在しない。したがって保存時に空気中に放置する際は、こまめに専用のクロスで資料をくまなく拭くことが必要である。特に部位間の狭い空間は注意、工夫して拭かなければならない。前述にあるが、あくまでクロスなどによる手入れは空気中に放置することによって生じる「酸化を遅らせる」行為であり、完璧に酸化を阻止することは現状不可能であるため注意してほしい。

次に管内部についてであるが、基本的に展示による使用のみと考えられるため、水垢の発生などは考えられないが、受け入れ当初においては内部が水垢で汚れている可能性があるため、柔軟性の高いフレキシブルクリーナーと、プラスソープと言われる洗浄剤、そして水を使用してくまなく洗浄する。この時プラスソープは、プラスソープ1に対して、30度～40度の温水10～15の割合の水溶液にする。洗浄後は内部に残った水滴をスワブと呼ばれる布で何度も通して拭う必要がある。全て拭い終われば終了であるが、楽器を使用しない場合は定期的にマウスピースレシーバーよりバルブオイルを流し、管全体に渡るようにマウスピースレシーバーより息を吹いておくと内面の経年劣化も遅らせることができる。日常的に楽器を使用する際はオイルを流す必要はない。

次に管そのものの保管場所に関してである。上から物が落ちてくる、ぶつかるなどによる凹み・キズを防ぐために、本資料より高い位置に物を置かない。また、本資料の上で作業は絶対に行わない。資料を置き場所はかならず平面とし、資料と接触する面は柔らかめの素材にするなど、基本的に割れ物と同等の扱い方をすることが求められる。凹みは楽器としての価値を著しく下げてしまうので、特に注意が必要である。

温度設定に関しては、金属であるので当然温度による伸縮は発生してしまうので恒温での管理が妥当である。湿度に関しては、湿気が少ない通気性の良い場所での保管が必要である。

### ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

取り扱いの際の注意点は、Required Environmentと類似するが、基本的に割れ物と同等の扱いをすることである。また、持ち運びの際には手のひらに滑り止めのゴムがない、綿やコットンで出来た手袋の装着が必須である。身近なもので例を挙げれば女性向けで手のナイトケア用の手袋が好ましい。これは手垢による表面の汚れを防ぐためであり、もしも滑り止めがある手袋を使用すると資料表面に傷が入ってしまうため、滑り止め付き手袋は絶対に着用しない。しかしながら、滑り止め無しの手袋で金属を持つと大変滑りやすくなってしまうため、必ず両手で指掛け部分に指を掛けておくなど、何があっても落ちないような工夫をしておく必要がある。落としてしまうと、凹みや歪みが生じてしまったり、ピストン部分が床と接触してしまうとピストン自体が歪んでしまい使用することが不可能になってしまう。

ピストン部分は非常に繊細であるため、真下方向以外の動きは絶対にさせない。これを守らなければバルブの動きにズレが徐々に生じ、ピストンが戻らなくなったり、最悪押せなくなってしまう。また、ピストンボタンをつないでいる金属が折れてしまうこともある。

抜差しできる部分は無理な力で引っ張らないこと。また、正しい向きで抜差しすること。そして、第1、第2、第3抜差し管は第1、第2、第3それぞれのピストンと連動している。例として第1抜差し管を抜差しする際は、第1ピストンを下までしっかりと押しながら抜差ししなければならない。さらには、抜差しできる部分を重点にして持たないこと。必ず当資料を持ち運ぶ時は、ベル管のU字の部分や、バルブケーシングをしっかりと握ること。

周囲の様々なものに注意して運ぶこと。壁や机、小物など、これらにぶつけてしまうだけでキズや凹みが生じてしまうため、よく注意して持ち運ぶこと。そして、当資料を下にして作業は行わないこと。物を落として当資料に傷をつけることを防ぐためである。

万が一、楽器を落としたり傷つけてしまった場合は、たとえ外傷が目視で確認できなくとも、楽器のリペアマンに相談した方が良い。

### エクジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

展示としての設置の仕方は大きく3つある。

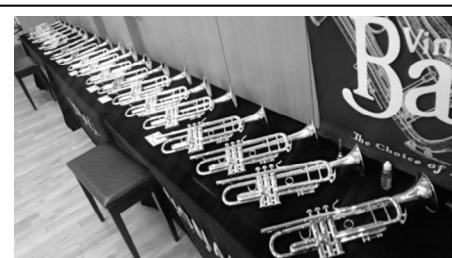
1つ目は、ベルを下にして立たせるように展示する方法である（画像7）。これは専用のスタンドを用いて設置する方法で、楽器屋で最も見られる展示方法である。奥行きがない空間の場合や、展示するトランペットの数が多い時、上下の空間を使用することで楽器を置く面に接する表面積を最も小さくすることができ、より多くのトランペットを並べることができる。欠点としては横からの力に弱く、万が一子供が展示ケースにぶつかったり、地震による揺れが来た場合は倒れてしまうことが懸念される。

2つ目は、寝かせる展示方法である（画像8）。これは専用のスタンドも何も使用せずに、ある程度安全に設置できる方法である。このように展示する際は、下を柔らかい素材の生地にすることで資料を置くときの衝撃を和らげるようとする。また、落下を防ぐため、に資料の大きさギリギリの台は不適切である。最低でも四方に10cmは余裕のあるサイズの台を用意すること。欠点はスペースを取ってしまうことである。まして多くの物を展示しようとする際はかなりスペースを必要してしまう。

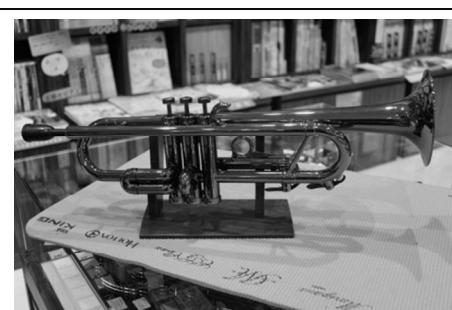
3つ目は、本来楽器を使用するときの向きで展示



画像7 立てて展示する



画像8 寝かせて展示する



画像9 スタンドで展示する

する方法（画像9）である。これは少なくとも一般向けには市販されていないスタンドを使用する。この場合、スタンドの入手が困難という点が欠点である。しかしながらこの方法は、トランペット本来使われるべき向きで展示されることで、最も美しい展示方法である。また、角度などをつけることで躍動感をも表現することができる。ちなみに、この展示方法はニッカウヰスキー余市蒸溜所内ウイスキー博物館における、「竹鶴政孝が愛用していたコルネット<sup>(注)</sup>」においても同様の展示方法が用いられているなど、展示としては最も優れた展示方法である。この方法は、奥行きのあるショーケースがあると大量にトランペットを並べて展示することができる（画像10）。



画像10 池部楽器店の様子

これら3つの展示方法を説明したが、展示する際は展示する台や周辺の環境、そして博物館としてどの年代の客層をターゲティングするかを考慮したうえでそれぞれ最適な展示方法を考え出す必要がある。例えば、前述した楽器の知識に疎い子供による破壊が考えられてしまうターゲティングの博物館である場合、展示ケースの中で寝かせて展示することがベストであろう。1つ目のやり方をだと、もしも展示ケースを揺らしたり展示ケースにぶつかってしまうと、たとえ展示台の資料接触部分が柔らかい素材で出来ていたとしても何らかの不具合が起きてしまう可能性は十二分に考えられる。したがって、そういったテーマの博物館で展示する場合は2つ目の案がベストだと言える。しかしながら、展示ケース自体を壁の中に埋め込むことで外からの衝撃に強く耐えられるようにするやり方もある。こういったことができる場合においては、この限りではない。

また、トランペット専用の博物館のようにターゲットがトランペットに詳しい大人たちである場合は、故意による破壊はあまり考えられないため1つ目、若しくは3つ目の展示方法が望ましい。

### レーベル（Label）

万人向けと、よりターゲットを絞ったパターンを用意した。

前者はトランペットってどんなものなのかを知らない、そんな人にも見て分かるような基本的な情報を載せ、更に豆知識も載せた。また、子供や漢字の読めない人にも読めるようルビを振った。フォントやフレームはあくまで音楽の楽しげな様子を伝えられるようなものにした（Label 1）。

後者の方は2つのラベルを作成した。一つは本資料のモデルについて（Label 2）あり、もう一つは本資料のブランドについて（Label 3）である。楽器に関わっている人に完璧にフォーカスし、それぞれについての特徴を述べたラベルとなっている。フォントやフレームを少し落ち着かせ、楽器の持つ高級感を漂わせた。また、こちらに関しては敢えてルビを振っていない。

これら3つのラベルに共通していることは、フォントサイズについてである。各ラベル

で使用した全てのフォントサイズは3の倍数を用いている。これは読む側への配慮で、人間の感覚としてフォントサイズを3の倍数で分けると読みやすいという側面を利用した。

## トランペット (Trumpet)

金管楽器の一つ。マウスピースというものを使って、唇を振動させることで発音することができる。管は、全体として円錐型。しかし、全長の4分の1~3分の1ほどは円筒形であり、長円状に巻かれている。管を全て伸ばしていくと、およそ1メートル30センチほどになる。

【製造元】XO

【製造年月日】不明

【型番】SD-S

【材質】真鍮

Label 1  
トランペットのみがメインではなく、樂器の一部として紹介するような  
テーマの博物館の場合

## SD-S (XO)

スローテーパーベルとスタンダードマウスピープの組み合わせによる、遠達性のある明るい響きが特徴的。心地よい抵抗で長時間の演奏に適しており、大編成の吹奏楽やオーケストラに向いている。

【材質】真鍮、洋銀

【調子】B♭

【スペック】ボア ML、ベル127mm、イエロープラス 1枚取り、銀メッキ仕上げ

### Label 2

トランペットをメインとし、  
トランペットを演奏する人や、  
トランペットが好きな人に向けた  
テーマの博物館の場合  
～本資料のモデルについて～

## XO Trumpet

株式会社グローバルが設計し、台湾のJUPITER社で生産したものを厳選、チューニングした楽器。見た目は華やかでシルバーと金のコンビのデザインが特徴。伝統的なトランペットらしいサウンドと吹きやすさのバランスを融合させた、まさに新世代の楽器。

### Label 3

トランペットをメインとし、  
トランペットを演奏する人や、  
トランペットが好きな人に向けた  
テーマの博物館の場合  
～本資料のブランドについて～

## 引用・参考・注釈

●注……トランペットの一種

●画像 1…「島村楽器ホームページ」

(<http://www.shimamura.co.jp/cms/media/74/20131210-20131102-20131021-PT-01.jpg>)

●画像 2…「トランペット情報ネット」

(<http://www.trumpet-joho.net/picture/YTR83-dt.jpg>)

●画像 3…「トランペット情報ネット」

(<http://www.trumpet-joho.net/picture/hook.jpg>)

●画像 4…「池部楽器店」

([http://thumbnail.image.rakuten.co.jp/@0\\_mall/trumpetstation/cabinet/parts/xo-5.jpg?\\_ex=350x350&s=2&r=1](http://thumbnail.image.rakuten.co.jp/@0_mall/trumpetstation/cabinet/parts/xo-5.jpg?_ex=350x350&s=2&r=1))

●画像 5…「YAMAHA 楽器解体全書」

([http://www.yamaha.co.jp/plus/common/img/trumpet/ja/mechanism\\_p01\\_01.jpg](http://www.yamaha.co.jp/plus/common/img/trumpet/ja/mechanism_p01_01.jpg))

●画像 6…本資料の実際の画像を使用。現在は修復され、この凹みは見られない。

●画像 7…「やぎ楽器 姫路店 公式ブログ」

([http://livedoor.blogimg.jp/yagi\\_gakki/imgs/5/b/5b51182e.jpg](http://livedoor.blogimg.jp/yagi_gakki/imgs/5/b/5b51182e.jpg)) より

●画像 8…「管楽器楽器堂 OPUS 公式ブログ」

([http://www.gakkido.info/opus/wordpress/wpcontent/uploads/2015/05/150506\\_112644.jpg](http://www.gakkido.info/opus/wordpress/wpcontent/uploads/2015/05/150506_112644.jpg))

●画像 9…「楽器堂 OPUS イオン高松店 BLOG」

([http://www.gakkido.info/opus-aeontakamatsu/wordpress/wpcontent/uploads/2016/01/20160105\\_1.jpg](http://www.gakkido.info/opus-aeontakamatsu/wordpress/wpcontent/uploads/2016/01/20160105_1.jpg))

●画像 10…「池部楽器店 トランペットステーション」

(<http://www.ikebe-gakki.com/realshop/trumpetstation/shop-info/img/6.jpg>)

# 博物館資料ドキュメント 『月見うどんの食品サンプルキーホルダー』

人文学部日本文化学科1年 山本 ももか

## オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

資料名：月見うどんの食品サンプルキー ホルダー	
販売価格：約 500 円	製作国：日本
製作者：不明	販売店：『C L O V E R』
製作年：2016 年	製作費用：不明
サイズ：器高さ 約 2.3 cm / 器上部幅直径 約 5 cm / 器厚み 約 0.2cm 器底幅直径 約 2 cm / 器底内側円直径 約 1.2 cm 器底縁切れ込み幅 約 0.2 cm / 器側面模様幅 約 0.3 cm 器上部穴直径 約 0.1 cm / キーチェーン 不明 たまご部分直径 約 1.8 cm 海苔部分 約 縦 1.2 cm × 横 1.3 cm (観察者側からネギ側を下として見た場合の縦横とする) 麺部分太さ 約 0.2 cm / 麺部分長さ 測定不能 ネギ部分太さ 約 0.2~0.3 cm / ネギ部分長さと角度 測定不能 [測定不能とは定規・メジャー・分度器で測定できないものを示す]	
材質：キーチェーン……不明 麺つゆ……2液式レジン、レジン用着色料 麺・他具材……ビニル樹脂、シリコン樹脂	器……………プラスチック 海苔……印刷紙 [——であると推測される]
カラー：器…黒 / 麺…白 / ネギ…緑 / 海苔…黒 / たまご…山吹 キーチェーン…不明	

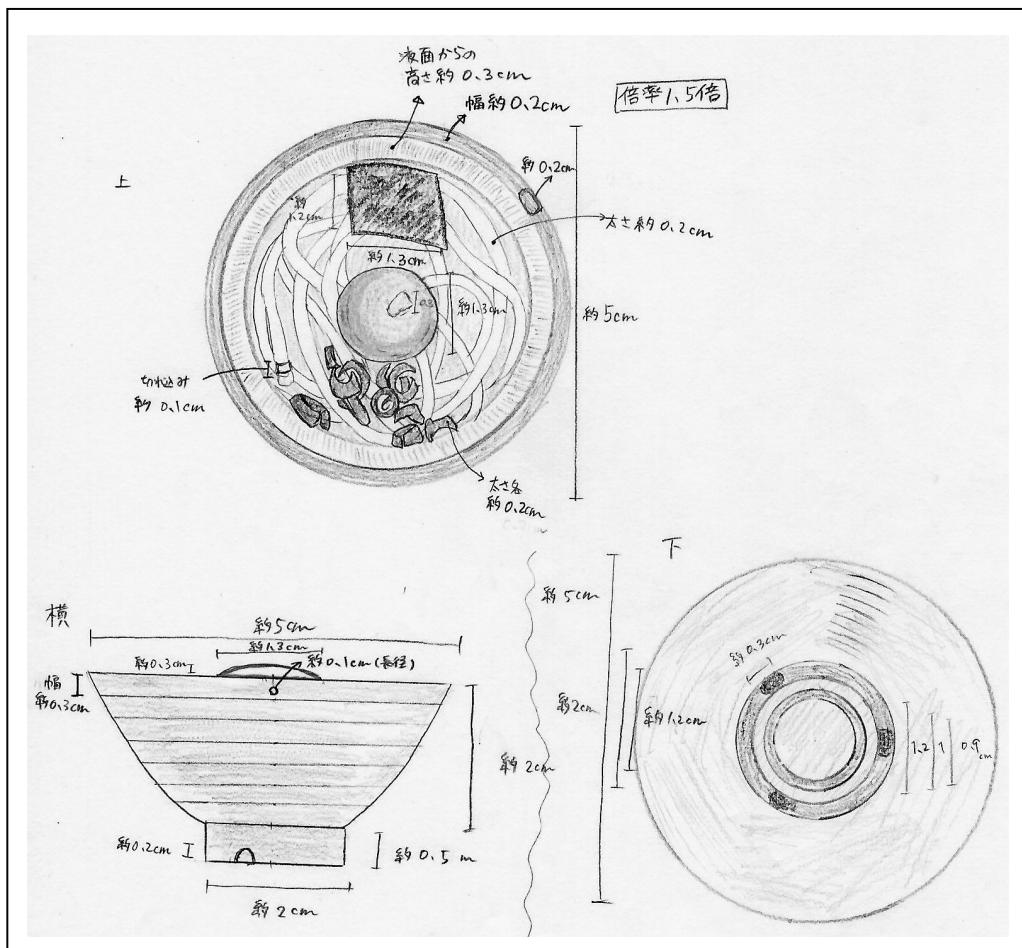
器の中に白い麺を模したものが入っており、麺つゆに見立てたレジンに浸かっている。その上にシリコン製のネギ、海苔を中心のたまごを挟むような形でトッピングされている。また各具材も半分ほどレジンに浸かっている。ネギは輪切りにされた形で、本来 12 個乗っていたが 11 個のみ乗っている。ネギ側を下、海苔側を上として見た際に一番右側に位置するネギが剥がれかかっている。キーチェーンは紛失して付いていない。キーチェーンを通す穴が器上部に空いている。器の側面には横縞の模様が入っている。器は丼型をしている。器の上部、縁にはレジン液が小さな塊（約 0.2cm）となって付着している。制作する際に飛び散ったものが固まったものであると推測される。麺つゆ部分には細かな気泡が見られる。

元々は蝶製品が多かったが手入れのしやすい塩化ビニル樹脂製の食品サンプルが普及した。

## オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

所有者は2016年6月に母親と生活用品を購入するために訪れたイトヨーカドーにて、偶然立ち寄ったテナント『CLOVER』でこの資料を発見し、購入した。購入理由として、所有者が食品サンプルを集めていたことが挙げられる。『CLOVER』とは雑貨屋である。他にもカレーライスやピラフの食品サンプルキーholderが販売されていたが、月見うどんが所有者の好物の料理であったことから、所有者はこの資料を選択した。購入後、所有者は2016年8月頃まで所有者の大学で使用しているリュックサックの外側の正面のポケットのファスナーの金具に付けていた。2016年8月末、所有者が資料のネギ部分が一つ紛失していることに気づき、金具から外された。そのためネギは本来12個であったが現在は11個である。紛失した原因是不明であるが、恐らくは紛失したネギの接着が甘かったためと考えられる。その後所有者はキーチェーンを外し、食品サンプル部分のみを部屋の棚に飾った。その際外されたキーチェーン部分は現在どこにあるのか不明であり、どのようなタイプのものであったか所有者も忘れてしまったために不明である。所有者が忘れてしまった理由は、所有者が食品サンプルのキーholder類を数多く所持していたために、記憶が混ざってしまったことであると推測される。

### イラストレーション (Illustration)



## コンディション・レポート (Condition Report)

以下観察者側から海苔側を上、ネギ側を下と見た際の左右とする。

一番右側に来るネギの根本が千切れかかっており、片側がレジンから剥がれている。また、一番左側のネギが紛失しており、剥がれた跡が残っている。紛失したネギが剥がれた部分はネギの形にくぼんでおり、麺には切れ込みが入っている。(切れ込み約 0.1mm) その他のネギの接着は強固である。麺つゆ部分には細かな埃が付着しており、器と麺の隙間に入り込んだ埃は取り除くのが困難であると考えられる。器の側面には無数の擦り傷が見られ、これらは所有者がリュックにつけて歩いていた際にできた傷と考えられる。また、キーチェーン部分は紛失し付いていない。たまご上部に 0.3mm ほど、レジンの塊が付着した痕跡があり、その部分のみ硬くなっているためシリコンの感触が無い。

## リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

ビニル樹脂は一度埃が付着してしまうと取れなくなることが多いので、埃を被らないようにショーケースに入れて保存することが望ましい。また直射日光によって変色する恐れがあるため、日光の当たらない場所にて保管する。

また、手の脂が付着することも変色の原因となり得るため、人の手に直接触れない場所に置くことも必要である。プラスチック消しゴムのような塩化ビニル樹脂素材の物のそばに置くとくっついてしまう恐れがあるため、遠ざけて保存する。

更に熱や冷温によっても劣化する恐れがあるため適温の空間で保存する。低い場所からの落下や軽い衝突などの衝撃にも弱く、壊れやすいため、高いところや不安定な場所には置かない。安定した場所が好ましい。

カビが発生する恐れがあるので、湿気やクリーニング後のすすぎと乾燥に注意する。

## ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

手の脂による変色・劣化の恐れがあるため手袋をしてから運ぶことが絶対である。また、表面が滑りやすいため、運ぶ際は器の下に手を添えて運ぶことが好ましい。また具材部分は脆いので絶対に掴まない、弄らない。小さく軽いものであるが、両手で持つこと。包み込むように持つと安全性が増すと考えられる。

クリーニングする際には力加減に注意する。表面の埃を取る際は弱めの力で行うこと。力を籠めすぎると部品が破損してしまう恐れがある。スチールたわしや金たわしなどの素材の硬いものは使わないこと。食品サンプルの表面の染料が剥がれてしまうことがある。弱い力でも汚れを落とすため、水に中性洗剤を入れよく溶かしたものに 2、3 分漬け置きしてから洗うとよい。脱色の恐れがあるので分量には注意する。また、乾かす際には日差しの当たらない風通りの良い場所が適切である。しっかり乾かさないとカビが発生する恐れがある。

## エクジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

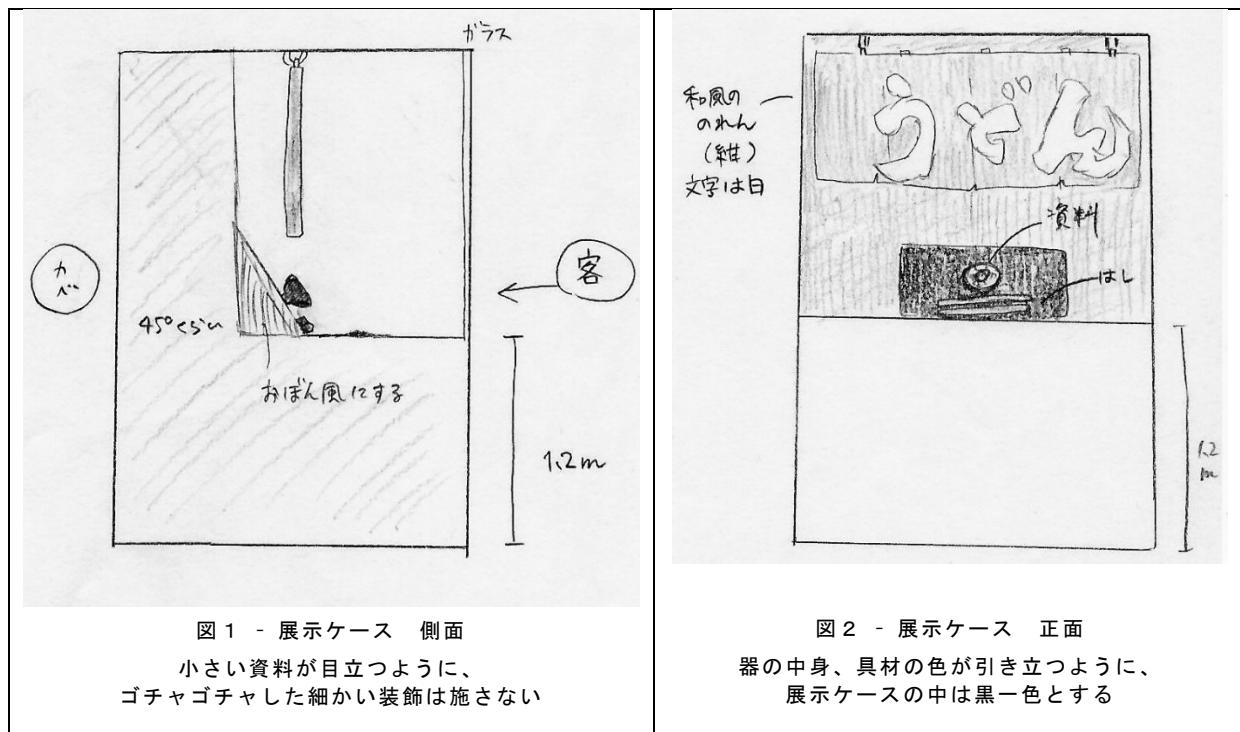
この資料は和食の模型であるので、和食の食品サンプルの傍のショーケースに設置する。

この資料はキーholderであるが、食品サンプルである。食品サンプルは主に飲食店などで視覚的に捉えることのできる腐敗しないメニューとしての役割を持つ食品模型である。よって器の中身を見せることが目的である。

この資料は小さいため、よく見えるようにショーケース内の手前近くに置く。また、器の中身を見せたいので傾斜をつける。(図1 参照)

見ている人の食欲がそそられるような展示にするため、箸を隣に置く。

埃や手の脂から守るためにショーケースの外に出したり、訪れた人が直接触れたりできるような展示にはしない。



### レーベル (Label)

形：うどんのつるつるした感じを出すため、角の丸い図形を選択した。

色：背景と縁は器の色をイメージして黒にした。また、黒は高級感を出す色であるので、高級日本料理亭をイメージした。文字色は麺をイメージしたものである。

また、黒と白の組み合わせは読みやすいコントラストでもある。

字体：和風をイメージし、筆で書いたような字体を選択した。(HGS行書体)

内容：食品サンプルとしてではなく、この「月見うどんのキーholder」についての説明を中心に書いた。食品サンプルをテーマにした展示ではなく、所蔵者のコレクションをテーマにして考えたものである。

## 月見うどんの食品サンプルキーホルダー

所蔵者 山本ももか

2016年6月に所蔵者が「CLOVER」福住店にて購入したものである。同年8月にネギの一部とキーチェーンが紛失している。所蔵者は紛失以前まではキーホルダーとして使用していたが、以降は鑑賞用としている。キーホルダーであるので一般的な食品サンプルよりも遙かに小さく作られている。

# 博物館資料ドキュメント 『トウシューズ』

人文学部日本文化学科 1年 蟬塚 咲衣

## オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

資料名：トウシューズ

製造年：2015年8月以前

製造者：不明

製造場所：日本

販売元：シルビア

品名：マイセシオン トウ

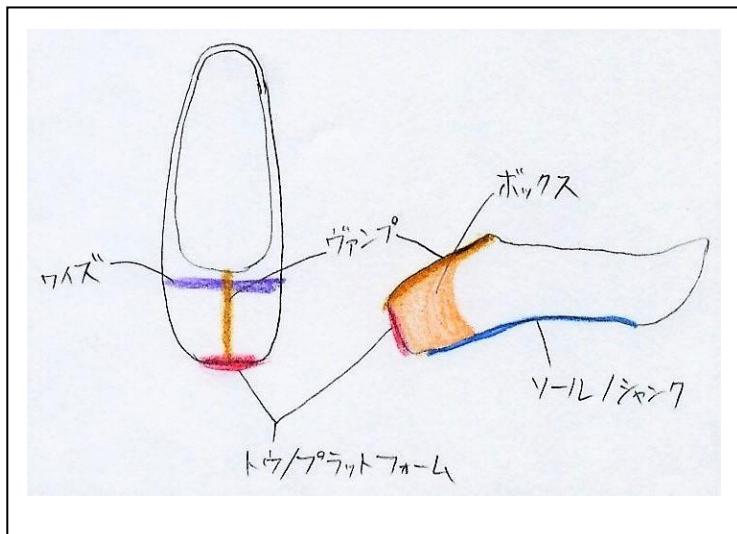
品番：SSYK/15020

サイズ：25.5cm

靴幅：D（標準）

色：赤

素材：表面・サテン、靴裏・革



クラシックバレエにおいて、主に女性が履く靴（コメディバレエなどでは男性も履く）。ある程度の筋力がなければ骨折や捻挫の危険性がある。初めてつま先で踊ったのは、18世紀ごろと言われている。何枚も布を重ね、糊でかためてこの靴の形状を作り、靴裏は革が縫い付けられている。種類によって形や革の素材が異なるため、ダンサーは自分の足に合ったトウシューズを探し出し、さらに自ら加工を施すことによって足に馴染ませる人もいる。潰れると立てなくなってしまうため、消耗品である。

バレエ・ダンス用品の専門店、シルビアの「マイセシオン」という種類のトウシューズ。「舞セシオン」と表記されることもある。ボックスがやや広めで安定感がある。ボックスに丸みがあり、足のトラブルが軽減される作りになっている。シャンクは硬めで、足裏をしっかりと支える。音がうるさめ。そのため、トウ先に消音・衝撃緩和剤を使った「マイセシオン“トウマジック”」もある。金額は、トウシューズ本体が税込7,344円。通常はユーロピンク、ピンク、ロシアンピンクの三色だが、赤色は特注なため追加料金が発生し、プラス税込540円で、合計7,884円。

トウシューズから足が抜けることがないように、メッシュ素材の肌色のゴムを縫い付けてある。靴の中は、生地も靴底もクリーム色であり、靴底部分には Sylvia の文字とロゴマークがちりばめられている。靴の中の側面部分には「7153K」と刻まれている。脚に結ぶためのサテンの赤い紐が対になるようについている。靴の裏に「MS 25<sup>1</sup>/<sub>2</sub> D Sylvia Ltd Made In Japan」と刻まれている。

## オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

現所有者である蟬塚咲衣が、2015 年の 8 月頃（当時 18 歳）に購入したトウシューズである。所有者は 2012 年頃からシルビアのマイセシオンを愛用していたため、購入の際は店舗内で試着は行わず電話で注文し、店舗に取りに行った。それ以前に使用していたのはチャコットのベロネーゼ II というトウシューズであった。

使用された期間は 2015 年の 8 月末頃から同年の 10 月 4 日の約 1 ヶ月で、まだ潰れておらず、使用しようと思えば現在も使用可能である。10 月 4 日以降はチャコットのシューズ袋に入れられタンスの中で保管されていたが、触れられていなかつたため保存状態が良く、使用後についての傷は見られない。

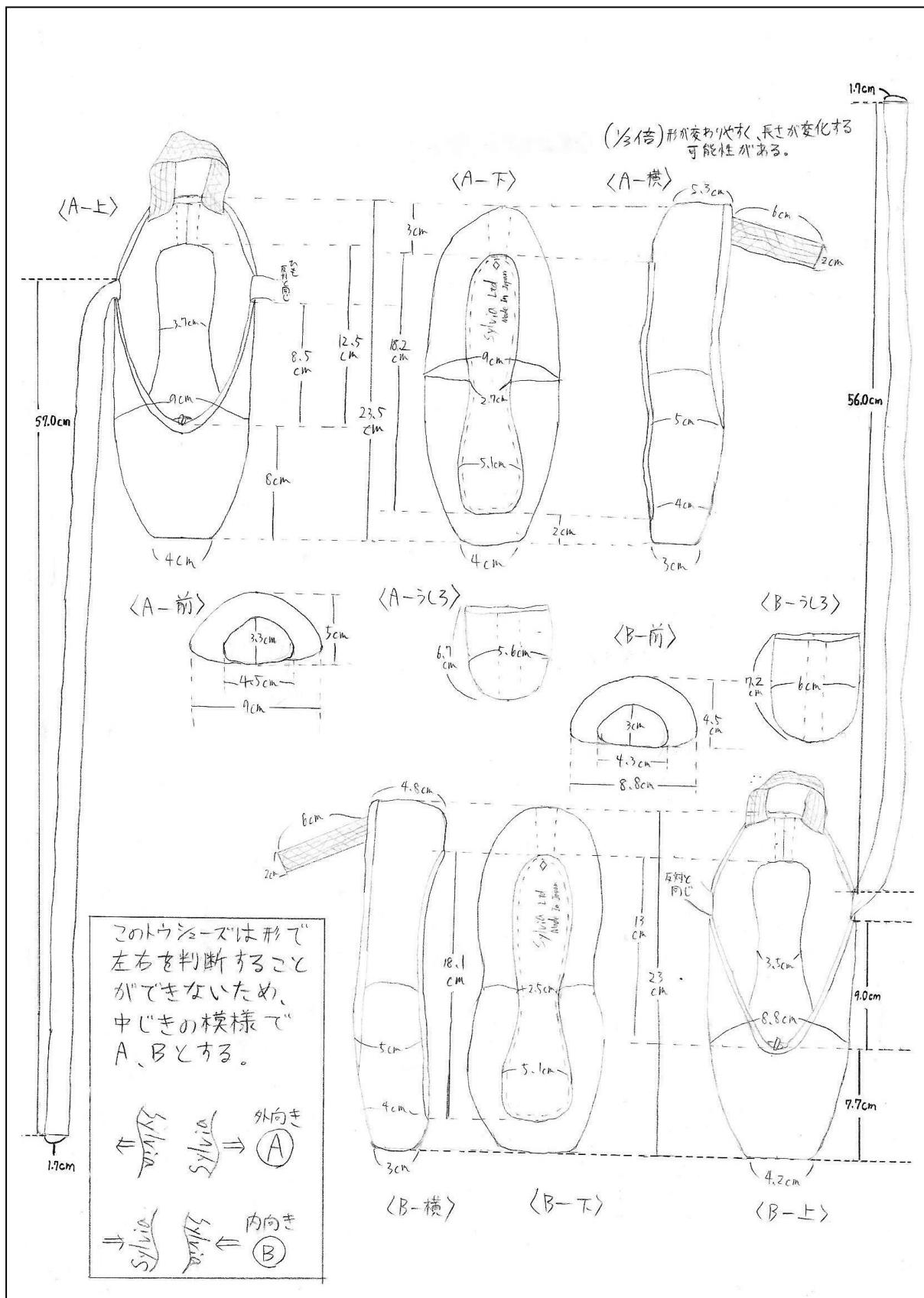
使用のされ方については、2015 年 10 月 4 日に行われた「骨髄バンク 命の集いチャリティーコンサート」において、ノーザンバレエサークル（旧西塚幸子バレエサークル）によって公演された「赤い靴」で所有者が主人公・カーレンを演じた際に着用された。トウシューズは新品では足に馴染まないため、所有者は本番の約 1 ヶ月前のレッスンから着用していた。そのため、本番の床のリノリウムでついた傷以外にも多数の汚れや傷が見られる。足首固定用のメッシュ素材のゴムと、シューズの幅を調整する紐を縫い付け固定する作業は所有者によって行われ、この教室の生徒全員が行っていた。所有者は足の甲を出すために中敷きを剥がし、内部にあるシャンクをカッターで数センチ切り取り、木工用ボンドで中敷きを接着し直すという加工を個人的に行っており（下に写真あり）。脚に結ぶサテンの赤色の紐は結びやすい長さに切っており、先をライターの火にかざしてほつれないようにしている。また、踊りによって左右の脚の使用頻度がかなり違うため、所有者は片方だけ先に潰れることがないようにトウシューズの左右は決めず、レッスン 1 日おきに交代させていた。

所有者が 2003 年から 2015 年まで所属していたノーザンバレエサークルは、35 年以上の歴史のある教室であった。しかし、生徒の減少と後継者不足によって、この「赤い靴」の舞台を最後に教室をたたんだため、このトウシューズは教室の最後を飾ったものといえる。



指の手前にあるシャンクを  
このように切る

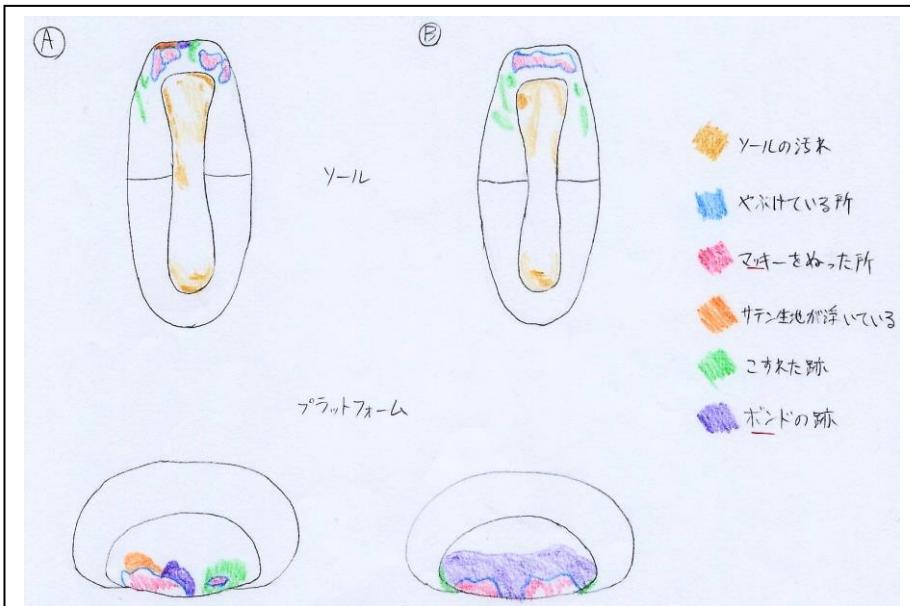
## イラストレーション (Illustration)



## コンディション・レポート (Condition Report)

レッスンと舞台で使用されたため、ソールとプラットフォームを中心に傷や汚れが多く見られる。使用された場所は、札幌市南区真駒内にある青少年会館コンパスのリハーサル室とホール、わくわくホリデーホールの大ホールであり、それらの床の摩擦によって付いた傷がほとんどであると思われる。しかし、いつどの傷が付いたのかは不明である。

Aのシューズ（中敷きのロゴが外向き）とBのシューズ（中敷きのロゴが内向き）には、場所は違うが共通の原因でついたと思われる傷が多数ある。ソールには土踏まずを除いて、足の平とかかとの部分に擦れて黒や茶色に変色している場所がある。そして、ターンアウトをする時に床に触れる側面の部分にも擦れた跡がある。ソールとプラットフォームの間は特に損傷が激しく、サテンの生地が剥がれてその下の白い布が露出している。本番の前からその状態だったため、所有者は白い部分を隠すために本番直前に赤色の油性ペンで塗ったという。つまり、現在白い布が露出している部分は、本番の舞台で付いたものであるといえる。黒く何かが滲んだようなところは、一度剥がれても残っていたサテン生地の布を木工用接着剤で接着した跡である。また、サテンの生地が浮いてしまっている部分もある。



## ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

落下の衝撃に強く、持ち歩いているときに万が一落としても形が崩れることはないが、サテンの生地が摩擦に弱いため、落とした際に床などに接触すると傷ができる危険性がある。持ち歩く際は周囲のものに気を配り、鋭利なものによるひっかき傷を付けないようにする。サテンの紐が長いため引きずらないように注意し、折り目が付かないようにプラスチック製の板に巻き付けるなどする。摩擦が起きないように柔らかい素材の手袋を付けることが望ましいが非常に滑りやすいため、靴全体を下から支えるように持つ。側面を摘まむようには持たないようにする。また、手袋を付けていても爪で傷つけないようにする。

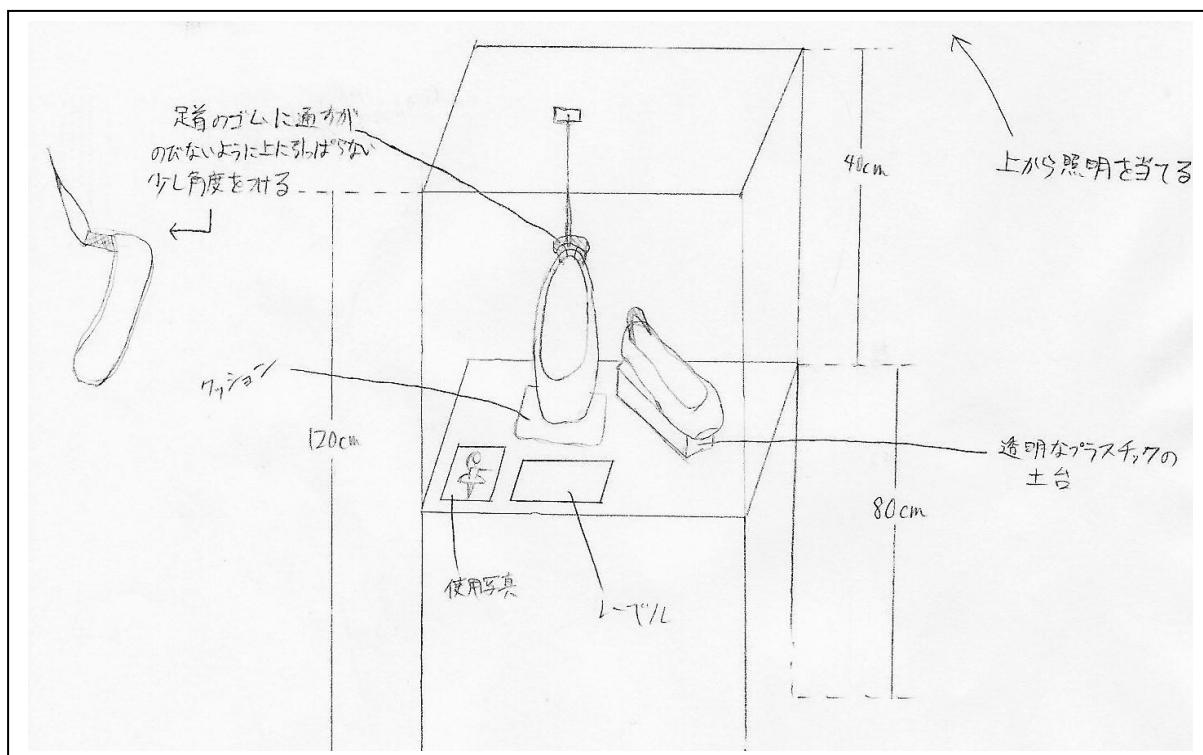
## リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

汗と触れながら使用するものであるため湿気にはある程度強いと考えられるが、湿気が残っているとトウシューズが柔らかくなる可能性がある。湿気による変化は使用しなくては感じられないかもしれないが、この資料を見えないところから劣化させる危険性がある。さらに、カビが発生する可能性もある。そのため、高温多湿な場所は避け、乾燥剤を一緒に入れて、部屋の温度や湿度を一定に管理できる部屋に保管するべきだと思われる。サテンは摩擦に弱いため、靴同士の接触を避けられるように柔らかい素材で包む。

トウシューズには革や糊、木が使われていることもあります。虫に食べられる可能性もあるため、通気性の良い場所に保管する。したがって、保管する箱も通気性に優れた素材を使う。防虫剤は虫を寄せ付けない効果があるが、人体に悪影響を及ぼす可能性があるため、消毒や燻蒸を行って定期的に駆除することが望ましい。その際には同じ保管庫に収蔵されている資料も一緒にを行い、その前に薬品が資料に害を及ぼさないか調べ、対処してから行う。予防として、資料を保管する場所への飲食物や花の持ち込みを禁止する。

## エクジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

前後左右や上からも見ることができる透明のケースに展示し、どの角度からも見られるように壁に接する面は作らない。周りにある展示物とは人がすれ違えるくらいの幅をあけ、展示ケースを囲むようにして人が立つことを想定する。防犯のために強度のあるケースが望ましい。靴は顔の高さで使う物ではないため、大人が少しかがんで見る高さに設置する。



照明は、舞台では上方向から当たるため、この資料も下からではなく上から照らす。全体に光が均一に当たるように、至近距離からではなく天井から当てる。紫外線によって色が変わってしまうことを防ぐために、紫外線の出ない照明か紫外線カットのフィルターを使用する。

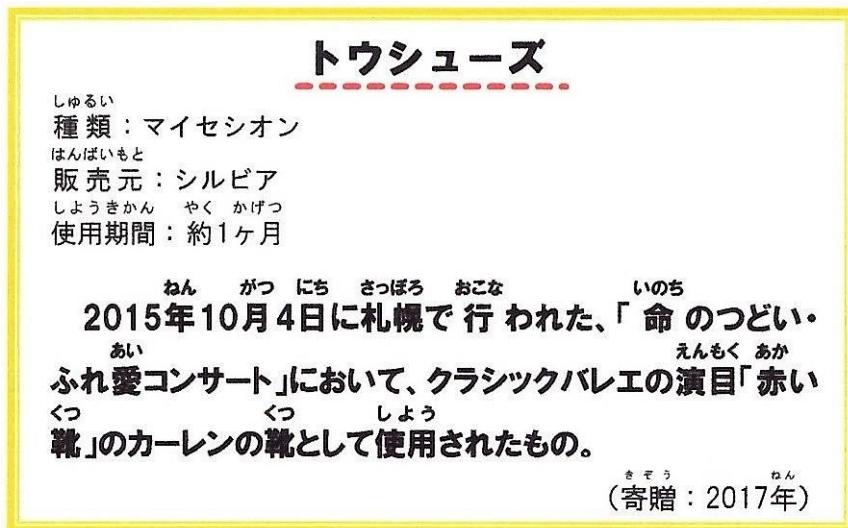
1つは透明な糸でケースの上から吊し、下はプラットフォームが埋もれないような薄めのクッションで支える。もう1つは透明なプラスチック製の土台を作って高さを底上げし、プラットフォームの部分が見えやすいようにする。平行に並べず、先端が外側に向くようになると、バレエらしい立ち方も再現できる。レーベルの側には実際に使用しているときの写真を添える。

### レーベル (Label)

靴の側に置いても目立ちすぎないよう、あまり派手にしない。文章も簡潔にまとめ、何に使われたのかという情報を載せる。資料に使用した傷が残っており、それも見せる展示にするため、データは種類や使用期間を記すことによって、どのくらいの期間でこの資料がこの状態になったのかも伝わるようにする。

フォントは資料名や説明文をゴシック体にすることによって、資料の曲線の雰囲気や童話の作品で使われたという柔らかな印象を持つてもらえるようにした。女性や子供が見る機会が多い資料だと思われるため、このような優しい印象が合っていると思う。漢字には全てルビをふり、子供でも読めるようにした。データの部分と説明文で文字の大きさと書体を変えることで、データにあまり興味のない人でもすぐに説明文に目を向けることができるようとした。

色は白地に黒で見やすさを重視し、資料名の下の色は資料の色である赤を使用した。枠線はレーベルを強調するために付け、バレエという華やかな印象を与えるためゴールドを使用した。



# 博物館資料保存レポート 『ペンギンのぬいぐるみキーホルダー』

人文学部日本文化学科4年（レポート作成時3年） 笹原 春香

## 資料の名称と説明

資料名：ペンギンのぬいぐるみキーホルダー

ペンギンのぬいぐるみで、ボールチェーンがついたキーホルダーである。ぬいぐるみの大部分はボア生地で、くちばし部分が合皮、くちばしの一部分、赤いところと足のパーツはボア生地とは別のやわらかい布地でできている。目はぬいぐるみの目によく使われる黒いビーズのようなものが縫いつけられている。

ボア生地は頭と羽の横前方の一部が黒、頬と胸の一部が黄色、胸から胴の下にかけてと羽根の下部分が白で、4色が使われていて、それぞれのパーツは白い糸で縫い合わされている。ボールチェーン部分は、ぬいぐるみの頭に縫い付けられた黒い輪になった紐に、マルカンと、上下のパーツが回転する接続用の金具でつながっている。資料から見て左の足よりも少し後ろ側には輪になった状態のタグが付いており、頭側の表面には「M O G M O G P L A T」の文字と横向きの熊の影絵のようなシンボルと「A s a h i y a m a z o o」の文字が、そして足側には「M A D E I N C H I N A」の文字が印刷されている。このことから、資料は中国で作られたと考えられる。

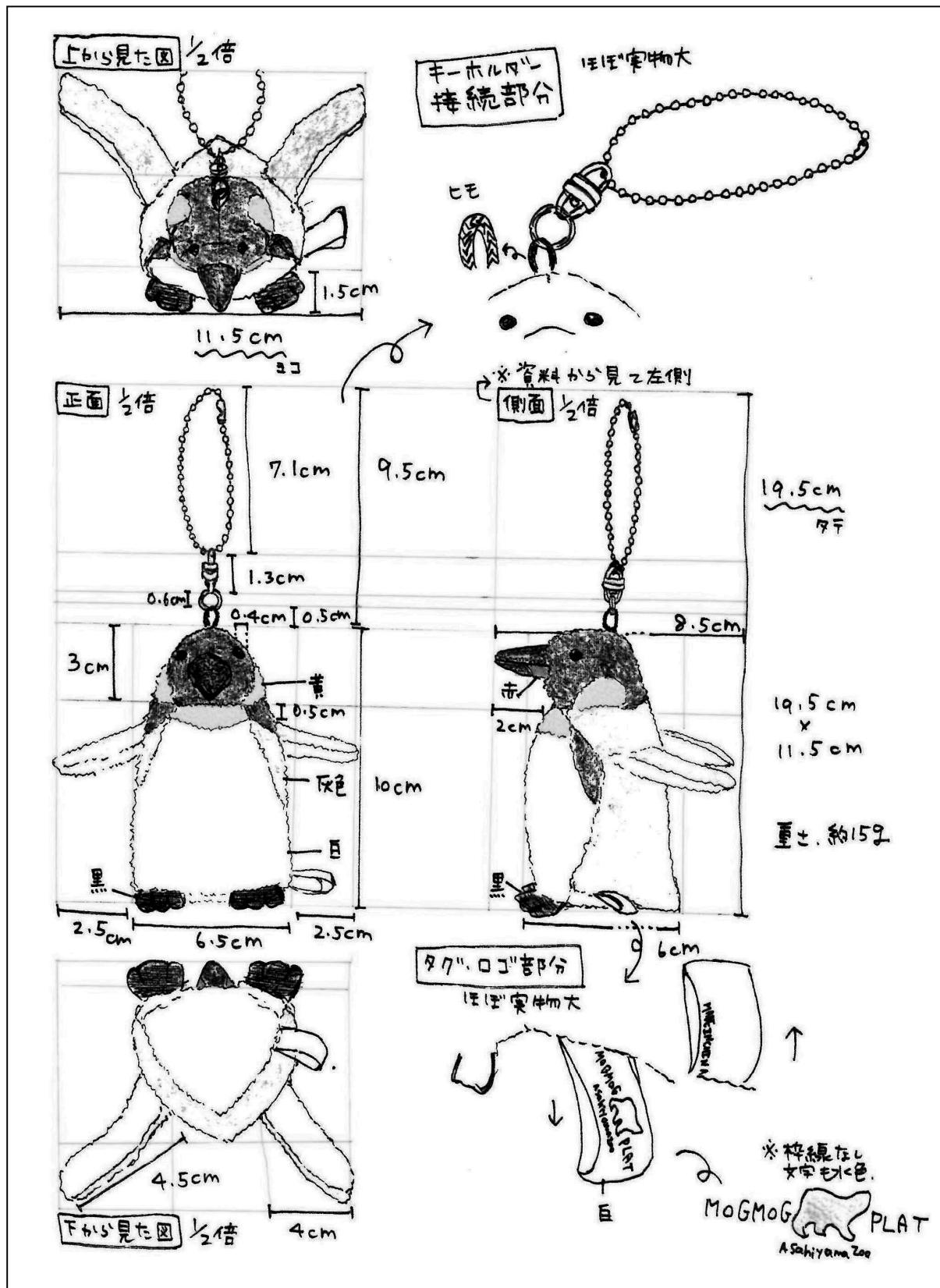
ぬいぐるみの内部には、上から、綿、「鳴き笛」という空気で音が鳴る袋のようなもの、丸くツブツブした感触のペレットが入っていることが感触などからわかる。この「鳴き笛」はぬいぐるみの中に入っていることがあり、それがある部分を指でつぶすように押すと「ピイ」と音を出す。

資料の重さは約15gで、大きさは、タテがボールチェーンを真っすぐ上にのばした状態で19.5cm、ヨコは羽根の部分をのばし、最も大きく読み取れる状態で11.5cmである。ボールチェーン自体の長さは9.5cmなので、ぬいぐるみのタテの大きさは10cmとなる。

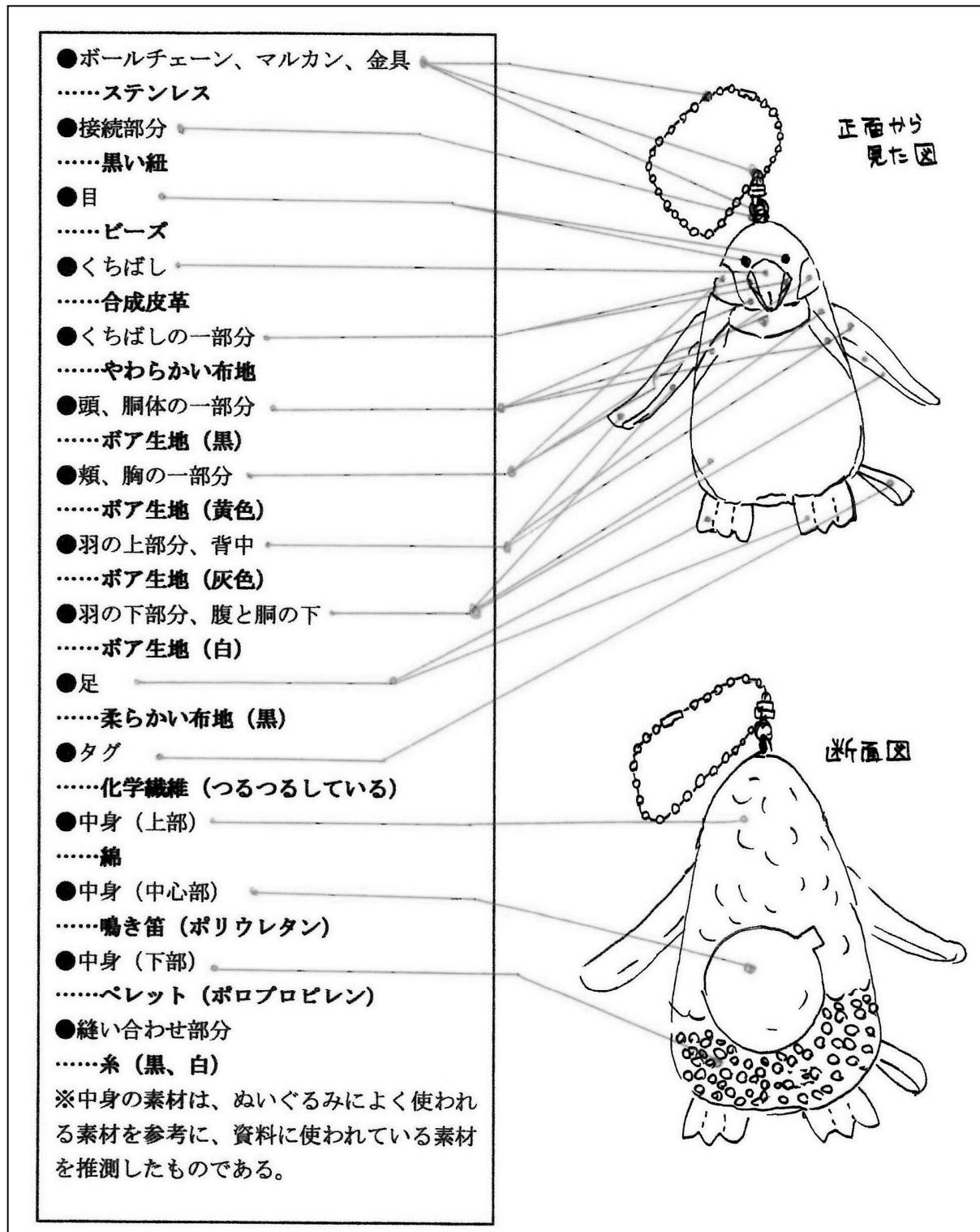
資料の所有者は笹原春香で、2015年に北海道旭川市に行った際に、旭川駅の旭山動物園の公式ショップに立ち寄った際に資料を購入した。購入されてからは所有者の部屋に置かれていたもので、目に見えるほどの破損は特に見当たらない。

資料名は単に「ペンギンのぬいぐるみキーホルダー」としてあるが、詳しい情報は不明である。色の配置などから、エンペラーペンギンもしくはキングペンギンのぬいぐるみであると考えられるが、そのどちらかまでの判別は資料のみでは難しい。しかし、ホルダーを販売している旭山動物園では、冬の「ペンギンの散歩」というイベントが行われており、散歩しているのはキングペンギンであることから、キングペンギンである可能性は高いと思われる。

資料の図解とデータ



## 資料の構成素材分析



## 保存、および展示の際の環境設定

	温度・相対湿度	温度・光	空気
1. ステンレス	鉄が主成分で、ある程度の乾燥は良い。高湿度は腐食の可能性がある。	光が当たることで温度が上がり、熱を持つ可能性がある。	屋外からの微粒子によって腐食の恐れがある。
2. 紐	高湿度で色あせる可能性がある。	1と接することから、熱が伝わることがある。また、弱化の恐れがある。	微粒子が付着する恐れがある。
3. ビーズ	乾燥しすぎと湿気に注意する。	1と同じ。	同上。
4. 合成皮革	同上。色あせる可能性もある。	表面の劣化、弱化が考えられる。	同上。
5. 布地、糸	高湿度により、急速に色あせたり、弱化するおそれがある。	同上。	繊維、人の皮膚などの微粒子も付着しやすく、害虫、害獣を引き寄せることがある。
6. ボア生地	同上。	同上。	同上。生地の毛足が長く、微粒子を絡めとりやすい。
7. 化学繊維	同上。	同上。プリントが薄れる可能性がある。	5と同じ。
8. 綿	同上。	強さによっては劣化の可能性がある。	内部なので微粒子の付着の可能性は低いが、害虫、害獣による問題が起こる可能性はある。
9. 鳴き笛	乾燥による劣化が予想される。	不明。	音を鳴らした場合、微粒子を内部に呼ぶ場合がある。
10. ペレット	同上。	不明。	8と同じ。
総合	低湿度になりすぎないように留意しつつ、高湿度にはより注意する。生物劣化を避けるため、高温・高湿度は避ける。	繊維などは特に光によって劣化するので、長時間強い光を当てないようにする。	織物への微粒子の付着に特に気を付けると同時に、9での空気の変化に注意する。

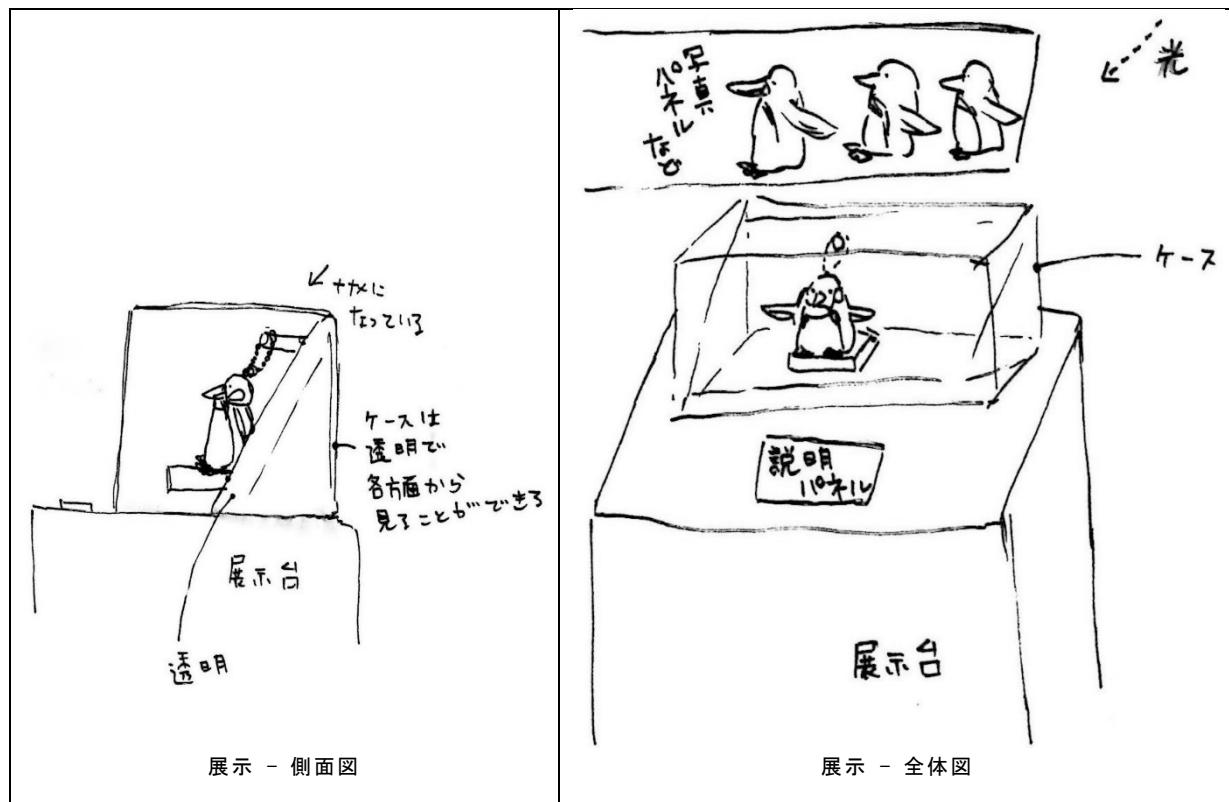
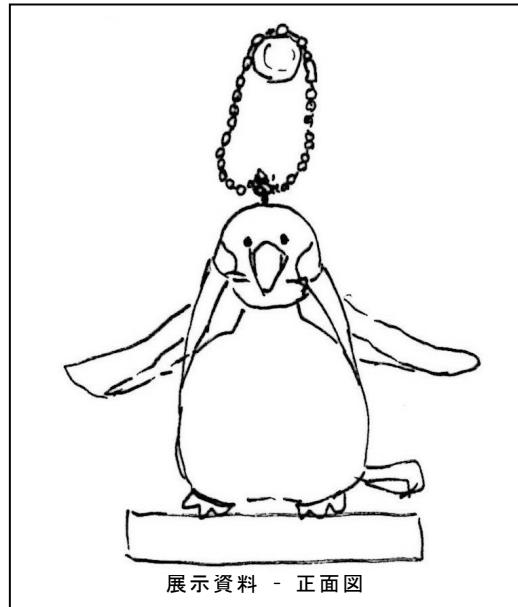
### 展示・収納方法：

ステンレスが金属素材であることから、腐食を防ぐため、除湿器を使用する場合は塩化リチウムが使用されていないことを確認する。繊維が多いため、害虫に注意し、相対湿度は50%～60%程度に保つ。光が当たる場所は避け、ステンレスと繊維が接しないように影響のない紙などに包んで安置する。定期的に状態を確認する。

## 展示図とその説明

展示：

- 光は直接当てず、遠くから、色などがしっかりと見える範囲で資料を照らす。
- 外から人が運んでくる、または博物館内部に存在する微粒子を付着させないため、透明である程度横、背後が見えるケースの中に展示する。
- ボールチェーン部分は接続部分に負荷をかけない範囲でぬいぐるみ本体と接触しないように心がける。
- 展示室または展示ケースの中を湿度50%～60%に保つ。
- 展示室全体では難しい場合、適切な乾燥材などをケースの中に資料から少し離して入れる。



## 編集後記

ここ数年来、学芸員課程の履修者が道内のミュージアム施設を訪問して現地で研修を積む機会を増やそうと努めている。受け入れ先の事情や負担を考えると、大学側の要望が簡単に実現できるわけではない。しかし、大学の教室内で実施する講義とは明らかに違い、この種の課外活動で学ぶべき点は少なくない。まず、学生の表情からは、取り組み方の真剣さと参加できるよろこびが伝わってくる。

今号は、こうした事例のなかで、新ひだか町と奥尻町で実現した文化財や地域特有の民俗・文化にかかる研修の内容を特集として紹介した。レポートにも学生たちの感謝の気持ちが充溢しているが、我々をこころよく受け入れ、温かい指導を下さった関係者のみなさまにこの場を借りてあらためて感謝申しあげたい。また、資料整理や交通費の一部には、大学の2016年度地域連携事業の予算を活用させていただいたことも付記しておく。

経済のグローバル化・多極化や生産年齢人口と労働生産性の低下というような先行きの見通せない社会変動のなかで、明治以来の近代教育が提供してきた知識・技術を受動的に習得する学習から離れ、課題を見つけ出し、多様な人々と協調しながら主体性をもって解決していくことのできる能力を高める姿勢が求められている。昨年3月にまとめられた高大接続システム改革会議「最終報告」のなかでも、これから時代にむけた教育改革において、特に重視されているのがいわゆる学力の3要素である。これは、(1)十分な知識・技能、(2)それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力、(3)これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度、の3点からなる。

これらは、近年、人生を豊かに送ることができるとしてにわかに注目されている「非認知能力」(社会情動的スキル)とも連動する部分が少くない。「思いやり」「協調性」「やりぬく力」「社交性」「自制心」「勤勉性」など、人間が生きていくために大切な能力全般を指すとされる。「非認知能力」は、学力、IQなど可視化できる「認知能力」とは違って目に見えにくいため、成長の度合いを実感するのは難しい。これまでの観察から、教室内の講義においてよりも、種々の不測の事態にも対応できなければならぬ「課外活動」の場面でこそ、はるかに多くの能力を開花させられるとの確信をもっている。多くの方たちのご理解を得ながら、一人でも多くの学生たちにその能力を育てるチャンスを与えたい。

手塚 薫